

あべこべ危険(ウマ娘)

2Nok_969633

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あべこべ貞操逆転ウマ娘 vs 利用規約 vs ダークライ

ウマ娘あべこべ世界 第100回天皇賞秋の広告イメージは
こちら

目次

鋼の意志	1
シックスセンス	9
逃げけん制	19
深呼吸	25
脱出術	34
下校後のスペシャリスト	45
勢い任せ	54
慧眼	64
天命士	72
遊びはおしまいっ！	80
シンパシー	87
迫る影	100
迅速果断	110
詰め寄り	120
ギアシフト	127
弧線のプロフェッサー	134
努力家	144
スプリントターボ	153
姉御肌	175

鋼の意志

神様、始祖の女神様がもし本当に居るのだとしたら…どうか哀れなゲーマーとしてのトレーナーを許してはいただけないでしょうか。

この世界にお約束、というものがあるのでしたらどうか、どうか忠実に沿ってしまおうような運命を少しでも変えていただきたく存じ上げます。

そしてこの原作を私は知っているからこそ言える立場ではございますが敢えて述べさせていだきたいのです。

私は何故転生をされてしまったのでしょうか。

そして何故この世界であべこべとは？

果たしてこれは、男が生きる意味とは何処にあるのでしょうか？

最早何も言うまいで…。憂鬱な気分です。1日がまた始まるともなると心には虚しさしかない。朝の光を浴びて今頃彼女達は気持ち良く朝練をしていることだろうが…俺の目に映る空はただただ憎いだけの何かでしかない。それだけこの世界はどんな戦場よりも危険な場所だということを表している。

俺は俗に言う神様に会っていないタイプの転生者である。はいはい、テンプレ乙…と思った人もいるだろうが少しだけ俺の愚痴を許してはもらえぬだろうか？

まず、この世界は美的感覚などの物事については変化は無い…が、あべこべであり貞操は逆転している。男女比率は約1:5を維持したまま400年が過ぎようとしているようだ。

説明することはないだろうが簡単に言えば男が生まれる確率が低い、というイかれたよくある創作物でしか描かれる事のない世界に転生している。

そしてよくある転生者として自覚することが多い…：しがたない一般人、それが俺だ。まさかこんな嘘から出てしまったような事を自らが

経験するとは思わなかったが、それ自体は受け入れるしかあるまい。別段困る事はほぼ無いと言つても過言では無いのが事実であることに違いはない。金、仕事、面倒な人間関係その他諸々リセットされてしまつてはいるものの別段、困るような人生を歩んできたわけではなかったからだ。その事に何の不安を抱くことも無く、ある時が来たら適当に恋愛でもしてそのままこの世界にいる男と同じような運命を辿りながら平穩に暮らしていけるものだ…そう思っていた。まあ、平穩の意味が彼らとは違つたろうけれども…それは置いておくとして。

では何故、こんなにも困惑したまま人生を謳歌しないのか。というところに疑問点が浮かび上がるだろう。

仮にも運良く典型的なあべこべ世界に転生したのだ。ハーレムも作り放題、世界を掌握するもよし。約束された緩い人生を歩める絶好の機会を逃さずして男だろうか？否、断じてこう答えるだろう。俺自身でさえもこう答えていたはずだ。

「当たり前前だわ。可愛い娘達を犯しに犯しまくり、女物のパンツはあるだけコレクションし、素股しまくるわ挿入しまくるわ胸を揉みしだきながらしゃぶりつくわ、高級マンションで乱行パーティーをし、存分に快活、性に淫に乱れ、思う存分楽しんでやるわ！」と、大声に出していた筈だ。

但し、この世界にあのウマ娘が存在している世界ともなれば話は変わってくる。

ウマ娘…それは転生する前の世界にいた『馬』という生物と共に競技を元にして作られたキャラクターである。競馬という西洋から派生された賭け事は広く知れ渡り日本でも大いに盛り上がっていたのは言うまでもない。そこには笑いもあれば涙もあり、その一頭一頭が歩んだ歴史の中にウマ娘も存在しており派生作品の中の一部としてゲーム、小説、漫画と幅広く普及していきブームとなった。

特徴としては、ウマ娘というだけあつて性別は雌限定で容姿は端的

に言っても美女しか存在しない。加えて人間を遥かに凌駕する力など：馬の能力を人間としての姿に合わせつつ上手く特徴を掴んだある種のデザイナーベイビー：とでも呼んだほうがいいのだろうか。俗に言えば可愛い顔をした化け物である。言い方は：正直すまない。

ただそれを凌駕するだけの物語性や史実、忠実の再現性の高さは多くの人々から愛されるのも時間の問題であり、かくいう俺もその1人であった。設定がどういうものか、というよりもそれに見合う心に響く何かがあればそのような小さな事を気にしないほどには夢中になつていたもので：育成は欠かさずキャラクターからサポートカードに至る全てを手に入れるほどではあつたのだ。はつきりと断言しても良いほどに、俺は馬とウマ娘の魅力に染まっていた。

そんな世界に転生をした。そう：この目でしつかりとウマ娘を見るほどには確認も出来たしはつきりと第2の生をこの世界で送れ、との御通達が来たかのようにこの地に踏みしめながら降り立ったまま時間が過ぎた。

簡潔に述べよう。俺はどんなに好きな物語だったとしても：こんな設定が付け加えられた世界に転生をしたくなかつた身だ。

我儘を言うな。そんな好きになつてしまった世界に生まれたのなら本望であると同時に、何と素晴らしいことか、と嫉妬の赤い雨が今にも降り注いでも可笑しくはない。だが：この世界は残念なことを後押ししてしまうが：あべこべが基準となつている。

極論ではなくこれは規定として定められているような扱いではあるが各国、どこに行こうとこの世界でトレーナーになる、もしくははなりたいというような男は誰1人としていない。最早男の方は女性そのものを嫌悪しているほど、と言つても良いのである。

理由は様々で諸説あるが：やはり一番大きい事として挙げられるのは単純に力で勝つ事は疎か、生物としての威厳も無くなった男に価値が無い、ということの方が多い。俗に言えば性処理と子供を作るた

めだけにいるようなもので：社会にとっては邪魔の一言で片付けられてしまう。とはいえ、流石にこんなイかれた世界にも生物としての本能はあるようでこの男女比率も結果としては：女性も女性であることを良いことに男性に襲いかかるまではテンプレである。ウマ娘の場合はそこに発情期、というものが加わるためリスクが人一倍大きい。

つまりは：性衝動が収まらずにうまだっち、うまびよいが行われることは日常茶飯事だったそうだ：過去に。今は不明ではある：が、それでも巨大なタイヤや運送車など人間では持つことが不可能な物を軽々と持ち上げたり、時速60km以上で走る化け物共がいる巢に「Hey・君かわういゝねえ！よかったら俺と一緒に夢を追いかけてみないかい？」なんて言葉をかけてみる、死ぬぞ。

さらに懸念すべき点がある。

それは元ネタが馬だということ。

この世界は馬がない代わりにウマ娘がいる事について：承知済みだろう。諸君らも知っているように馬の元ネタから取っているトレン学園に数多く所属している彼女達の性欲は基本的に高い傾向になると踏んで見て間違いはない：と勝手に想定している。

というのも、不運や不幸によって子を残すことなく死んでしまった子供達を除いては、そうであると：思ってしまう程にオタク知識というものは厄介なもので、一度コンテンツに目が眩めば一目散に我先にと知識を得ようとするものだ。：もうお分かりいただけるだろう。特にメジロマックイーン、ゴールドシップを含んだ彼らはその中でもとびつきりだと記憶をしまっている。本能としても組み込まれているであろう彼女達のあらゆる欲は人間の心によっても作り出されていることも要因の一つだろうが：それは少なくともコンテンツという壁によって守られていた。が：ここではそれが機能するかもわからない。何せ俺たち人間にはそうした護られるべきものが無いからだ。そもそもこの世界でそんなコンテンツは通用するほどの余裕は無い。貞操逆転は文字通り死を意味するのである。

そこに畳みかけるようにあべこべ要素が加わったらどうなる？元

の世界であれだけの怪文書やらファンアートやらが作られたあの素晴らしい文化が覆るほどに入れ替わってしまった場合：そこはまさに

地獄デース!!？

憧れである彼女達にも、敬意を込めて死んでしまった彼らとも会えることも無く：ましてやこの世界にウマ娘のアプリがあるわけでも無い。仮に会えたとしてもうまぴよいされるのがオチとしか思えないのだ。

現に、

『次のニュースです。今朝、東京都府中市のマンションにて：男子学生にわいせつな行為をした疑いで、男性保護警備員である女が警視庁に逮捕されました。容疑者はおよそ12年前からこの家に入出し、わいせつな行為を繰り返していたとみられ、警視庁は余罪なども含め調べているそうです。』

生き地獄である。彼女達に会うことは疎か俺を含め、男は基本外に出られない事が普通となってしまうている。普通の女性でこの有り様だ。彼女達も：例外ではないだろう。：というか男性保護警備員が事件を起こすとか相当だったんだな。しかも割と近所となると：油断は出来ない。

それでも彼らが元ネタとなった彼女らがターフで一生懸命走っている姿を、願わくば生で見たい。

出来る事ならトレーナーになって彼女達を支えたい。その想い間違いはなかった。しかしこれはあまりにも酷すぎる。何故目の前に手が届きそうな場所に、彼女達がいると言うのに：アプリ同様、こんなにも触れさせてもらうことも出来ないのだろう、と：現実は余りにも非情だ。

そんな時だ。前世でもよく見るようになっていた実況をこの世界でも聞く機会があったのだ。偶々流れ出たその音源から：俺はある種の考えに至った。

ーそうだ、実況者のような：ネットで男がやるのはかなり危険だが、非公式でも映像さえあれば：いつその事、解説役兼サポーターになって彼女達を見る事が可能なのでは無いか？と。ー

この世界に競馬、競バという賭け事自体には概念は無い。競う、と言ってもあくまでもオリンピックのような選手としての活動を踏まえて結果を見るのが第一だ。

だが、それでも人によつてチエツクするところは違うものだ。その場でしか味わえない臨場感は諦めるとしても：例えば、この大会ではこの子が優勝するだろうという予想などを立てる人はアニメ然りゲーム然り：幾らでもいた。そこに変化が無ければ：少しくらいは悲劇を回避することも可能なのでは無いのだろうか？流石にターフで散ってしまった命を見ることは無いだろうが、彼女達のレースをあくまでも想像でだが：味わえるのではないだろうか？

そう思い立った俺は早速ウマッターなどありとあらゆるコンテンツを調べ：準備を整えた。幸いにもお金、時間は幾らでもある。レースの出走予定からアカウントの情報、まだ見ぬ子達の入学予定、体調、事前の走り方などなど：やっている事はストーカーだがこの際、そんな考えには至らなかつた。寧ろ人型となった事でより観察しやすくなつてしまったためか、オタク特有の収集癖がより事を加速していただなんて：当の本人は思いもしなかつた。

だからだろうか。こんな事になるなんて知らなかつたら俺は：こんな半端なクソ野郎にならずに済んだのかもしれない。やはり、と言うべきだろうか：予想外なことが起きてしまった。そもそもこの世界では、男がネットにホイホイと手を出してはいけなかつたのかもしれない：たった一つの：ある一件を皮切りをきつかけとして始まつた投稿：それは、自身が注意を怠つたことによつて事態を大きくする事になるとは考えもしなかつたのである。結果として、これらは収まる事を知らなかつた。

s s sさんがあなたの投稿にいいねをしました
s s sさんがあなたをフォローしました
G o L G o Lさんがあなたの投稿にいいねをしました
T・Nさんがあなたをフォローしました
T・Nさんがあなたの投稿にいいねをしました
G o L G o Lさんがあなたをフォローしました
C u r r e nさんがあなたの投稿にいいねをしました
O c o m eさんがあなたの投稿にいいねをしました
O c o m eさんがあなたをフォローしました
M a y A i rさんがあなたの投稿にいいねをしました
C u r r e nさんがあなたをフォローしました
M a y A i rさんがあなたをフォローしました
R u d r f 7さんがあなたの投稿にいいねをしました
M c e e e nさんがあなたをフォローしました
M c e e e nさんがあなたの投稿にいいねをしました
n r t b r i a nさんがあなたをフォローしました
R u d r f 7さんがあなたをフォローしました
n e i n e iさんがあなたをフォローしました
m h b rさんがあなたをフォローしました
d i a | s t nさんがあなたをフォローしました
K S B Rさんがあなたをフォローしました
N u nさんがあなたをフォローしました
p | mさんがあなたをフォローしました
D ☆ Sさんがあなたをフォローしました
m j 5 6さんがあなたをフォローしました

・
・
・
・

・
・
・

完全に始動していない準備段階の状態で嗅ぎ付けられました。通
知が止まりません。助けてください。

シックスセンス

物語はここより少し過去へと遡る。

PC特有の放出した熱と、カタカタと指の動きに合った音を鳴らして1日が終わろうとしている。

慣れていない事をするというものは予想以上に疲れるところではあるが、俺は一心不乱にある物を作ろうとしていた。

ウェブサイトとアプリである。

おいおいおい、ちよい待ちたまへ：君はウマ娘の支えになる為にトレーナーのような事をやるのでは無かったのか？と思うだろう。実際のところ、考えに至った日からは慣れない頭をぶっ続けで使い、ウマ娘の構造、筋肉、走り方などなど人間とどのように違うのか：怪我の種類も含めたありとあらゆる項目に手を出し万全の状態を作ろうとした。

結論からいえば：うん、無理。

まあ色々理由は幾つかあるものだが、ネットに投稿するといった形を含めた多くの物事に関して、ウマ娘以外の人たちから必要以上に時間を奪われる：と言った理由がやはり大きくリスクも予想以上に高くまだ早い、との結論に至った。

ではサポーターの方はどうか？というと：これまた手元にどうしても必要なものがありすぎるのだ。生で見ながらデータを集めなければならぬ事、担当している子と他の子との比較、その日の天気、場の状態、走り方のフォーム、癖、体格、体調、性格：こればかりはどうにもならなかった。

勉強すればするほど、たかがゲームだけの知識でどうにかなるものでもない事の方が多く、所詮はハリボテな武器だけでどうにかなる程甘くはない。

当たり前ではあるのだが、トレーナーというものは誰もが素人だっ

たとしても彼ら彼女らは化け物を操っている魔術師のようなもので：それでもどんなに熱心であろうと、試験をいくつも掻い潜っても、地方に配属されてしまうことなんてザラにある。加えて中央に入ったとしてもベテランのトレーナーに敵うはずもない：。主人公というものはそれこそプレイしているのは俺たちユーザーではあるものの、ゲームだからこそ成り立っていた事でありここでは通用はしない。そもそもチートが紛れている競馬世界の馬主が基本であり馬も同じようなものだから：それに合わせる形でゲームも同じくして主人公といい桐生院さんといい：まさしくチート、神プレイヤーだ。

正直言うと諦めかけたのだ。この途方もない壁を乗り越えるにはやはりというべきか：世の中はそんなに甘くはないということを感じてしまった事があまりにも大きすぎたのだ。現実には時に厳しいものであると再感したのである。

そんな焦りと虚無感に襲われていた時だ。あるデータが目に入った。

トレセン学園に入学した時と卒業する時のデータだ。

別段、トレセン学園は何もレースだけが全てではないのだろう：とも考えてはいたのだが、退学の理由や選手の行く末などに着目した結果あることが見えてきた。

・仮令レースで勝っていたとしても：そこから現れてくるプライドの殴り合いの実力社会（主にトレーナー同士のものも含めて？）

・序列から落とされた時に訪れる精神的崩壊、文武両道を掲げるレベルの高さから来る挫折

・その子達を支えなければならぬトレーナーのメンタル面による失調具合

・トレーナーの減少から見られる担当がつかない事によって目立つようになつてきたレースに出場出来るかどうかを見極める機会の減少

調べた限りではあるが特に目立ってこれらが明らかに露見していた：このことも踏まえて改善すべくやよい理事長の打開策としてトウインクルシリーズが開催されていたのかもしれないと思うと

中々に辛いものではあるが。

その中でもやはり目立ったのはデビュー戦である。

スカウトされるためには誰よりも目立つ必要がある結果はどうであれ、選手として登録されなければ先には進めずどうにもならない。

さらには自身で悩みを解消しながら試行錯誤しつつも決められた日時までに、全てを整えて挑まなければならない苦行のおまけ付きである。

人間の受験勉強より苦痛じゃない？とまで思わせるこの徹底ぶりには流石に引いた。いやまあ…元の世界にもそういうストイックな人達ってのはいたけれども。

と、まあそんな事を学校全体でやっているわけで…しかも勝てば勝つほど大勢の人が観に来るであろう試合に参加出来るようになる…生半可な覚悟と半端な精神では成し得ないものだ。

せめてその舞台までの手助けはしたいものではあるのだが規則上トレーナーが付くとしても、あまり近すぎる関係というのも良くはない。本人の自主性や今の段階での能力を見て判断しなければ意味がないのだ。だからこそその選抜レース前に目を向けた。

実際の馬も歳を重ねる前には色々とあることの方が多いため、例外さえ除けばウマ娘の彼女達も同じような悩みを抱えていたことを思い出したのだ。…ならばいつその事だ。後の育成は他のトレーナーに任ずとしてその準備段階であれば、こんな俺でも可能なのではないか？との考えに至り今に至る。自身の力でこのサイトに辿り着いたのであれば、結果としてそれは自分自身をどう見つめるべきか？を知ろうとしている証であると考えてしまえば問題は無い。法さえ犯さなければ何をやっても良い理論である。

それ相応の知識は…恐らく手に入れているはずだ。あとは俺が教えられるような人間であるかないか、それだけのことだ。

なんて上からカツコつけても実のところ、ウェブサイトの方はもう設営済みで完成はしているが…人が来ない。いかんせんウマ娘の母数の関係上そりやそうだ！っていうツツコミが飛び交うだろうし、そもそも何の実績もない事もあってか信用度もない場に現れるはずも

ない。自己欲に駆られた哀れな男がただ一人虚しくそこに居た。ぐつとこらえ我慢し反省をし改善の一手を打つ：今できる事は頭を抱える事じゃない。だからこそアプローチの仕方を変えている最中である。今優先すべきはアプリの方だ、と。練習チャートなども自分で記録出来るようにする機能を付けなければならなかったりするため、ど素人が作るにはこれまたそれなりに色々準備が必要であることが頭を悩ましているが、そんなことは彼女達に比べれば些細なもの。ゆっくりではあるが着々と作業は進んでいた。

とは言うものの、正直に言ってしまったえばウェブサイトを作っただけで満足してしまったこともあるのだろう：ここ数日は疲労感が少しばかり溜まって肩を重くし、頭も限界を迎えていたのかもしれない。気が付けば今日も時計の針は2時を過ぎていた。

パキパキつと指や肩、首を鳴らし立ち上がる。瞼もかろうじて開いているがそろそろ眠りにつかなければならなさそうだ。今日はこれまでにしよう、と寝支度に取りかかろうとした時だ。ピコンつという音と共にメールが届いたアイコンが表示された。

『ウマ娘Q&A 夢を叶えるための最初の手助けをします』

怪しい名前のサイトを作った俺からすればよくメールなんてしてきたな、と8割方驚きが心を占めていた。が、ふと冷静になってしまふのもなんというか：自分の性格の現れかはたまた前世からの癖か。必ずしもメールを送った相手がウマ娘とは限らない：ネットであれば悪質な悪戯であることの可能性も高かったりするので最初の方こそメールをチエックするのに戸惑いが生まれたものだ。が、初めてのユーザーの衝撃のあまり頭によぎった心配事は一瞬のうちにとくに消え、徐々に嬉しさが込み上げてきた。どんな人だったとしても何かしらの悪質な書き込みだったとしても、彼女達と同じように見つけてくれたことが：どんなことよりも嬉しかったのだ。はてさて、神のイタズラか。悪魔の気まぐれか。実際に目で見てみればそこにはデビュー戦の事について悩んでいる書き込みがあった。俺は喜びに満ち満ちて発狂するかの如く飛び回る勢いで椅子に座った。その後はそれはもう：喜びと感動の渦が俺の眠気を吹き飛ばして画面にのめ

り込む勢いでそのメールを一文一文丁寧に読んでいき気が付けば返答を返していた。悩める子が満足するまで何度も画面と睨めっこを続けた。そして時間はとうに7時を過ぎた頃：その日は流石に限界だ、ということ伝えて一旦は打ち切りとなったが：そんなことよりも良い朝を迎えられた事に満足をして俺は倒れるようにベッドに移動してその日は寝た。

その子とのやり取りは半年にも及んだ。流石に深夜帯でのやり取りはその日限りで控えるようになったが、来る日も来る日も資料やデータを覗く日々は体にこたえたこともあって自身の体調管理も気にし始めた頃には、お互いに顔は見えなくとも画面越しにトレーニングを確認する毎日を送っていた。いつからかアプリも順調に普及し、サイトにもユーザーが少しばかり増えた。その頃には、その子も含めて複数人に対して同時にやりとりが出来る様に成長を遂げた。おかげで体調管理にも一層力を入れることとなり、環境に慣れた事もあって当初不安視していた事が嘘のようにブロガーとして活動をやるようにもなった。個人的に勝手に収集したデータを元に、今後伸びるであろう子達の特徴から適性、レース順位の予想までありとあらゆるものに着眼点を付けまくったブログもやはり好評、とまでは行かないが：かなり充実した毎日を送っていた気がする。

そして選抜レースやデビュー戦が終わった後、初めに来たその子は：デビュー戦を見事圧勝した、という報告をしてくれた。他の子も無事突破したようで、サイトに出入りしているのは1日の内、多くて約10人が精々であったが：その全員が見事に結果を出していた。それは、俺自身が最も気にしていた：サイトのユーザーアクセス数の伸びの低さ、といった低レベルで些細な事がどうでも良くなるほどで、歓喜に震えながら部屋の中で1人、ガッツポーズをして声を上げていた。涙が止まることなくおめでとう、と言だけメッセージとして添えたことが遠い昔の出来事のように思えるのは気のせいであってほしいと願うばかりである。ブログの反響も軒並み伸びてきておりそれはそれで：やはり数字が伸びることも嬉しいと感じてしまうのだ

が、兎も角：かなりの満足感と手応えを掴んでいた。そこに間違いは無かったのだから調子に乗ってしまった。傲慢な俺自身の行動が齎した結果が返ってきたのだ。

そしてやり取りをしていた子達が普通のウマ娘ではなかったのだと、後々知る事になるうとはこの時：考えも浮かばなかった。

「…景色が見えない。何も…見えない。」

前の私だったら走れたのに：身体に力が入らない。どうしたらいいか：わからない。何に苦しんでいるのかすらもわからない。走るって：何なのだろう？

曇り空が灰色に掻き乱れ、鉛のように重い足を引きずるように何もかもが濁っている。ジャラジャラと音を立てて足に絡み付いて閉じ込められる体験はあの模擬レースと同じだ。ただ：静かなだけのどんよりとした牢獄の鎖が私の精神を犯していく。足に地が付かないことを良いことにズカズカと踏み込んでくる不安は：一体いつになったら解消するのだろうか。

ダメだ、こんなことを思っているようでは何も解決しない。

「はっはっはっはっ…。」

鼓動がいつもより速い。息が荒い。足が：進まない。三ヶ月前のあの日：新しいトレーナーの下で指導を受け万全の状態で挑んだ模擬レース。結果は9位：散々な結果を出した私はそれからというもの調子は右肩下がり。私の走りにはまだ先がある、と期待されている事は嬉しく思う：なのに、何故こんな苦しみを自身で生み出しているのか。

「はっはっ…はっはっ…。」

ふと気に掛ければポツツと音が鳴る。頬に伝っている水滴がポツポツと雨が降っていることを知らせてくれた。否、それは雨では無

い。私の目から溢れ出るものが止まらなかつただけだった。それは堰き止められていたダムが崩壊するように流れが止まることは無く、周りに誰もいない中でただ1人孤独に…私は泣いていた。

「今日をもって専属トレーナーを降りようと思う。」

「…え？」

唐突に言われたその言葉に胸の中をナイフで乱暴に掻き乱されたような痛みが襲う。黒い塊が放つ失望の声と生気のない目が私を写す鏡のように覗いていた。

「な、なんでですか！私は…私はまだっ!!？」

返ってくる言葉は無い。ただ背中を向けて去っていく事に必死に抵抗しようと声を上げるがうまく話せず、口だけが勝手に動いている。

「嫌だ…わた…わ…た…た…しは…」

見えるもの全てが暗かった。1人が怖かった。

「…っ!!?はあ…はあ…」

布団を叩くかのように勢いよく捲っている自分の姿に嫌気が差す。薄いシャツに絡みつく汗と夜の静寂さに、ここが寮の自室であると…乾き切った現実へと戻してくれた。

「…夢。」

そう、夢だ。偶々見てしまった夢見が悪いものの、その感覚がやけにドロドロとしたリアルなものだからか…異様に肌に感覚が残っている。そんな時に到底眠る気分になれるはずもなく、ベッドから身を起こす。部屋の蛍光灯を付け、着替えを済まし、1人静かにコップに水を入れ椅子に座った。

ここ最近の悩みが爆発したかのように現れた。深呼吸を2度ほどして気持ちを落ち着かせる。こここのところ、レースに勝てていない事に加えて何かと落ち着きが無い。こんなにも私は脆かつたのだろう

か：1人部屋で悩む。

気分は落ち着いたが眠気も訪れる様子が全くと言ってもいい程無いため、スマホを取りテキストにサイトを眺める。別にそうしたいからそうしたわけでもなく、ただ単に何かしていないと不安だったから：といった小さな動機と悩みによるものからではあるが。

夢、不安、といった漠然なワードで検索して出てくるのはどれもこれも胡散臭いものから綺麗事を並べるサイト：普遍的なものといったらメンタルヘルスクリニックなども含めれば基本面白みがあるとは言えないようなものばかり：まあそれでも暇つぶしにはなるか、と眺めていた時：ふと気になるものが目に入った。

いかにも、とも呼べるそのサイトは極端に言えば殺風景に近いシンブルな作りとなっており、人が入った形跡がまず無い、と直感ではあるがそう判断した。しかし我ながらそんな事は今はそこに注目をすべきではなく、私に欠けている何かを質問するには絶好の場でもあると即座に判断を下していたのである。この時には背後にいるであろう人物に：もう既に見えていないにも拘（かかわ）らず惹かれていたのかもしれない。

ただ単に注意書きに書いていた内容に『匿名性厳守。あくまでも個人の見解として述べます。メールでは限界がある事の方が多いう上に情報が断片的なことも可能性として含まれますのでご了承ください。そして私の意見と担当者との教えに矛盾点などが存在した場合には迷わず担当者や自身の見解を信用、信頼してください。』とあったことも書きやすい雰囲気纏っていた事も踏まえてであった。もし万が一：仮に素人だとしたら、まず質疑者への返答の時点でバレてしまおうだろう：そこも忘れてはならない。いや、違う。別に素人であったとしてもそんなことはどうでも良かった。

実際には本能が葛藤していたのだ。物珍しいデザインだけで判断を下したわけでは無い。ただ、世の中に溢れているサイトに比べてその明らかな異様さを感じるほどに強烈な匂い：とも呼ぶべきなのだろうか？私にとっての女の勘が発動していた。そしてその本能が反応して、今は少しだけ縋りたくなくてもいいのだ、と感じたのは気

のせいでは無かった。だが、それでも今の私には必要だと…そう思うまでもなく自然と指を動かしていた。

『夜分遅くに失礼します。』

私は某学園で現在中等部に所属をしているものです。

元々走る事が好きでそのおかげか選抜レースで結果を残した事に加え、スカウトの声も運良くかけて頂き、担当が付くことになりました。

ですがそこから知識、技能などを習得し万全の状態で模擬レースに出場したものの惨敗をした事をきっかけに、虚無感や喪失感といったものが現れ始めたこと、走ろうと身体を動かそうにも思ったように走れない事に加え、今まで感じていた楽しさを感じる事が出来ません。

生活に支障をきたすような精神に重大とさせる症状などといった事は、今のところ起きてはいないと思うのですが…何かいいアドバイスはありますか？』

10分くらい経っただろうか…書いた事によって少しばかりスッキリしたように思えるくらいには落ち着きを取り戻し、徐々に眠気が私を襲ってきた。もしかしたら歩き癖の可能性もあるかもしれない。ふと先程の送信した内容を思い出す。もしも、の話ではあるが…仮に返答の内容が稚拙なものだったとしても…それでも良かった、と思っている私はここより先にあったあの景色を見る資格があるのだろうか？などと、また考えてしまうが流星に時間も時間である。

今日はもう寝ようかしら…と小さく呟きながら気が楽になったこともあり布団へ入ろうとした時だ。

突如としてスマホの光がバイブの音と共に放たれて、部屋の中を少

しばかり照らした。
そう、返信が来たのだ…あのサイトから。

逃げけん制

窓から聞こえるのはやかましい囁り。鏡に映った少女は自身を一瞥し、その顔色の悪さを知る。それでも…今日くらいはそれで良いかな、と呼んでいい日だろう。殺風景な部屋を遮るものも無く、朝日が登った事を知らせてくれた。カーテンの隙間から漏れ出た光がその証拠だ。心地良い陽気が寝不足を吹き飛ばしている。懸命に青く茂って所々に花卉を散らして、周りの若葉は風が吹かれるたびに匂いが鼻腔一杯に広がった。こんな日に好きに走ったらそれだけで1日が終わってしまいそうだ。

それよりもまずはやらなきゃいけない事がある…と制服に着替えた後、気持ちを奮い立たせ…歩みを進めた。

ノックを3回ほどして扉を開けたそこには、あたり一面に広がる資料の山が目映る。それとともにコーヒーの香りが何処と無く漂ってきて、少しばかり異様とも呼べる空間を観察してみれば数字か何かでびっしり覆われた黒板の上にはさらにメモ用紙などで埋め尽くされている。

「…おはよう。」

「はい、おはようございます。」

声の方を向けば見るからに不健康なほど青白い肌に加え、存在感が薄いとも呼べるようなトレーナーがそこにはいた。風呂に入っていないのだろう…折角の美人でもある彼女の髪はボサボサであり、ウマ娘の嗅覚でははっきりとわかるほど匂いがする…それほどまでに作業に熱中していたのだと、見るからにわかった。軽く伸びをした彼女はゆっくりと立ち上がり、パタパタと何処か飛んでいってしまいそうな不安定な足取りでコーヒーを取りに行っている。

「…こんな朝早くからここに来るなんて珍しいじゃない。どうかしたの？」

コポコポ、と流れる黒い液体と音。そして明らかに声が低い…とい

うより覇気が無い彼女をよく知ろうとすればするほど…やはりよく分からなかった。いや正確にはあまりこの人と会話をする事がない私でも分かるほどにトレーナーさんは、…否、違うだろう。昨晚の事を胸に刻み振り返って見てみれば、私も彼女もあまりコミュニケーションというものが得意では無い方だというのは丸わかりである。そんな彼女でも、と言っては可笑しいのだが多くのウマ娘をGIで何度も勝利へと導いた若きベテラントレーナーだ。

「いえ…その。話を…大事な話があるんです。」

少し強めに力を入れて言ったからだろうか。意をつかれたようにピクツとこめかみが動いたような気がした。殺伐とした押しつけられる空気の中で切り出した会話は、彼女の顔をより真剣にさせていた。重い瞼を力を入れて上げて、こちらを見つめている。

「…大事な話って？」

「ここ最近の私の悩みを…聞いてくれませんか？」

「レースで負けてからの…ことかな？」

「はい。」

困惑した表情と緊張がこちらにも伝わってくる。でもこちらとしても負けられない…そう思い真っ直ぐ見つめ返す。私がこれで愚かな運命を辿るとしても、私は言わなければならぬ。後悔しないために不慣れでも言わなくてはならない。そう…あの人から教えられた。

『結果を残しスカウトを受けた、と自分で書き記している辺り…レース直後、即座に担当が付いたのかな？…ここにある情報を見る限り中堅以上の人でないか？…そういった事は非常に困難ですし、あなた様本人が、気持ちよく走って結果を出したのであれば…ベテラントレーナーの人が目を付けた可能性が高いと予想して書いていきます。彼女らの目は優秀ですし、何よりそういう事に関しては勘が働きますから。』

で、根本的な原因は恐らく、コミュニケーション不足と戦法を変えた事によって生じた問題です。技術を身につけて挑み負けた、という事から慣れないことをした影響なのかな、と。

それでも客観的に見れば、ですが…手探りの中、お互いがより良くしていこう、と奮起しているのが自然かつ主に行われている業界で、こうした悩みを第三者に話すこと自体…まず珍しいものです。しかし、現にあなたは私に相談をしてきました。模擬レースの日程がいつだったのか存じ上げませんが、おおよそ時間が経っているものと推測して考えても…よく耐えたな、としか言いようがありません。

さらに言えば生活に支障をきたすレベルでは無い、と書かれていますが…きたすレベルでは無い程度には精神的に負荷がかかっているはずです。

まずは担当の人に悩みを打ち明けてください。そしてそこから先が鬼門となつてきます。そこさえ乗り越えられれば一気に解消されると、そう断言します。』

何という自信に溢れたコメントだろうか。ここまで言い切る人がいるだろうか。ネットという様々なものが残つてしまうコンテンツで、赤の他人が見れてしまう環境下で…たったこれだけの情報で…10分足らずでここまで当てる人がいるだろうか？心から何か燃え上がるような熱さが、ある種興奮とも呼べる形で現れた。走ることでこんな気持ちになるのは初めてだったこともあって、気が付けば無我夢中にコメントを記していた。

『はい、その通りです。作戦を変えて逃げから差しにし負担を軽くしたほうが、あなたの足に合っているかもしれない…と。ですが…結果はこの有様で。私は勝てないウマ娘なのでしょうか？』

『いえ、そんな事はありません。寧ろこの場合は逆ですね。』

『逆…とはどう言った事なのでしょう？』

『ここからは推測も交えてにはなりますが、あなたが勝ったとされるレースを逃げで制しそしてトレーナーが付いた。つまりは…そもそもあなたに魅力が無ければトレーナーはまず目を向けません。いくら結果を出そうとしても伸び代、という点や才能という壁はどの業界にも存在しますが…競バではそれが露になります。』

これはあくまで個人的な考えですのでお気になさらないでいただきたいのですが…まず、競バというものはトレーナーが勝たせている

のでは無く、強いウマ娘が勝っているだけです。強いウマ娘が強さを
見せつけるから、強いウマ娘が強くなるから：結果として本
能が勝利を手にしようとしています。そしてそれを可能にするためにト
レーナーが存在します。

では模擬レースではそれはどうなるのでしょうか？というところ、答え
は：NOです。

一位を取ったからといって必ずスカウトされるわけではありません
し、その先絶対に強くなれるという保証は何処にもありません。あく
までも可能性として高い、というだけなのでその時の勝利は全て、で
はないのです。

それでも即座に担当が付いたということは：あなたの足は、少なく
とも担当者を魅了するだけの力があつた事が伺えます。しかしそれ
を封じる、とまではいきませんが、逃げを抑えてしかも差しにしたと
いう事を踏まえると：担当者が差し戦法しか教える事が出来ない、も
しくはあなたのこれからの将来を考えての事だと思えます。私は後
者である、と考えていますが：ここから先はあなたとあなたの担当者
様に任せます。

私としてはただ述べるだけでは無意味になりますし何よりも：今
の折り合いの状態では部外者からの発言は関係を悪化させるだけ
でしょう。今回の内容は、あなた自身とあなたの事を見ているであろう
人が答えを出すべき問題です。』

どういう事なのだろうか：何故差しにする理由が私自身にあると
いうのだろうか：。トレーナーが何を思っただけ私に技術を与えたのだら
うか？その時の私の疑問は、さらに深まるばかりであつた。

「私の作戦を逃げに戻したいんです。」

「…っ。」

息を呑むとはこの事を言うのだろうか。静寂な部屋に空気がさらに
重く感じる。それでも：私は進まなければならぬ。

「…なんで：なのかな？」

「私はここ最近気持ちよく走れていません。それに：今のままでは

あの景色も見えないまま終わってしまう気がするんです。」

「終わるって…まだ…新しい戦い方に慣れていない…だけかもしれない。いつか差し…でも同じような景色が見られるかもしれないよ？」

「ですが、このままでは…私は勝てません。それくらいはトレーナーさんも薄々…いえ、確実に気付いているはずですよ。」

不器用なりに真つ正面から堂々と、そしてハッキリと。これで間違えてしまったなら新しく再起すれば良い。それで私に最悪の結果が訪れてしまったとしても…ここで中途半端に惨めに砕け散るような真似だけは決してダメだと…私は妥協を拒んでいた。

「私にとってのレースは…誰よりも先に先頭に行つて勝つ。それが自身にとつて最高に気持ちが良いことなのだ、トレーナーさんも知っているはずですよ。」

でなければスカウトはしない。あなたはそれだけの力がある事を私は既に知っている。

「確かに…そうだね…あなたにはそれが何よりも似合っていると、私もそう思うよ。」

紛う事なき闘争心の高さ…抑えが効かないジャンキー体質。そして自覚はしていなくとも誰よりも強い勝利に対する貪欲さ、自分の走りに対する絶対的な自信…何よりも逃げウマとしての天賦の才能を持ったあなたを大成させたい気持ちはある。それでも、私は…と内心思いつつも悟られないようにコーヒーを飲んだ。何処か苦味が強く感じたのか顔を顰める。いつしかこんな日が来るとは思っていた…だが、まだ結論を出したくは無い。彼女に逃げは色々な意味で早すぎるのだ。

「ではっー」

「…でも、指導者として…言わせてもらえれば、あなたの身体と精神はまだ完成していない。それにあなたは、無自覚に全力以上の力を出してしまう癖がある。それを抑えない限り…逃げに戻す事を認めることはできない。」

私はどんな酷い顔をして喋っているのだろう。

『質問よろしいでしょうか?』

『はい、大丈夫です。』

『私の逃げに何か致命的なものが存在するのか、またはそれと並行してウマ娘の本能的なものが重なった事により最悪の結果が発現してしまう考えが少なくともあつて、それを防ぐ為に敢えて差しに変更した…という可能性はありますか?』

ふと過った考えをそのまま書いた。しばしの沈黙に少しばかりの恐怖が混じった息が吐かれるのも束の間、返ってきた答えは…目を疑いたいものだった。

『はいかいいえ、の二択で判断するのであれば答えは紛れもなく

はい ですね。』

深呼吸

目をガン開きして指を動かす。今の俺に不可能という文字はない。初めてのユーザーで初めての相談を受けているという事実、これほどまでに嬉しいことはないだろう。手が止まらない。止まる事を知らない。頭が非常に冴えている事がはつきりとわかる。何もかもが分かる全能感が俺の全身を構成していた。この時、画面と向かい合っている間に繰り広げていたちよつとの間：俺は確かに無敵だったのだ。しかしその状態がずっと続くわけでもない。気付くのに遅れていたが、喉の渴きを覚えてコップに手を伸ばしたその時、ふと我へと返った。

俺は今：何をしていた？何が起きた？

冷静にログを振り返れば、さながらよくある掲示板に書かれているかのようなマウンツ的発言と、素人であるというのに長つたらしい文で質疑者に詰めるような言動の仕方を見て：真つ先に思つた事がある。

あつこれはあかん：やつてもうたわ……と。

そしてこのドツと来た虚無感を含めた今までの自分は、明らかに興奮状態だったのだろう。俗に言う深夜テンションである。

俺は自分に問いかける。別にそんな事がしたかつたんじゃないんだろう、と。

まるで、好きな子に振り向いて貰いたくて一生懸命に俺凄いですよアピールをしたのち、待つてました、と言わんばかりの絶好のタイミングで向けられる冷たい眼差しによつて齎される羞恥心。そして訪れる賢者モードの嵐は：久々ということもあつて超大型の台風を観測していた。俺の心が大雨洪水警報を超えて、土砂災害警戒情報が発令された絶望感を味わっている。最早、後悔という名の川が限界を迎えて堤防を破壊したかのようなだった。懐かしきミホノブルボンの間抜け面と瓜二つ：屈辱を通り越して虚無とも呼べるような感情のな

い顔がそこにはあった。

俺は悩みを抱えるウマ娘に少しでも寄り添って、やがて訪れるであろうサポーターや解説を願わくばこの世界でいたい…その為に準備をしてきたのだろう、と自問自答をする。

だが、いくらなんでもこれはない。

俺が困惑顔を披露してどうするんだ、と軽く自分自身に引いていた。

完全にマウント自慰menである…全く上手くはないし寧ろこの寒さがより冷静さを取り戻しているのだが、この既視感は宛ら絶不調は時として伏兵を発動させるのと同じである。

しかしこれからこのログ達を消したところで相手は不信感を募らせ、その割合は増していくだろう。だからといって今更訂正することも不可能だ。

だからといって、砦のように積み上げられた本と周りを囲む資料の山々から得た知識を無駄にするわけにもいかない。

これでは相手側からの信頼を得ることは出来ない。

ああでもない、こうでもないと言いつつ頭を抱えながら悶絶を繰り返す。こうした場では話し手側と受け手側は対等であった方が良く、という考え方を個人的に好いている身であり、それを意識してやっていこうと決めていた矢先でこのザマだ。この世界の人間と何ら変わらない…ただの偏見や傲慢とも呼べる考えで動いている亡者どもに過ぎず、衝動的に駆られて他者を犯す輩にはなりたくはない。

あべこべ世界特有の男達は悲惨な結末や扱いを受ける事が多い。だが、これもある種同じようなものかもしれない…言葉のレイプを犯してはならぬ。解説たるもの冷静に、サポーターたるもの一心同体を掲げていたのに…過ぎたことはもう仕方がない事だと割り切ってもう同じミスはしないように、と意識を切り替えた。

『あの…どうかされましたか?』

そうこうしている内に相手側からのメッセージが届いてもう5分が過ぎようとしている。不味い…非常に不味い。この時に返す最適解が見つからず見つけられず…途方に暮れていた。

それもそうだ。ここ数年、俺は人と話していない。単純明快、シロガネ山にいるレッドのように我、関せずとしてきたのがツケとして回ってきただけだ。踏んだり蹴つたりの不良場である。これ程の痴態を晒してしまったことはもう正直に言うべきなのかもしれない。

『いえ、実はお恥ずかしながら初めてのユーザーということでした。先程からの発言を撤回する気はありません。』とはいえ、此方が冷静でなかったのは事実です、申し訳ございません。』

急いで謝罪の文章を送信する。部屋にポツンと一人とはいえ、何とも情けない姿を披露してしまうとは：不覚である。ここにグラスワウンダーが居れば、彼女に土下座をしながら懇願するのであろう：拙者、此度の不出来さに今し方、情けを：御託とか諸々分らないし余計に恥ずかしいからとりあえず切腹する、と涙を流して頭を地べたへと擦り付けるだろう。精神一到何事不成：何事にも集中して当たれば、どんなむずかしいことでも成し遂げられないことはないのだ。あべこべ世界のグラスでも手伝ってくれるはずだ。

そんな事が頭の中をぐるぐると回っている最中ではあったが、それを遮るように返信が届いたので、俺は恐る恐る覗くようにして確認をするのであった。

『それは、その：私もどういふ反応をすれば良いのかわからないです。』

『そうですよね。ごもつともです。失礼致しました。』

気まずい：。画面越しとはいえ、そして俺がやらかしてしまったとはいえ：中々にこそばゆい。こんな会話は初めて、である。だが、ここから執念を見せる時だ。少しばかり親密度を高めるような話しやすい雰囲気心がけて接しやすくしなければならぬ。まずは意識と場を整えよう。

：とはいえ、言う事はほぼほぼ変わらないだろうが、仮に間違えた行動をこの掲示板を見て本人がしてしまったら、そこは指導者が正してくれるだろう。向こうはその道のスペシャリストで、そうした事にはただでさえ敏感だ。未然に防いでくれれば何ら問題は無いし、責任

も問われない……ここがトレーナーとの環境の違いである。

それを可能にしたのがインターネットだ。圧倒的無責任ポジで共感をすることもなく接していけるし、意識を変えるかどうかは本人次第……その程度もその人次第である。それで結果が良くなればそれはそれでよし、レースで勝てば尚良しという狡い手口だ。さらにここで後押しすべき点は、お互いに顔もわからないという事。顔見知り以外の、ましてやどの誰とも知らぬ相手ともなると、余計な先入観が生まれる事もない。よってセカンドオピニオンが成立しやすくなるわけだ、という自論である。

俺は確かにウマ娘を支えたかったが、それは単なる動機付けだ。動機と本音は決してⅡで結ばれる事は無い。本音を言えばただの自己満足でここまでできたのだ。

圧倒的にゴミ屑ゲス野郎である。但しゲスはゲスでもそこに美学が成り立っていないければ意味はない。だからこそ大きなミスは許されない。沢山の人たちを救ってきた医者のように鋭く、手早く、華麗なる手腕を俺は持てなかつた。それでも、その原因となっている取っ掛かりくらいは見つけられるはずだ。よって今は千載一遇のチャンスでもある。見逃すわけにはいかない。

『えつと……話を元に戻しますか？』

『いえいえ、お気になさらず。そうですね……話を戻したいところではあるんですけどそういうえば気になった事が一つだけありました。』

『はい、何でしょうか？』

『逃げと差しを両方やってみて、逃げの時に見えたものと差しの時に見えたものの違いってあったりします？』

『逃げと差しの時の……ですか？』

『はい、焦ってしまった私が言うのもなんですが……落ち着いてその時のことを箇条書きでも良いので書いてみてくれませんか？』

ようやく自身が落ち着ける立ち位置を取れた。水を含み息を整える。相手はまだ思春期を迎えたばかりの子供で、兎に角繊細だ。細心の注意を払って一つずつ遂行していこう。

そもそもこういう問題は色々調べてみると、大体において類似性

が存在している。今もこうして悩んでいる子は数多くいるだろうが、それと同じ数だけの悩みを克服してきた子達も多い。その子達が解決策を残してくれているか、もしくは聞いてもらいだけのことも中には含まれるだろう。

あくまでも俺は困っている事を的確に見つける努力をし、その手助けに合わせてセオリーを組んで回答をするだけだ。これだけで大抵の事柄は解消する事が多い。ただ、今回の場合に限ってはそうではない事を、情報が少なくても大まかに伺えるのは決定的であるのだ。

兎に角、俺自身が注意すべきなのは…否定をなるべく控える事。そして何よりも…本人の走りたい気持ちを無碍にしないことが大事だろう。彼女の走りをまず認めて、1人でも尊重し敬意を払う事がウマ娘のファンとしての第一歩であり、彼女達にとってもそれは大きな力となる。その記念すべき1人目がトレーナーなのだが…今は置いておくとしよう。

『差しで走った時は、タイミングや囲まれた時の対処などを落ち着いて考えながら走っていました。そして、ここで！というところで踏み込みを入れて前へ出ようとしたのですが…気持ち良くなかったです。』

気持ち良くなかった…ここを重点的に攻めてみるか。恐らく抑圧された事によって生じている、思い通りに走れない緊張とストレスから解放されたい欲求があるのか？

『気持ち良くなかった？』

『前で走っている時は…誰も前に居ないし、後ろを気にすることもない…誰にも前を譲らずにただ1人突っ走るその快感が全てなんです。』

極度の怖がりというわけではなさそうだ。かといってレースでトラウマがあるわけでも無さそう…となると、囲まれている時に他のウマ娘よりストレスを感じやすいのか？しかも走っている時は無我夢中であればあるほど力を発揮する…スズカやヘリオス系の前で走っている事が純粹に好きなタイプか。ジャンキー気質が濃厚、とメモを取り丁寧に見直しをしつつ進めていく。

『確かにそれは気持ちがいいでしょうね。しかも、誰にも前を譲らないままゴールをするっていうのは中々出来る技じゃないです。』

『ありがとうございます。』

『私も逃げウマみたいが一番に駆け抜けたい衝動があったことがあります。そうでなくても偶に全力で走りたい気持ちになったりとか：私はその時、頭を空っぽにして走ることが多いんですが。』

『わかります。その時に見える私だけの世界を好きに走って、そして気持ち良く一位を取る：私にとってはそれだけ楽しいことなんです。』

『私もあなたの走りを間近で見たいですね、あなたが独り占めしているレースを：その逃げをしている時はどんな走法を意識して？』

『走法：ですか？』

『逃げにも種類があるでしょう？大逃げで後方をバテバテに追い詰めるとか、途中で息を入れて最終コーナーで突き放すとか。同じ速度で逃げ切るとか。後ろのリズムを狂わして逃げ切るとか。』

『うーん。どちらかと言うと全力疾走で気が付いた時には試合が終わっていたような事が多いですね。あまり考えた事は無いです。』

ジャンキー気質確定。但しスズカのように逃げ差し型では無い。まだ逃げが完成していないタイプで恐らくムラがある：と。あと俺と同じで、あまり会話が得意では無いと察知。会話を引き伸ばし疑問に思っている事を自分から発信するまで粘り強く探り出す方向にシフト。長文は大抵読まれないから先の暴走と似たような文章を書いても問題は無い筈だ。言い方を少しだけ弄り、バレたらさりげなく話題を変えるように準備を怠らないよう頭の中で意識しつつコメントを続ける。

『全力疾走すると気持ちがいいですよ。走った時に駆け抜ける汗とか、風を感じながら走っているところとか。』

『はい！目の前がぱっと広がるところとか特に！』

『中々通ですね。そりゃあ：差しの方が色々疲れたりしません？私も良くあるんですよ。嫌な仕事に囲まれた時とかやってられっ

か！って投げ出したくなるし、終わり際に追い込んで余計に疲れてしまったりする事があります。好きな事をやっている時とかは大丈夫なんですけど。』

『そうなんです。正直言いにくいのですが、前に比べて走る事自体に疲れも感じてしまうようになり、さらにそこで囲まれたりすると余計に色々と考えてしまって：別に指導やトレーニング方法が悪いと思っただけではないんです。トレーナーさんも真剣に考えて見てくれていたので…。』

『それは私としても心配になりますね。』

『前に比べてトモとか身体の調子は多分：成長していたんだと思います。ただ、レースで負けたからといってこんな事を味わうのは私としても初めてだったので：困惑してしまっただけです。』

『その事をトレーナーさんには話しましたか？』

『いえ：話そうとしても、情けない話ですが顔を合わせ難くて…。』

『なら、その事を話してみても？その時の気持ちとかを素直に。』

『話してもいいのでしょうか？』

『スカウトをしに来たのであれば尚更ですよ。あなたの走りに惚れた記念すべき1人目なんですから。しかし、走り方を変えた理由が足の負担を減らす為：ですか。』

『私もそこが気になっていまして：これに関しての質問はよろしいでしょうか？』

『はい、大丈夫です。』

『私の逃げに何か致命的なものが存在するのか、またはそれと並行してウマ娘の本能的なものが重なった事により最悪の結果が発現してしまう考えが少なくともあって、それを防ぐ為に敢えて差しに変更した：という可能性はありますか？』

『はいかいいえ、の二択で判断するのであれば答えは紛れもなくはい ですね。』

『そうですか…。』

『思い当たる節があるのでしょうか？』

『実は私が模擬レースをした数日後に並走トレーニングをした事が

ありまして：無意識に全力で走ってしまったことがあったんです。その時にトレーナーさんが血相を変えたように心配してきて、足に違和感はないか？痛みはないか？などを入念に聞かれました。何も問題は無かったのですが、その日はトレーニングを中止し、自主練も行わないように言われました。』

あれから数時間が経ち満身創痍のまま、布団に勢い良くダイブした。束の間の一時の中：俺は腹に力を込め盛大に叫んだ。

やってしまった、と嘆きに嘆いた大声が部屋中に響いたが、喉を痛めただけで何の成果もあげられていないこの現実には少しばかり恨みを覚えた。

だが、俺にも出来たのだ。この一步は小さいが：俺にとっては偉大な一步なのだ、そう感じていた。

色々あったが：最初の段階としては良い方だと捉えよう。失敗こそ多々あったが、いずれこの経験が役に立つ時が：来る可能性はまず無いだろうが、一先ず良い朝を迎えられた事に感謝を込めて再び叫んだ。やはり叫ばずにはいられなかった。悔しくて仕方がなかった。実践すればするほど難易度の高さを実感してしまう。涙が出ない叫びなど：某胸糞映画でしか味わっていなかったというのに。

自身の愚かさに情けない気持ちとは裏腹に、隣の部屋で物音が聞こえた気がして：ちよつとだけ嬉しかったのはここだけの話である。ここしばらくは1人寂しく作業の毎日だった為だ。あべこべ世界よ：こんな危なっかしい男を外に出歩かなくて良い世界にしてくれた事、深く深く感謝をしよう。

トレセン学園から遠くないところに居るのにまだ誰にも知られていないのは、運が良いことなのだろうか。俺も正直この生活に慣れてしまったためか、それとも諦めか。意欲は少しばかり下がっている。彼女達と会う事は疎(おろ)か、生のウマ娘をこの目で見ることも、掲示板に現れるウマ娘も：現れる事は無いだろうと潔く腹を括り布団

の中へと入る。

ともあれ過ぎたことは変えられない。ああ…と悶えながらではあるが、トレセン学園での生活とは一体どんなものなのだろうか想像に耽る。そうしてあの歓声を思い浮かべながら彼女達のレース人生に幸あれ、と願い眠りについた。

脱出術

「それは、どれだけその子が丈夫だったとしても故障が多いから：ですか？」

「……その通り。あなたの脚は脆い：まだあなたの全力には応えられない。」

私とあの人の予想通りの回答が返ってきた。ただ、私は知っている。この人の実力とそれまでの行動から：意味のある事に関しては妥協も無駄も無いということ。私が問いかければトレーナーさんは確実に答えてくれる、とあの人は述べていた。私も：私のトレーナーさんを信じよう。

「具体的に耐えられるようになるまでどのくらいの期間をういますか？」

「：…何もしなければ早くて三年後。それで30秒保つかつてところだね。」

私たちの見解は合っていた。そこまで予測が出来ているのであれば…、

『やはり差しに変えさせた根本の理由はそこですか…。』

『私も薄々何かある、と予想はしていたんですが：具体的に何が原因か、を：あなた個人の見解で判断してもらいたいのです。第三者であるあなたの視点で、是非。』

『では、長文にて失礼。』

人間の走りとうま娘の走りは似ているようで全く異なります。人間では決して出す事が不可能な走りにも耐えうる身体を持っているとはいえ、それでも限界が来るのは人よりも早い：いえ、厳密に表すのであれば、成熟し本来の100%の力を出す前に壊れてしまう事が多すぎるためです。

戦術や適正距離、フォームがその人に最適なものだったとしても、

確率的に起こってしまうものでもあります。故にこれが正しい、といったものが戦術であれフォームであれ：存在しない競技なのです。あなたのトレーナーは：言い難いですがそうした残酷な場面を沢山見てきたかと思えます。そして逃げというのは、逃げウマにとってもそれ相応のリスクが伴うでしょう。

元々心肺機能やトモ、それらを支える骨など全ての要素が特別丈夫であれば：自由に走らせていたかと思えます。それこそ、好きに走ること：好きに走らせるという事はウマ娘にとって、そしてトレーナーにとっても大事な事であり、重要視されるべきだと私個人としても思うっていますし、実際には好きに走らせる方がスタミナも減りにくいです。精神的にも肉体的にも互いに楽なんです、そこに体が追いつかなければ：選手生命を終えてしまう、なんてこともあるでしょうから。

恐らくあなたの場合は本質的に逃げの方がノルのに：敢えて逃げをさせず、さらに悩んでいる子に手を差し伸ばさないととなると、考えられる事として：あなたの全力はあなたが丈夫であったとしても、あなたの足が壊れてしまう可能性が高く、それをわかって足に負荷をかけないように差しに変更したのかな、と予想しました。

先程書かれてもいましたが：負担を軽くしたほうが良い、と直接言われているのなら尚更かな？本人に直接、全ての理由を話そうってなると：私も流石に答えられないかもしれません。ただ、あなたの担当者がベテランであれば、打開策の一つや二つは考えている筈です。よってあなた自身がそこを深掘りする必要があります。』

「まだ全力は耐えられない：そして何もしなければってことは対策さえすれば、私でも逃げで走れるってことですよね？」

「：うん。全力を出せる時間は：平均して大体45. 7秒：上手くいけば最大1分2秒ちよつとだけ、と限られるだろうけど：今からあと一年、時間があればいけるところまではいけるよ。」

その対策を施せば、逃げでも走れる可能性は高いと言う事だ。なら

ば答えは簡単だ。私が得る快感に対して、少しだけ手を抜くことを覚えれば良い。先頭で走る事だけ曲げなければ…それで良い。

「なら私は、私の足が脆かったとしても…それでも走りたい。トレーナーさん…なんとかしてください。」

彼女にはそれが出来る。何故なら彼女もまた、天才なのだ。

『良いんでしょうか？私から話して。喧嘩とかなりませんか？』

『あなた達が葛藤し合ってしまった結果がこれですから、失うものはもう何もありません。それに、トレーナーというものはウマ娘を支えるものとして仕事をしています。あなたはもつと甘えても良いんですよ。喧嘩がなんぼのもんじゃない！ってぶつかっていいんです。それで気に食わなかったら、担当を変えれば良いだけです。何よりウマ娘は走らなければ健康を保てない所謂諸刃の剣でもありますから、そんな事は重々承知の上で計画を立てていると思いますし、答えますよ。後はきっかけさえあればどうにでもなります。』

『担当は…変えたく無いですけどわかりました。朝一番に行ってみます。』

「わかった。」

空気が…変わった。

「…っ。」

「確かにあなたは最高の脚と、それに見合うだけの能力がある。それを引き出す方法を私は確かに持っているし…出来るっていう自信もある。でも…辛いよ？長く険しい道のりって言葉があるけどまさにそれ。あなたは…それでもやり遂げるって言える？」

冗談じゃない。人間が出していいものではない殺気にも似た感覚が肌をピリピリと、電流が流れたかのように伝っている。こんなトレーナーさんは初めてみる。それでも呑まれてはいけない。私はひよっこでも中央の舞台にいるのだ。

「…私はトレーナーさんを信じます。トレーナーさんも私を信じてください。」

『余談ですが…上から目線で言っていたりと申し訳なさで一杯ではありませんが、ただこれだけは伝えておきたいです。私も、あなたたちの折り合いが上手くいくことを願っています。折角ここまで共に歩んできた仲間にヒビが生じたままのストーリーなんて…胸糞展開にも程がありますからね。応援しています。頑張ってください。』

『はい…ありがとうございます！』

あの人からは、競バの辛さも楽しさも全てを理解した上で…たったの数時間越しだけでもわかるほどに、文面からでも伝わる『夢』を持っているように感じた。顔も名前も知らない相手だけど、それでも…トレーナーさんのように不器用でも、真摯に向き合ってくれた。その事が何よりも嬉しかった。

「そっか…なんか、見ないうちに急に変わったね。なら、本気で答えなくちやいけない…ここまで悩ませてしまったのも私の罪…だし。それが私の役目。…最終警告。今から君に取って最も過酷な練習内容を告げる。嫌なら担当を変えるなりして…好きに走れば良い。あなたなら良いところまでは…いけると思う。」

「いえ、変える気はありません。」

トレーナーさんも私に夢を持っている。その気持ちは大切にしなければいけない…ここまで私を理解しているなら、私もあなたに踏み込もう。

「…そっ。ならこれを渡す。私ができる最善の手を打つために…あなたにはこのノートに書いてある事をしてもらおう。ここ数ヶ月の内に集めたデータとそれを元に考案した、あなたの身体に合わせた修行とも呼べる代物だよ。あなたのフォーム、癖、タイム、体重の記録から…予測出来るだけのあなたの筋肉のつき方も載ってる。償いにはならないけど、大切にしてくれると…嬉しいな。」

「…嘘でしょ。こんなに沢山?」

前言撤回。この人、私に夢を持ちすぎている。あの資料の山…医学関係から料理に至るまで全部私向けの可能性がある。でなければ高

さ30センチもの厚みで構成されたもうノートとは呼べない何か、を満面の笑みを浮かべて渡すはずがない。

「とりあえずこの10ページ目からお願い。私はその間、あなた自身も満足できるような、最高傑作とも呼べるあらゆる対策まで練りに練ったトレーニングメニューと計画表を作る。本当はあなたに手渡しておきたい資料が、もう三冊分あるんだけど…あなたみたいな良い選手を育てるからにはまだまだ足りないからね…やばっ楽しくなってきた…ふふっ、頑張ろ。」

狂気じみた不気味な笑みを浮かべている。トレーナーさんつてやっぱり変わった人が多いのだろうか？これ以上何を頑張るのだろうか…私に走りすぎだ、と言っていたあなたが1番走りすぎだ、と口を大にして言いたい。人の振り見て我が振り直せって聞いたことがあるけど…これを指すの？私って側から見たらトレーナーさんと同類として見られていたんじゃない？あの人から注意されていたってことは…トレーナーさんから見てもあんな感じに見えるの？

「あの…張り切っているところ言い難いんですけど肩の力を抜いてくれませんか？それに…もう少しあなたのことを知りたいんです。話したいことも山ほどありますし。それにまたあなたの目で、私の走りを見てもらいたいです。」

何かを察したのか、意表を突かれたように見えるその表情は参ったな、と言わんばかりの顔をしていた。

「…私、自分で言うのもあれだけどつまらない人間だよ？それに才能もないし天才じゃない。それでも良いの？」

「なら、似たもの同士ってことで。」

いや、今までの人生の中でこんな人に…ましてや天才に出会った事はない。私にも才能があつて天才であれば、どんな走り方をしても必ず上位に君臨するだろうし、何より故障なんてリスクを背負っている事もなかった。その歪さが嬉しいような悲しいような気持ちと同時に、これ以上無いコンビなのかもしれない…なんてそう思いながら、気が付けば私も自然と口角が上がっていた。

「じゃあ…改めてよろしくね…スズカ。あとそれ見たら今日はもう

休んでね。寝てないでしょ。」

「嘘でしょ☒バレてるなんて、うう…はい、トレーナーさん。では…
拜見しますね。」

「う、うん。どうぞどうぞ。」

観察眼の良さと突然の名前呼びに驚きを隠せなかったが、早速ペ
ラっとノートをめくり目を通した。その後少しかだけ一悶着があつた
が…。初めてトレーナーさんの自然な笑顔を見れたような気がする。
その表情は何処か穏やかで、それでいて優しかった。

まだ走り方も知らない私が…夜更かしをしてしまったその日。私
に初めて…トレーナーさんが付いた。

あれから5日は経った。掲示板は蛻の殻…閑古鳥が鳴いている。
完全に失敗だ。もうサイトを閉鎖しようか迷い中である。毎日同じ
部屋で過ごす変わり映えのしない日は、精神的にも悪影響でしか
ない。以前にもましてメンタルが不安定になってしまったようだ…し
かし、男1人で外に出歩くのは危険すぎる。どうしたものか…。

『あの、とりあえずトレーナーさんとは話をつけました。』

まさかのあの子が来てくれた。忘れもしない1人目のユーザー…
なんて言葉を送れば良いのか、戸惑ってしまう。感謝の言葉もないほ
ど、あの日と同じく画面に釘付けになりながら返信を返した。

『どうでした?』

『ペース配分や条件を互いに決めて、これを守るなら逃げをし
ても良いと言われました。以下、その条件です。』

・脚に負担をかける練習は一週間に一回の頻度で3時間、何れも木
曜か金曜に行く。そして夜の自主練は、1日1時間を超えるのは禁止
とする。

・基本7割程度に抑え全力を許可なく出さない。一年後に行われる
GIの皐月賞に向けて徐々に身体を慣らして行く方向へ。皐月賞出
走時に2400mを適正目標とする。

・全力疾走する時はその日の体調や対戦相手によって何秒までかを
決める。

・スタミナや身体の負担を減らす為に水泳による増強トレーニングをしつつ、過去の逃げウマを元に参考にするための研究を、より重点的に行う。

・土曜日は絶対に休むこと。(日曜日は走行トレーニング以外2〜3時間のみ、登山トレーニングの場合は6時間のみ。)

・睡眠の質を上げ食事を欠かさず行い、規則正しい生活を送ること。これが個人的に渡された内容の一部で、トレーナーさんも張り切っているおかげで他にも色々あるんですけど…一先ずはこれをデビュー戦が始まる3ヶ月前まで行う予定です。』

成る程…これ俺必要なくね？担当トレーナーとは完全に和解したってことが丸わかりなんだけど…それに目標を加味しても、登山トレーニングは心肺機能を高める上で行う人はいるだろうし…まだこの子は中等部だった筈だ。規則正しい生活習慣など疎かにしてしまいう傾向もあるだろう。アプリで登場していたダイワスカーレットやキタサンブラツクのような強靱な身体を持つわけでも無く、セイウンスカイのような作戦を練る策士タイプでも無い。そう考えれば担当者の手腕が伺える。どれだけ今ここで、抑圧に耐え切れるか…そして少し休ませながら身体をじっくりと完成形に近づけさせ、徐々に馴染ませた身体を作りただの『逃げ』をして勝つ、と見た。相当将来に見込みが無ければここまで縛りをする理由がない…勝負を仕掛けてくるのは丁度一年後と見て、まず間違いないだろう。

そういえば今年度のデビュー戦の結果はどうだったのだろうか？有力なウマ娘がいれば良いのだが、個人的にはどうしても気になる事がある。実装されていたウマ娘が走っているのか、否かだ。ブログにてやってみたいレース予想を如何に掘り下げるか…そして時系列の整理や世界線を把握する上では欠かせない部分でもある…蔑ろには出来ないだろう。とはいえ、まずは目の前の事に集中して取り掛かるとしようか。…うん、やっぱり俺いらない子だ。

『うわあ…でも、逃げで走れるだけまだマシなのかな？デビューしてから当面の目標とかは、どのような感じでしょうか？2400mといえどダービーですが。』

『はい：今はこれだけで十分です。特に問題がなければデビュー戦からホープフルステークス、弥生賞、皐月賞、ダービーですね。』

『この半年間はじっくりと身体作りに専念、といった方針でしょう。無理しないように。』

本当に誰なんだ？逃げでここまで高い目標を立てるなんて、まるでブルボンの模倣だ。こんな度胸のあるウマ娘が中等部に居るともいうのか？：いやこの場合、トレーナーが戸山さんなのか？ローテとしては順当だろうが：こりや相当な大物を作る気だろう。：にしてもだ。事前に生徒全員の情報を調べているとはいえ、今の段階でそのような目立つ子が学園内に果たして居たか、と問われると答えはN oだ。流石に出走していない子はデータが乏しいが故に、入学時のレースの記録が手に入るわけでもない。仮に見ていたとしても絞り出すのはそう容易く行えるものでも無い。実物を見てからでないことややり難いことが挙げられるが、それを抜きにしても：普通に考えてここまで高いレベルを設定するか？このローテで行かせるとしても、朝日杯FSの方がまだ様子見る余地も余裕もあるというのに：同期に強いマイラーが居るのだろうか？

そもそもこのトレセン学園に所属している子達は、アプリの世界を忠実にしているのかどうなのか：怪しいところではある。だからといって、このローテを目標とする子は存在していない。可能性としてブルボンの他にマルゼンが居るが：彼女も確かホープフルステークスと弥生賞ではなく、朝日杯FSとスプリングステークスに出走するだろう。加えて中等部ではない：第一、ネットには疎そうだ。

現状、一番近い子としてジャンキーで有名なスズカが挙げられる。だが、アニメでも史実でも成熟したのはバレンタインステークスからだった事、そして今の時点ではまだ暴走特急をかましているだろうことから、自分の走りに悩む可能性も低い。しかもスズカに対して：走りは今以上に抑えるなんてこんな事をすれば、コンディションは悪化するだけだろう。

仮にアプリの世界線であれば、アプリ版のベテラントレーナーはしっかりと向き合おうとしており、尚且つストーリーでのいざこざ

は、デビュー戦が行われる少し前の出来事である。加えて差しではなく先行で走り、ズルズルと囲まれて最後の直線でスタミナ切れを起こした可能性もあることから判断も出来ない。あと心情的に：担当ウマ娘を長い期間放置していたというのは考えたくないものだ。何より弥生賞以外、アプリレース目標から見ても一致しない。となると：有名馬をモチーフにしたモブウマ娘が居るとでもいいたいのか、この世界は。

サニーブライアン？そもそも逃げで悩む子ではない。テスコガビーか？いや彼女がいるとしたら桜花賞は譲れないだろう。他の子を怖がる筈であろうカブラヤオーも無いな。プリティキャスト…？いやいや流石にそれは無い…大逃げタイプで気性も荒い子が、わざわざこんなところに来るだろうか…となれば、ミスターシービーと戦うであろうカツラギエース…ダメだ、わからん。この世界での彼女達の基準がわからない。

しかしだ。いくら脳のない頭で捻り出そうとしても、流石に限界は来てしまう…今のところはレベルが高いモブウマ娘の確率が高い、と見た方が気も楽になるだろう。何よりも、もしこの子が原作勢の誰か1人だとしたら…胸が押しつぶされそうになる。初っ端からラスボスは誰だつて望んでいないものだ。

『はい。…ところでその件について、唐突なんですけどお願いしてもいいですか？』

思考している最中、その子からの返信に少しばかり身構える。唐突にお願いをするなんて中々なものだ。まだやり取りをして数時間だというのに何故？男だとはバレていないだろうし、この掲示板で出来ることなんてそれこそ無いに等しいというのに、特級呪物でも取りに行かせられるのか？まだ顔も何も知らない相手だぞ？どうしてそこまで踏み込めるのか疑問である。一体何を考えているのやら…聞くだけ聞いてみるとしようか。

『お願い？まあ私に出来る事なら。』

『私が約束を守るよう見張っていて欲しいんです。トレーナーさんが居ない時の会話相手になってほしいというか、上手くは言えない

のですが…すみません。目と指、頭とかじやないんですけど…私だけだと勝手に動いてしまいそうです。』

『良いですよ。引き受けましょう。』

ここまで平気で領域内に入ってくるとは妙だ。仮にもウマ娘である彼女達が何故？ああ、そうか…失念していた。向こう側の価値観があべこべ世界の基準として成立しているから、人との壁が前世と違って薄めなのか。にしては緩みすぎな気もするが。

だが…ふむ、よくよく考えてみればお互いに都合も良いと見た。俺としては、現在制作しているアプリを普及させたい狙いもある…上手くいけば自ずと掲示板に出入りする子が増えるかもしれない。ここまで育成が難しい子となれば恐らく、ベテラントレーナーは書類作業という名の地獄、そしてレースに向けての対策を含めて日夜奮闘するのだろう。お安い御用だ…勝手ながら見守るとしようか。それにトレン学園の生徒の話が部外者が聞く機会なんて到底あり得ないだろう事に加え、やがては…他の生徒の練習内容を盗める機会もあるかもしれない。こればかりは運が絡んでくるだろうが、この時点で俺は運が良いと見るし、何より貴重とも言えよう。ただ…やはりなあ…、

『本当ですか？ありがとうございます！では、早速練習メニューと走法についてなんですけど、やはり逃げで戦うともなれば、序盤で他の人がどう動くかによって変わってきますよね…研究を重点的に、とトレーナーさんからも言われてはいるのですが、レパトリーを増やすためにビデオ研究とかで知識を培うとかどうでしょうか？』

『良いですね。さらに言えば、基本的にレース運びに関しては前が有利なことの方が多いので、参考にする価値は大いにあると思います。レースの後半にどれだけの余力が必要なのか、細かく慎重にチェックしつつ検討していきましょうか。そこから実際に、夜の自主練の時やトレーナーさんの目が届いているところで走ってみると、また違う視点が生まれるかもしれませんね。』

あべこべが働いているとはいえ、あんな発言をしている俺に…たったの数日で必要性も皆無になった相手にここまで関わろうとすると

は…まさかとは思うがこの子、見守ってくれるような友達が居ない
ぼっちではなからうか？デビュー戦も一年後に控えているならば…
交流関係に頼っても良いと思うんだが。

勝手に憶測を立て相手を推測したばかりに俺は、相手のことが益々
わからなくなり頭を抱えるようになっていた。

下校後のスペシャリスト

あれからも毎日毎日掲示板の確認とアプリの見直しを繰り返す日々：といっても掲示板に張り付く時間帯も決まっているため、のらりくらりダラダラ伸び伸びとニート生活を満喫中である。しかしながら最近はのんびりした時間が少しずつ減っている。何故か、と問われれば答えはもう一つしかない。

『昨日の2000mのタイムは1:59.78でした。約0.4秒更新出来ました。自身に合っている走り方の絶対、というものはいまち掴めてはいませんけど…。序盤の展開作りについては今のところ上手くいけてます。』

『順調に成果が出始め、様々な調整が上手くいつている証拠ですね。クラシック級にいてもおかしくない実力です。ですがまだ、たったの3週間しか経っていません。無理に何かを掴もうとやっきになるより、次の日に向けての準備を怠らなければそれで十分です。焦らず落ち着いて一つ一つやっていきましょう。』

『はい！レースでも練習でも、しっかりと土台を構築することから：ですよ。ところで質問なんですけど…このタイムの伸び方って早すぎると思うんです。もしかして身体を休めたことと何か関連性が？』

『休息というのもあなたの身体に、より根本的に作用しているとは思いますが…一つ大きい要因としては、あなたのトレーナーさんの管理能力の高さもあるかと。話に聞く限りでは相当な腕を持っていますし、何より担当者として大事なものが備わっています。その分コミュニケーションが苦手なようですが…それでも走りの質を高めたこと、初見からここまであなたの力を見抜いて尚、将来性も考えているとなると…いやこれは成長というより、元々の力をより良い方向に戻したって表現した方が正解なのかな？とはいえ…彼女が本気だと

いうのは否が応でも伝わってきます。』

『はい…以前にも増してキラキラしているとか…あれ？この人こんな人だっけ？っていうギャップが…。おかげで自分を客観視出来る様になったと言いますか…複雑ですけど。』

『ま、まあ関係が深まったっていうとあれですけど、何はともあれ結果としては良かったね、って言っていると思います。こちらとしてはもう少しトレーナーさんが安定している人であれば良かったのですが…。』

『それでも走りの質を軸に置いたことで、そこまで走らなくても満足感は強くなりましたし、一回一回を大切に走るようになりました。うずうずはしますけどその分一回に使う力の相対値が全く違うので…けど、慣れるまで時間はかかりそうです。』

『ターフの上には情報がいっぱいありますからね。それなりに思考力も問われます。その負担を減らす為にも、そして戦術として新たに構築させ活かす為にもトレーナーさんが居るので安心してください。きつと力になってくれます。私は…あまりお役には立たないかもしれませんが自分でなりに精一杯支えますから。』

『ありがとうございます。いえ、ここまで話を聞き、考えを共有し、昇華出来るのはあなたのおかげです。私たちだけだとどうしても…制御が出来ないみたいで。』

『それだと…私は人形師か何かかな？』

『どちらかという作画監督…ですかね？』

『おー？アニメ鑑賞はイケる口で？』

『いえ、トレーナーさんが意外と見るタイプで…特にスポーツアニメにハマっているらしくよく泣いています。私も偶にですが走る以外の時間に一緒に観るようになってしまった…夢や勝利、心境などを物語として組み込んでいるので共感することもあったりするので、中々に面白いなあ…と感じています。ただ…、』

『ただ？』

『トレーニングメニューの中に作品の中で使われていた練習がパク…少しアレンジしたものとかも含まれていたのがわかってしまって、』

その：何と言いますか…。他にもテキトーな話を聞いていた場面から引つ張つてくることもあつて、それが不思議な事に上手くいつてしまふんですね。』

『まさかとは思いますが、あなたの担当トレーナーは相当なおたくちゃんではないでしょうか？』

『はい：完全にトレーニングオタクです。退屈はしませんが、正直もう：ツツコミきれません。』

『楽しそうで何よりです。こちらもおつこりしてしまいます…と、すみませんが所用で一度抜けます。また何かあればこちらにその時の状況を書き込んでください。それと1週間前にこちらに頼まれた依頼ですが、あと3日ほどお時間を取らせて頂きたいです。』

『度々我儘を言つてすみません。』

『ただ、このままだと我慢出来ずに走りに行つてしまう可能性もあるのでとりあえず今週分の練習に使える参考資料、食事管理表と体重チェック表を今の内に送っておきます。目を通しておいってください。』

『私もそこまでトレーニングオタクつてわけでは無いんですけど：何か変な印象をつけられている気がするのですが。』

『気のせいです。あと我儘はじゃんじゃん言つて良いんです。その分、何かあつた時は素直にトレーナーさんに述べることを約束してください。では、今週も無理の無いように。後：夜更かしはダメ、絶対。そして走る前には、』

『蹄鉄、靴、足や手の爪先、芝の奥の土に至る全てを、実際に歩いたり触つてよく観察してから練習に。砂場では足のどこに意識をするかを徹底して行うこと。相手が誰であろうと、走る時はゴールだけを指して行け。等しくターフで駆け抜ける挑戦者でいる意識を忘れるべからず。』

『よしー！』

『はいー！今日も朝から色々ありがとうございます。またよろしくお願ひしますー！』

あの日を境に定期的に連絡を取り合っているこの子が、普通に化け物すぎて笑いが止まらない。一度本気で問いかけた程に迫った事があるが、本人はこれで7割です。と平然と述べていた事もあって何がなんだかわからない…といった心境だ。マックイーンが無理なダイエットをしていたせいでタイムが伸びなかつた話と似通っているのだろうか？逃げの適正度が高いといっても限度がある。まだ力のコントロールといった点では上手くはいつていない、という事を定期的に報告を受けてはいるが…この子にしてこのトレーナーあり、といった具合でこれでは鬼に金棒…いや、鬼と鬼だな。お互いが化け物同士で助かった。ゲームシナリオのように思いつきや本人に関係のない話を聞いただけで、トレーニングに活かせる気持ち悪すぎるトレーナーで助かった。個人的には奈瀬さん、沖野さん、東条さん、黒沼さん、南坂さんといった普通な…普通か？ダメだ、トレーナーが全員問題児だったことを忘れていた。問題児同士だからこそなし得た偉業ばかりだった…これは決して悪口ではなく、寧ろ褒め言葉である。こんなのばかり選出するからトレセン学園は…。

にしても3週間だ。3週間で調子も上げ、ストレスも溜まっていなままやりきっているとは…大したウマ娘とトレーナーだ。前のお悩み内容が霞んでしまうほどに順調である。上手く機能すればこうも噛み合うなんて考えもしないだろう。こんなコンビを間近で見られるとはな。しかも思春期という難しい時期にまさか成立するなんて…正直羨ましい、その手腕が欲しい、とつい思ってしまう。そのトレーナーを焼肉に誘い、あわよくば腕を食べたいものだ。神絵師の腕を食べたい…と似た感覚をまさか自身が体験するなんてお笑い種だが、それで神回とも呼ばれるレースが見られるチャンスが増えるのであれば、俺の嫉妬なんて安いものである…なんて冗談が頭に浮かんで乾いた笑みが溢れ出た。

ふうっ、と溜息にも似た気の抜けた脱力感。文字通り、一息つく合図でもあった。背中にもたれる度にギギギツと椅子特有の軋む音が響いて暫し、静寂が訪れる。微かに霞んだ目が疲れ目であることを証明して外を見れば、少しばかり赤く見える太陽が夕方であると知らせ

てくれていた。もうそんな時間か、と身体をパキパキと鳴らしつつ別の部屋に歩みを進める。

殺風景なりビングに行けば目に入ってくるのは、ちよつとしたトレーニング道具と広めのヨガマットだ。ここに来てまず初めに絶望を味わった事に対して、解消させるための要素の一つでもある。何だお前は：この世界ではまさかの意識高い系マッチョマンなのか？と問われれば答えはNOである。特別筋肉を増やしたい、というわけではない。ただこの世界は知つての通りあべこべであり、加えてウマ娘という男の上位互換がいる。さらに男が少なくなつてしまつたせいで所謂、不意打ち追い討ちダメ押しが悪タイプ早死三段活用が盛り盛り盛られているわけだ。

春から当分の間はウマ娘の発情期の時期に重なり外に出られず、夏はその分外に出られなかった男が暑さにやられて部屋に引きこもりがち。秋によくやく外出出来ると思えば：今度は耐えに耐えていた人間の女性による犯罪率が上昇。その影響、身体がさらに虚弱になつた男が冬を耐えられる事もなく結果として引きこもる：といった負のスパイラルが形成されている。

これでもウマ娘に関しては大幅に改善されている方ではあるのだ。特に春先から訪れる発情期さえどうにかしてしまえば、少なくとも普通の女性より遥かに安全である。単純に薬が開発されたり、ウマレーターなどの基礎とも呼べる技術を上手く用いた事による動きが大きかった事も一つだろう。これには大企業を含めウマ娘陣営が血の滲むような努力をして頑張つた証でもある。トレセン学園が主体となるアプリやゲーム、漫画等の話が生まれた時期に合わせたのか：その舞台が形成される前を境に、急激なる右肩上がりで成長を遂げたのだから驚きを通り越して驚愕の一言であつた。やはりリアルチートの力は偉大であると痛感したものだ。そして目を付けた。

ウマ娘の世界：ましてやあべこべ世界において自由に、安全かつ、安心して暮らせる場所は：その世界における一番力を持った勢力を中心とした場以外は無。これはお決まりであるが：実際に安全だといえる根拠が揃っていれば問題が発生し難いのは残念ながら確か

だ。事前にこうした仕組みを、前持って認知している…そう、オタクという知識によって。

一応その恩恵を俺も受けた身でもあるし、随分と良くしてもらっている。男とはいえ、マンシヨンの一室丸々を一人暮らし出来ている展開はこの際ご都合主義として捉えているほどに運が良い。その分、向こうも向こうで要件を述べてきたが、その条件に対しての選出を自身に委ねても大丈夫であった事もあって寧ろ好都合なもので構成できたことも大きい。

この前の保護警備員事件の際、近所という事もあって安否の電話がかかってくるほどの防犯意識の高さは、男の俺以上…というのはいささか不審に思ってしまうが…恐らく府中、そして東京という事もあつてのことだろう。

トレセン学園を支えている企業や名家、著名人の多さは他の学園に比べて大きく、そしてあまりにも尖りすぎている。何せ著名人の多くは当たり前ではあるが、ウマ娘かウマ娘関連が殆どである。しかしながらその有り余る力は多くの嫉妬や暴走の可能性を秘めていた。あくまでそうしたことは人間でも起きることではあるが、より露見していたイメージを払拭するために町や企業、国を通して各々協力する姿勢を見せなければならぬほど、苦境の一途を辿っている。ましてや競バはこの世界といえど世界規模のスポーツでもあり、各国も力を入れていた事が理由としても含まれる。

とはいえ早々にイメージが改善されるわけでもない。何せ大半の…特に女性の一部を筆頭にネガティブなキャンペーンが催され、お馴染みであるいつもの光景が発生した。流石に創作物といえど、そこまで前世と似たような事案は無いだろうと考へてはいたが…アニメでもライスシャワーの一件が取り扱われていた事もあり、そこまで再現しなくても良いだろうに…というレベルで水面下ギリギリスレスレの争いが繰り広げられたことは記憶に新しい。その時代に生まれなくて心底良かった、と感謝しているほどに地獄であった記録は今も時折引用する輩がいるものだ。

例えば「あの隠語がゲートイン完了…うまぴよい復活か？ 出会って

4秒、恐るべき発情期レコード伝説！」とかが挙げられるだろう。頭が痛くなるどころか、目にした時は思わず笑ってたけど…どの世界でもあるもんだ。そこに踏み込むのであれば、デビュー戦時のスペシャルウィークの評価が低かったのはどういう理屈があったのだろうか…追求したいところではあるがこの話は置いておくとしよう。

幾らいメージを良くしようとしたところで、そうした世間の声やキャンペーンはどの道男にとっては、完全なるディストピアをより一層植え付けるにはもってこいの動きである。結果として女社会の失敗版とも呼べるような、真綿で首を絞められるようなギスギスした世界が基本となってしまった。個人的にはウマ娘が存在してくれていいお陰でなんとか平常心を保っているものの、より深く知ってしまった分…同情では収まらないほどに不幸だろう、と感じてしまうそんな世界。だからこそ生物としての競争本能が前世よりかは遥かに高い、とはつきりと肌で味わってしまった。

発情期を抑える事に成功したとしても力では敵わない。それに俺としても…発情期をどうにかしたところで実際に目の前でそうした状況が生まれない限りは、何も区別を付けられない。

そもそも数で女性に負ける…しかも闘争具合はこの有様だ。そんな猛獣共が強制的に集まり、ネガティブなイメージを持つ町にいち早く住みたい、まして幼い子供が一人で！なんて発言を一体誰がするだろうか。大企業相手に対して電話越しに自力で申し出た馬鹿は一体何処のどいつだろうか。はい、ここに焦点を絞って目をつけてしまった男こそ…そう、俺だ。その状況を丸々利用した。

前代未聞ということもあり、世間に広がるどころかまず揉み消されただろうが…非常に上手く事が進んだ。俺の親？反対した瞬間金の力で解決に導いたので問題は無い。寧ろ下手な警備員を付けるよりも、管理会社から全てに至るまで大企業に保護されるなんて好条件を逃すような人でも無かった。お陰で今の俺に至る。

だからといってそう易々と外に出られるか、と問われれば答えは完全に否定の一言であった。一人暮らしは簡単に折れた事もあって、そのまま勢いに任せ軽い気持ちで外出許可の話を持っていったあの時

の俺を殴りたい気持ちでいっぱいである。親も俺自身のその提案を聞いたときは目を疑っていたが、何よりも企業側から猛烈に対面で反対された。一人暮らしを望んでいる身で自殺志願しているかのような恐ろしい事を言うのだ！と涙を流しながら親以上に怒鳴られた。一歩間違えれば病院送り、という最悪な展開も考えられたそうで：男で子供だが転生した身であれば余裕だろう：と、たかを括っていた自身と世界を舐めていた。危うく執行されかけたことで、初めてこの世界に来て本気で泣いた瞬間でもあり、今でも良い思い出だ。

何はともあれ、一人暮らしに関して今のところ問題は起きていない。親含め周りの大人達には感謝の言葉もないほどだ。しかし外に出られないということは、それ即ち：自由度は無いに等しい。外で運動する事は疎（おろ）か、満足に買い物すら出来ない。そもそもそんなものは私がやる、と言わんばかりに女性が当たり前の如くやるそうだ。そんな生活を送っていれば典型的ではあるが、アスリートを目指すような物珍しい男でも無い限り：ブクブクに太るかガリガリの2択だ。

「それは生きているとは言えない：家畜だ。」なんて言いそうなキャラ達が前世には居たが、ここではそれが常識である。

しかしながら俺自身がこれが常識なんだ、と甘えに身を置き身体を怠けさせていい、なんて理由を許すわけにはいかない。ウマ娘には勝てずとも一対一で少しだけでも粘れるだけの身体は欲しい。時折ゲーム版のトレーナーがマヤノトップガンの突進に耐えている描写や、ゴールドシチーの仕事先まで駆けつける体力とトーセンジョーダンに迫れるほどの根性があるのだ。事もあろうにウマ娘達がレースに向けて死にもぐるいで奮闘しているのに、そんな怠惰と傲慢をオタクである俺が許せるわけがない。現実の馬だつてそうなのだから：自己満足であろうと、気持ちが奮い立ったならば行動は早かった。後はCygamesの物理法則を信じればなんとかなる！：なんて綺麗な動機が100%必ずしも占めているわけではない。

まあ確かに、ゲーム版トレーナーのようなウマ娘の力にも耐えられる身体は魅力的ではあるが：邪な気持ちが微塵も無いとも言いきれ

ないのが俺という性分は誤魔化せない。

正直に述べよう：俺は単純に性的行為に迫られた際、襲われた時に残念な身体を見せたく無い：只それだけのことである。反省はしているものの、反省しているように見えない自分に対しても反省はしているが：どうしても無理なものは無理だ。

襲われる方にもそれなりのプライドと自負、そして何よりも：譲れないシチュエーションがあるってものだ。ビリビリつと服を破かれた時にぶよぶよに積もった脂肪の山を見られながら泣いて懇願するのと、ある程度でも整ったヘソチラと時折見せる乳首や鎖骨のラインを見せた方が向こう側も乗り気になるだろう？

人生においての目的と願望は決してⅡでは終ぞ完全に結ばれた事はないのだ。やはり願望には勝てなかつたよ：あべこべだもの。

兎に角だ。自己満足であれなんであれ、きつかけはなんだって良い。本能がそれを拒んでいなければ結局はやるだけだ。こちらら生のウマ娘すら見れない地獄だぞ：おかげでストレスが溜まりに溜まった不純な考えから、半ば衝動的に頼み貰い受けたものがこのトレーニング道具である。最初こそ後悔とやってしまった、というやらかし賢者タイムが訪れたものだが：時折身体を動かす程度には使うようになっていく。

「ふっ…ふっ…。」

身体を解しながら、軽めの準備運動をする。クーラーを入れてはいるが：少し動いただけで滴る汗がポタポタと落ち、それが余計に真夏という暴力に混じって身体を熱くさせる。少しばかりタオルで拭いたのち、まずは軽くレッグプレスから始めようとしたその時、ピピピツと機械音が鳴った。ああ、そういうええもうそろそろそんな時間だったか：と一度身体をよく拭き、匂いを抑えるスプレーを二、三度撒き散らした直後、呼び鈴が鳴る。

「へっ」

「中野愛です、入室の許可をお願いします！」

「あーちよつと待ってて、今開ける」

数少ないお楽しみの時間だ。

勢い任せ

ガチャリ、と音を立てて玄関を開ければ降り注ぐ昼間の明るさと共に、熱風の如く突き刺さるような暑さが俺の身体を犯す。熱い：汗も湧き出る：まるで興奮して腰を振る性的な行為をしているかのような沸き立つ身体に快楽は訪れない。うっと漏れ出る自身の声が少しばかり気持ちが悪い。

「…こんにちは」

暑さに飲まれて気怠く挨拶をした。俺の目に映る少女とは、丁度知り合って1年と少しくらいになるだろうか：勿論表面上の関係ではあるが。

「こんにちはは、いつもお世話になっています！」

「硬っ苦しいのは良いって：もう長い付き合いだつてのに」

「いえ、流石に外でそのような態度は取れませんから」

「そっか：まあ入ってよ。ああ、荷物はリビングに置いてくれると助かる」

「はい、失礼します」

この暑さだ：一先ず中に入れさせる。彼女も仕事をしに、ここに来ているのだ。働いていない俺が大事に丁寧に招き入れなければ男として、というより人間として廃るってものだ。

ドサッと置かれた荷物を脇に、俺は彼女に目を光らせた。

「んじゃ、早速ではあるが：いつも通り味見と確認をしようじゃないか」

「早速ですか☒良いですけど：もう少しゆっくりでも大丈夫なの：では？」

少し赤らんだ頬と息の荒さ：そして何よりも控えめな態度がよりそるってものだが、この自信の無さを幾度となく裏切ってきたというのに：未だにそのでかい胸をフンスツと前に持っていけないような態度を取る理由は無いのにも関わらず、未だに崩さないとは：い

や、寧ろこの場合は俺が何もかもを独り占めしているのだ。その弱気な意気込みから現れる謙虚さは実に好みである。

「いやいや、やるからには今ここで楽しまないと…勿体ないでしょ。…フヘヘ」

卑劣な声とニチャアつとした笑み…そして、訪れる静寂とお互いの心拍が脈を打って興奮を呼び起こす。この高まりは、ある種いけない麻薬だ。今か今かと待ち望んだ俺の欲が現れてゴクリつと生唾を飲む。期待の眼差しを向け渴望は今、臨界点を超えた。この燃えたぎる気持ちに間違いはない、これぞ正解なのだ。

「そんなに待ちきれないんですか?」

「言葉に出すまでもないだろうね」

ああ…早く、早く。俺は今にも快樂に身を寄せたいのだ。勿体ぶらずに早く言ってくれ、あの言葉を。

「では…」

ハツと息を呑む。ようやくだ…俺は今、ダービーに挑んでも良いくらいの希望に満ち満ちている。

「今週分のお荷物の受け渡しと廃棄物の受け取り作業、そして清掃と本日のお夕食の用意を開始させていただきますー!」

「いよっ!待ってました!」

企業提携その1、代行サービスである。

「相変わらずこの部屋だけ酷いね」

笑いながらテキパキと散らかっている資料を、纏め上げる彼女の片付けは手際の良さといい…相変わらずである。流石というべきか、恐ろしく慣れたスピードで整えていく。その姿を見ていると賢さトレーニングを思い出してしまうが…負けじと俺も散らばったプリントを拾い上げ整理する。手伝わなくて良い、とか抜かしてるが…これは元々俺がすべき事なのだ。こっちの価値観など知らないっつたら知らない。

「そりゃいくら男だからって全部が全部世話になる訳にもいかないし…多少はね?」

「もう少し頼っても良いのに…」

「これ以上頼るものがあつたら教えてほしいくらいだつての。ダメ男でも作る気か？」

他にも冷蔵庫の整理、ゴミ箱…部屋の隅々に至るまでの確認をされる。まあここまでされるのか…と問われれば一人暮らしということもあつて必要事項なのだ。見られても困るものも無い…寧ろもつと俺の身体の頭からつま先まで隈なくチェックして欲しい、なんて冗談を胸に秘めてバレないように彼女の作業風景を見る。今はゴミ袋を丁寧に結んでいるようだが、彼女の姿はそれすら綺麗だと感じてしまうほどだ。

「ふう…っし。とりあえず散らかっているものも殆ど無かつたし…綺麗に整理整頓してて偉い偉い」

「どうも…なんか舐めてない？」

ムツとした感情は隠せなかつた。というか普通に掃除を含めた家事すら碌にしないこの世界の男が悪い、俺は悪くない。まあ現に一部屋だけ汚かつたのだけでも…実際のところ、ああして汚くしてないと向こうが何故か残念な表情を浮かべてくるというジレンマが生じるのだ…解せぬ。何故か綺麗に整えたまま維持していたら、悲しそうな顔を見せて溜息をつかれる何とも言えない切ないような顔持ちを見せられた俺の気持ちはどうしたら良かったのだろうか…挙げ句の果てには何で綺麗にしているの？と問いかけられたくらいだ。その分、仕事しないで給料も入るつてのに…どの世界でも女心というものはよくわからないものである。

「じゃあパーツと作っちゃうから、そろそろそつちの作業の確認をお願いしても良いかな？」

「無視かい…へいへい」

「そこは、はい…でしよ？」

「おかんかよ…」

「まって、せめてそこはお姉ちゃんにしてー！」

この世界ではそれなりに軽口を言い合える仲でもある、数少ない人だ。それにしても今日は絶妙なタイミングで訪れたな…汗まみれの

姿を見せないで良かった。いくら匂いを消したとしても、頬を伝う汗が流れているだけで反応してしまう事もあるのがあべこべというものだ。

彼女はこの部屋に入るために必要な資格、『男性保護特別監視員』を持っていて。警備員とはまた違うもので、毎日警護が付くわけではない。寧ろ一人暮らしをしている男がしっかりと生活できているか、を定める人…なのだが、警備員に比べて給料はそこまで高くはない。そこで監視員の値を上げるプランとして、日常生活の一部を変わりに代理してくれるというものがあり、俺の場合は一日3時間を一週間おきに依頼されている。そう…これはある意味企業側に付いた事による誤算というべきものだ。

何せ企業側からこのプランを組まなければ、ここでの生活は許可を得ることが出来ない…と述べられてしまったのだ。いや、正確に表せば少し違うのだが、これではどちらが依頼したのだろうか…とはいえず、今ではこれでも満足している。

どれもこれも逸品とも呼べる待遇である。何より彼女は声の通りの良さが非常に心地よく、正しく元氣澆漑といった言葉がよく似合っており、人と会うことがほぼ無いに等しい俺にとって、彼女と会う事自体が元氣の源といっても過言ではない。

長い茶髪を後ろに束ね、女性にしては身長が高めな印象を受けるが、それこそそのスタイルの良さをさらに引き立たせている。黒い作業着から少しだけ覗かせただけで分かる美しい首筋とすらつと伸びている鍛えられた足は、レース前のパドックで見なくても良い程にその身体作りの良さを表していることもあつて目線がついつい移動してしまうがどれもこれも、素晴らしいの一言で尽きるだろう。…一つ残念な点だけを除いて。

そう、人間なのである。ああ…人間でなくこの子がウマ娘であれば、間違いなく掲示板に入るほどに筋肉が美しい…それほどまでに均整が取れている、と素人が見てもそれがハッキリと分かるのだ。惜しい…実に惜しい！

と、我に返れば女性をマジマジと見るわけにもいかない。内心、失

礼をぶつちぎっていたので心の中で謝りながら目線を合わせてみれば、その端的な顔立ちがより一層その気持ち強めている。

ちよつとばかしそばかすは目立つがその青い瞳は時折、厚めの帽子の影からハイライトが覗かせたときに見える緑色と相まっており、透き通った綺麗な色をしている。まるで宝石のような美しさであるが故、吸い込まれそうな美貌に今にも飲まれそう。この世界の美少女の容姿レベル高すぎでは…？アイドルなんてもものじゃ断じてない…恐ろしい片鱗を味わっているだろう。

この世界に来てそれなりの日数が経つが、いささか心臓に悪い。顔には出さないようにしているものの、未だに慣れないのはそのせい。誰だ？美人は3日で飽きるとか言った奴は…。こちとらウマ娘アプリ実装までに年単位で待った猛者ぞ？我、お兄さままでお兄ちゃん。で魚で雑刀で人参でマスクで商店街で紙飛行機でタオルでハチミツでお土産で釣竿ぞ？飽きたことなんぞ一度も無かったんだぞ…オタクを無礼るなよ？その間女性との関係なんて作ってないに決まっているだろう…いや、出来なかつたが正しい。

そんなオタクが雲泥の差でも表せない大差勝ちを証明し猛者となった…ウマ娘の美的価値の高さによって何が引き起こされたのか？明白だ。あべこべによってさらに基準値を上げてきたのだ。つまりは…世の中美少女だらけとなった。美とはなんだ？と、ある種哲学的な問いが為される程のレベルである。

こんな美少女に耐性が生まれるわけないだろう…あべこべならば尚のこと慣れる機会なんて生まれずに決まってる。

だが俺は葛藤していた。ああ、あの神々しい筋肉を触りたい…と。馬を撫でるようにじっくり、と触りたい。あのスペシャルウィークの太腿に果敢に挑んだ沖野トレーナーよ。人間相手でも邪な気持ちが多量は生まれるつてもものなのにあんた…本当に最高のトレーナーだよ、尊敬する。

「なんか私に付いてます？そんなに見られると…流石に資格持ちでも堪えるつていうか」

視姦は良くない…それはどの世界でも同じだ。それを言及するな

らばウマ娘の世界でのパドックは一体全体なんなのだろうか…という声も上がりそうだが、あべこべ世界では健全となっている。いや、寧ろ積極的に行っても咎められないという点では前世の競馬、ウマ娘をも超えた点であろう。あべこべ世界となったことで筋肉のつき方もより牡馬のような、芯のある美しさがある。それはウマ娘ではない女性も身体作りに力を注いでいる。だからといって誰に対してもジロジロ見ているいいだなんて事はない。

「ああ、いや…いつ見ても手際良くなって。俺だとしても手を抜いたりテキトーに済ませちゃうからさ」

上手く誤魔化せるかどうか…、まあ何はともあれ結果オーライになりやすいが、油断は出来ない。向こうの性格上9割方平気である事は把握しているとはいえ…俺としても今更他の人に変えられてしまつては困る。この子だからこうして素顔を晒せられるのだ。

「あははっ！あたしは慣れてるだけなの！…つと料理の最中に話しかけないでくださいよ。危ない危ない」

「いやごめんごめん。そんなことよりも帽子を付けたまま料理するのもどうかと思うんだけど…。それ先外せば？」

「あれ？外してなかった？あっ…」
「おつちよこちよいかっ！」

だから、こうした隙を見逃さなければ良い。

彼女は恥ずかしかつたのかおどおどとしながらも、帽子を外す。綺麗に整えられた髪の毛が軽く靡く。頭上を確認して見るものの、がっくり来る事この上ない…ひよこひよこ動く耳は無く、普通の人間の耳をしている。勝手に残念に思うこの性格はどうかとも思うが、いかせん生まれてからというもののウマ娘に対しての執着はより強くなってしまった…これはその代償なのではないだろうか？最早危険人物である。やれやれ…笑えない。

「それにしても珍しいですね」

その声に意識が現実へと戻ってくる。割と危ないところまで墮ちていた気がするが、気にしたら負けだ。

「何が？」

「いや、ウマ娘のトレーニング本だとか筋肉、栄養素に関する論文とか男の人って基本見ないと思うし：何なら毛嫌いしている人も居ますよ？それをあんな：部屋中に溢れさせてまで調べるなんて」

ああ、その事か：と少しだけ安堵する。今更感が強いが、ここ最近になってより資料の量も質も増えた事に対して疑問に思ったのだろう。

「まあね。競バが好きな変わり者だし？筋肉とか駆け引きとか見放題」

ここじゃあ競バを話す相手もないからなあ：。どちらかといえばウマ娘が好きなんだが：そんなことを言えば変わり者からバカにランクが上がるだろうし、口が裂けても言えない。あの資料の山があつた時点で隠し通す事は不可能ではあるが：ウマ娘が好きなのか、競バが好きなのかではやはり意味が変わってくる。

「ふーん：じゃあ、あたしの身体がどんな具合か見ることって出来るかな？」

「うわあ：。そういうこと言っちゃいます？」

無茶振りとも呼べる要求：時偶にからかい上手をしてくる。こんな異性が現実存在するんだな、なんて考えはもう捨てた。明らかに故意だと感じるくらいにタイミングが良い。火を止め、手の動きを抑え、完全に聞く気満々といった様子である。うわあ：だなんて自身が実際に言うとは思わなんだ。ツイスターボの実況でしか言っているのを見た事がないのに自然と発していたっていう事は、それと同レベルな反応だということを知る。

「あたしだつてそれなりに筋肉には自信があるつての！ほらほら、物は試しつていうじゃん？それにウマ娘と人間って見た目的にそこまで変わらないし：うんうん、イケるつて」

「いや、割とで表せられないほどに違うし、簡単じゃないんだけども：。全く違う生き物の構造に対して同じように見抜かれるなら、トレーナーも苦労はしな：あ？」

よく見たら何となくだがどこかを庇う動きをしている。特に腰の下：腰椎の4番目を中心にして痛みを庇っているのか？そのせいか

下半身の筋肉に少しだけ負担がかかっているように見える：若干ではあるが筋肉の動きが普段と比べてぎこちない。ここは素直に思ったことを言ってみよう：特別何かがある、なんて事はない筈だ。俺の言葉は、ただの戯言に過ぎん。

「腰の筋肉でも痛めた？なんというか足に疲労が残ってるように見えるんだけど」

見たままに、自然な口調から発せられたその答えは意外にも不意をつかれたようだった。彼女の趣が少しばかり硬くなったように察する事が出来た。そしてそんな表情を向けたのが意外だった。

「なんでそう思ったの？」

「いや、なんとなく…だけど」

「…すげえ」

ボソツと呟かれたその言葉に俺はどう反応すれば良いのか分からずにいた。視線は下へ下へと向かい、手は口へと向かわせている。その瞳は何処か悲しげであった。

「いやいや、真に受けてどうすんの」

何年ぶりだろうか。いや、生まれて初めてだろう。こんな作り笑いをしたのは前世以来だ。何かと気まずい空気が醸し出され、部屋全体が暗く、重くなる…こんな時、どうしたらいいものか随分と経験していないから、わからずに俺自身の心もソワソワと嫌な胸騒ぎを覚えていた。そんな時だ：震えながら肩を揺らしている彼女の口元を微かに覗く事が出来た。

「やつぱり君を揶揄うのは楽しいな…ヒヒッ」

久々にキレそうになった。年上のくせに俺の純粋な気持ちを弄びやがって…。

「来週から他の人に来てもらうように手配しとく。別に料理は君からの要望によるものだしな」

その発言に不味いと思ったのか、焦りの表情を浮かべてこちらに懇願してきた：そこまで迫らなくてもいいだろうに。

「わかった、わかりましたから。腰回りが少しばかり痛いというのは本当だったから、それを見抜かれないように嘘をついただけなんで

す。この後は数日間しつかりと休めるし…だからそのスマホをしまつて欲しいの！上に連絡だけはしないで欲しいの！」

「…腰が痛いのは本当なのかよ。何で言わなかったのさ」

偶然にも当たったみたいだが、こんなものが当たるといなら馬券を当てたい…馬券なんてものすらないけれども、あべこべ世界ならあるかもって期待していたんだが、そうはなっていなかった。あと仕草が妙にあざとってのもなあ…ウインクしながら手を合わせてごめん、なんてポーズする人居るんだな。

「あ、そ…そうだ。ウマ娘が好きなら今季1番注目している選手は誰かな？」

話を変えてきた…そこまで慌てるようなことでも無いのに、大袈裟な反応。気にしてほしく無いのだろうか…無闇に深掘りしてはいけない予感もあつて聞かない事にした。別に聞いたら聞いたで面倒だし。

今季…今季ねえ、とふと考える仕草を取る。脳内に焼き付けるかの如く記憶に残っているウマ娘のレースを、一瞬で処理し答えを導き出す。俺の中にあつたのは二人だけだった。

「客観視すれば圧倒的にメジロマックイーン。個人的には…アイネスフウジンかなあ」

その言葉に嘘偽りは無い。

「…んで…何でその二人なの？」

「何でって…何がよ？」

なんというか…意外というより動揺の方が大きいって感じの聞き方だ。何故彼女がそのような反応を見せるのか、俺には理解出来なかった。

「いや…さ？メジロマックイーンってデビュー戦…確か3位で負けてなかった？アイネスフウジンも2着だし、今年だったらそれこそメジロライアンとかゴッドクレッツシエンドにイクノデイクタス…シラホシ、ヴァイスストーンに…ロイヤルフローラとかじゃない？彼女らが出る幕つて無いような気がするんだけど」

やけに詳しいな…君もオタクかい？

「だったらダイタクヘリオス、メジロパーマー…ラブセカイ、キタウイリハフ、レツドルビーも捨てがたいよ。それでも…特に中距離から先は、あの2人には敵わない」

「何で？」

俺は見逃さなかった。ここにある展開を加味すると、自然とこの2人にしか絞れない。何より負けたからといってデビュー戦の時点で決定的な差がある。

「まだ時間があるし嫌じゃなければ一緒に見る？運良く選抜レースとデビュー戦の動画を入手出来ただけだよ」

「…へ？」

見逃さなかったのは、何も俺1人だけとは限らないだろうが…仮令(たとえ)勝利の女神が見逃していたとしても、誰かがちゃんと見ているものなのだ。

慧眼

平然と戸惑いも躊躇も無く資料部屋へと案内をし、椅子に座らせる。

「ちよつとそこで待ってて」

そういえば、こうして自らが率先して好きな話をする機会は…何年ぶりだろうか。そう思うと込み上げてくるものがある。感情…というより本能に近いものなのだろうか。部屋にずっと引きこもっていた代償なのだろうか。

やはり人間という生物たるもの、どんなに屁理屈を捏ねようと他者とは話したがるのだろう。ウマ娘が走りたいたいというように、アーティストが創作活動が続けたいと思うように、人間は…上に立ちたいとか、マウントとかに当たるのだろうか？俺の場合は久しぶりに好きなことを話せるその高揚感が大きいのかも知れない。

「ずっと気になっていたんだけどその奥にあるのって…何？」

「何って…だから資料」

「まさかさあ…まさかとは思うけどさ。全部ウマ娘とかのデータだ、なんて言わないよね？」

「ははは。やあボブ、今日はどんな動画を紹介するんだい？」

「なんか変な番組始まってるんだけど☒」

「いいからいいから、流れるままに。つと…そうだ。アイネスとマックイーンのノートノート、ノートは何処へやったやら…ああ、これだ」

「ね、ねえ、答えてくれないかな？それって全部ウマ娘の資料なの？そのノートには何が書かれているの？」

「んーそれもあるけど、今手元にあるこれはどちらかと言うと試合の記録から、予測出来る範囲に限ってだけど…シミュレーションって表現が正しいのかな？この先この子がどういう風にトレーニングしていったらこうなりますよ、って仮定を基準に推察したデータ…まあ

趣味の延長だけどね」

「…いや、だからってこの量が全部それって頭おかしいと思うんだけど」

「残念、これでも圧倒的に足りないんだ」

「これで☒…最初の方に聞いておけば良かった。てつきりもつと別の勉強をしてるものだと思っていたのに」

「生で見られない分あらゆる将来を見ようとするってのが魅力的だし楽しいんだけど、何せ人数が多いからね。そしてこれが、アイネスフウジンとメジロマックイーンの収集したデータさ…あとは動画を準備してつと」

「なんか…気になってしょうがないの…」

「気になる…気になる、と仰いましたか？」

「へ？ちよつ、ちよつと☒ち、近つ！」

「いいからいいから。よし、見よう、すぐ見よう。時は待ってくれないうぞー」

「とりあえず近すぎるのは良くないの！わ、わかったから…一緒に動画を見るから！」

「待ってましたその言葉！では、こちらになります」

その反応が嬉しくて振り向きながらニツと笑みが溢れて仕方がない。ここに来てから競バの話は無かったからか、ついついテンションが上がってしまう。オタクの血は時にサンデーサイレンス並に熱くなるというものだ。それでも止まる事はない。

「このレースにそういえばメジロマックイーンも出てたんだよね。まあ彼女も強くなるだろうからあれだけど…これがデビュー戦の記録だね」

何故かアイネスフウジンと同じ1600mに出るといふ…マックイーン陣営が何を考えてここに出したのかは不明ではあるが、元々ダート1700mに出走していた経歴を前世で見ているからか不思議には思っていない。しかし、スタミナ勝負が売りのマックイーンを何故ここに当てたのだろうか？見返す度に気にしてしまうのだが…今は置いておこう。頭によぎっていた余計な考えを消し、パソコンか

らファイルを開く。

『中山芝1600m。天候にも恵まれずかなり水を含み、重バ場となりました。本日の天気は生憎の雨。気温は26℃。デビュー戦という大切な場にて本領を発揮出来るかどうか、期待の眼差しが向けられている事でしよう。1番人気に推されましたメジロマツクイーン6枠6番から出走、3枠3番2番人気アイネスフウジン、7枠8番3番人気にフォロロアとなっています。』

「ちよつと待って、これまさか…」

「ん？ああ、この声？映像を入手した後、編集したり声を入れたりして確認するのよ…自分なりに実況したくてね。まだ練習中だし今回の場合は、どちらかというと観察したものとか、レース場の特徴をまとめている感じだけど…そんなことより始めよう」

「なんか頭が痛くなってきた…」

「そんなに物珍しい？」

「んー…男性でも好きな人はいるだろうけど、ここまで熱中する人は女性を入れてもまず居ないんじゃないかな…。あくまで主観…というか周りを観察してみて、だけど」

【もしかして：UMAOいない説濃厚】というのが頭に浮かんでしまふ。いや、この際男性側に競バ好きが居なくても良い。それよりツツコミたいところが過った。少しばかり待て、と。

おい、この世界の女性達よ。そんなバカげたことがあるか、と言いたい。前世に当たる男の立場にあるんだよな？1番人気は誰だろう、とかパドックの様子とか熱心に見てるんだよな？動画サイトでも普通に盛り上がってるじゃないか。年齢層を統計で見てもほぼほぼ女性で占めていたじゃないか。

いくらなんでもあべこべだがおかしいぞ…1：5の比率を抜きにして考えても、女性でもこうしたマニアはいると考えるてはいたのだが…思っていた反応が想像と違う。

「…引いてる？」

「…」

「沈黙は肯定ってことね、わかった」

「いや、その…ね？ちよつとびっくりしちやつただけだから、じゃあ見よつか」

『本日注目すべきはやはりというべきか、アイネスフウジンとメジロマツクイーンの方、そしてフオロロアになるかと思えます。メジロマツクイーンの方は調子がまいち、と見れますが果たして1600mをどのように運んでいくのか…そして選抜レースにて大外から撫で切ったフオロロア、今日は生憎の雨模様ですが切れ味のある末脚を中山でうまく出せるか…その末脚を展開させずに逃げ切れるのか、アイネスフウジンの走りにも注目していきたいところです。さあ、各ウマ娘10人がゲート入りし…態勢が完了しました。』

まだ動画としての完成度が低い…それでも継続は力なり、という言葉があるように続けることが大事なのだ。並み居る強豪らのレースは、人型となった事で実際の競馬を超えてより高度なやり取りが行われるようになっていく。俺にはそれを見分け、正確に読み取れるような目をまだ持っていない。だが…選抜ならまだどうにかなる。

『今、スタートが切られました。やはり行った行きました先頭を行くアイネスフウジン。スタートダッシュはかなりの出来です。アイネスが先行争いの先手を取ってぐんぐんぐん進んでいきます。』

と…ここから2番手にはケーシーアーツ、メジロマツクイーンは内をついて3番手から様子を見ていくようです。その後ろにシルバースターが付きました。そこから半バ身差固まるようにワンハンドレッド、フオロロア、ジェットグレイスが居ます。後方から2番目ドラゴンナイトとクロスエンジンが、最後方にブルーアマゾネスと続いています。各バこのように展開されました。』

彼女も集中しているように映像に見入っている。先程の様子から見て、恐らくはその物珍しさからくるものだろう。少しばかり残念であるが仕方がない。

『第2コーナーを過ぎ、坂を下って向こう正面。アイネスフウジンを先頭に、メジロマツクイーンが下り坂を利用して加速した少し外、3番手ケーシーアーツも負けじと追っている先頭集団を背にシルバースターはこの位置、その後ろ…やや遅れてフオロロアが前3人を

追う形、ワンハンドレッド真ん中ジェットグレイス、外からクロスエンジン。後方離れてドラゴンナイト、ブルーアマゾネスはどう動いていく？中山の直線は短いぞ！

第3、第4コーナー中間カーブへと向かいます。アイネス未だ先頭のまま、9人を引き連れて4コーナーを駆け抜けていく。高低差2.4mの急坂へとこれから向かうわけだが、このまま前方での争いが繰り広げられるのか？400標識を通過した。ここでなんと不気味に、不気味にフォロロアが加速した加速した！先頭までとの差が4バ身から3バ身と縮まっていく！アイネスフウジン逃げ切るか？メジロマックイーンは伸びが苦しい。4番手へと下がったシルバースターは前との差が詰まってこないのかマックイーンには届かない！ケーシーアーツも懸命に走る！

さあ、200を通過！坂を登る！

アイネスフウジン逃げる逃げる！しかしフォロロアを振り切れない！前に出た前へと出たフォロロア！もう言葉はいらぬか、フォロロアが1着となった！フォロロアが今、ゴールインツ!!？2着にアイネスフウジン、3着僅かにメジロマックイーンです!!？掲示板にも出ました。着順、上からフォロロア、アイネスフウジン、メジロマックイーン、シルバースター、ジェットグレイスとなっています。』

動画が終わったと同時に、直様アイネスフウジンについて載っているお手製の分析した結果を、ドンつと勢い良く見せつけるのだ。初めて他者に見せる俺だけの秘密を、ここで今披露する。

「んで、このレースと選抜レース他、集められるだけの情報から読み取れるだけ読み取った予測データが…このページだね。次のページからは予想になってる」

ペラペラとめくる音、そこに書かれた綺麗とは呼べない文字が殴り書きと共に現れた。若干の羞恥心を見せないように、なるべく無心でページを開いたところにあったのは、誰の目にも映ることが無かった何の意味もない情報だけ。特別なものでも何でもないこの世界に来て初めてハマった俺の全力が、そこにはあった。

「本当に君…年下？」

「それ今関係ない…んでここよ、ここ。あ…そうだな。選抜レースの動画も折角だから流そう。比較して見るか」

この一連の動きを見ていたからだろうか、彼女はふうつと一息入れているから、アイネスフウジンの項目に目を移す。果たしてどう見る？

アイネスフウジン

選抜レースの時との変化及び懸念点について

選抜レース時、そこまでスタートダッシュに対して特別力を入れていなかったのか、やや出遅れた後先行よりの逃げをしていた。しかしこのレースでは、最初のスタートの時点でマイル並のスピードで駆け上がると見せてすぐ目の前に立ちはだかる第二コーナーの坂を利用し、若干バレないようにしつつスピードを落として丁寧に戻って来る。おかげで無駄な力を使う事なく最小限の力で先頭を維持した事で、結果的に逃げとして最高のポジションが取れた。もうこの時点で下手な戦法をしない限り勝つことは目に見えている。が、重バ場から最後の坂を登ったところでスタミナが予想以上に喰われた模様。末脚が思うように伸びなかった為、差し切られた。最後の二の足を使うタイミングは頃合い、位置的に最高の位置でドンピシャに決めていた為惜しい。身体に無理のない走りは個人的に好感度高め。

武器は先行よりの逃げ、平均的な逃げ、ハイペースな逃げる同時に扱うことで、緩急の良さを使った擬似三刀流。そしてそれらを支える頭やスタミナと最後の精神的粘り強さは一級品。

同期にいるメジロライアンの末脚がある為、彼女と当たる時はハイペースよりの逃げが多くなる傾向が予想される。スローペースは上半身から判断するに少し苦手な様子。2番手以降の動きを良く見て脚を出来るだけ使わせるように画策させるだけで、楽に勝てる逃げウマ娘の1人。そしてその観察力から先行も出来る強さがある。…非常に強くなると見た。

向こう正面での脚の溜め具合について

雨、重バ場といったレースでは過酷とも呼べる環境下において、冷静にかつ自然と芝が整っている場を選んで走っているその機転の良

さ、及び観察眼はこの中でも一際群を抜いていると見て間違いはない。坂をうまく使ったやり口はメジロマックイーンも使っていたが、上り坂においてはこちらが上。但し、バ場が重ではその良さが十分にでない。

スタミナについて

メジロマックイーンにはそれこそ劣るが、レースを上手く支配することに遜色はない。だが、これといった特別な武器が桁違いに強い、というわけではない。メジロマックイーンに比べれば物足りない印象に見える。例えば、その身長の高さとトモの作り具合だ。これには目を張るがそれに比べて上半身が不安定で、筋肉が思うように動いてない可能性が高い。これを考慮した上で筋肉量と付き具合から、これより先成長する上で芝の長距離向きではあるが、上半身の骨格の影響からか下半身と頭に頼りきりがちな事が見えてしまう。

走り方のバランスの良さや綺麗さに目を奪われるが、恐らく加速力が他と比べて格段に遅く、身体もまだ出来上がっていない事から、良バ場かつ中距離で走った方が安定した走りをする予想。長距離はその時に誰がどのように走るか、で全て決着が付くが掲示板には高い確率で入る。

現時点C3ランク コンディションはB2を維持

芝B ダートE

逃げA1 先行B3 差しE 追込G

短距離G マイルB3 中距離A 長距離C2

スピード 225↓231↓244

スタミナ 264↓276↓289

パワー 186↓193↓211

賢さ 220↓241↓256

精神力 236↓250↓262

耐久値 194↓182↓208

空間把握能力 A1

趣味と謳ってはいたけど、軽はずみな欲求解消などではない。これが今の俺が生きた証。

「マッククイーンやその先の分析したデータも見たんだけど…マッククイーン以外の子もあったりするの？」

震えながらに聞いてきたその声に、俺は絶対の自信を持ってこう答える。

「勿論」

此の故に、我が言葉に偽り無し。

天命士

「やっぱりあるんだ…あるの☒」

その勢いに思わず仰け反った。そんな漫画みたいな返事を返す人が居るとは思わなかった…無論、俺も同じような反応をしてしまった。少し恥ずかしい。

「おおぅ…変な声出しちゃったじゃん。あるに決まってるでしょ。俺を無礼るなよ?」

まあ、ドヤ顔出来る部分なんてここしか無いけど…あべこべでなくとも、恐らく俺はトレーナーにはなれない。しかも…そのドヤ顔出来る知識面も、俺単体の力ではない。

「ねえ、もしもの話だけど…仮に男性でもトレーナーになれますよって世界だったらさ…その、どうしてた?」

「うくん…そりゃあね? 目指していたかもしれないけど」
「けど?」

「まず受からないかな。俺さ、トレーナー適性が無いのよ。流石に無理って感じる時期が来ると思うわ」

「そうなの?そこはよくわからないけど…え?じゃあこれ、本当に趣味なの?」

「そつ…趣味」

「これが?」

「これが」

この大半が前世ありきの知識を大いに利用しているわけで、ある意味ズルをしているだけにすぎない。ウマ娘から競馬に興味を持ち始めたただのニワカが、少なからずここまで予測出来るはずもないわけで、だからこその学問とメンタルのだが…実質、俺にはトレーナーとして欠けているものが多い。故に情報収集に全努力値を振って、それでもこのレベルだ。

つまるところ、あべこべ要素が無くてもダメだねってことが丸わか

りであり、所詮は土台にすら登れない素人であるということに変わりはない。

とはいえ、ここまで分野を絞り粘って勉強した甲斐はあったと、こればかりは自負していいかもしれない。完璧な分析ってわけでもない代物ではあるものの、完璧かと問われれば答えは全くもって不出来である：それ故に完璧なのだ。なんてアララライと声を上げる勢いを今この場で出せば、それこそ俺は本当に頭のおかしな人として認定されそうではあるものの、原作には登場していない子でも、全てではないもののある程度見極めることはギリギリのレベルで出来る。

現に行われたデビュー戦は、前世にはなかった試合だといち早く気が付いた上で情報を処理できた。この成果を含めそれらは他試合に渡って確認済みである。危うく見逃すところではあった：均整の整った素晴らしき筋肉を見て滾っていなければ、なんて事のない試合として済ましていただろう。それを言ったら日付とかにも気を遣わなければならぬのだが：もしかしたらアニメやアプリがガバだったりで決められた日時がズレていた事と、何か関係しているのか？こうなると厄介であること極まりない：色々今世代の奴らがやらかしくっているせいでめちやくちやである。

どの道俺は、この世界では短命気質であろうことは仕方がない。府中には珍しい鯽のアラだと言われそうだ。自分で言うのは滑稽な為、口が裂けても言えない小言ではある。色黒では無いし、脂ぎっているわけでもないこの例えに熱心に粗探しされれば、それこそ溜まったものじゃない、アラだけに。：別の理由で肌が青白くなるし、意味も全く違う為ズレている事は置いておこう。そもそもあべこべ世界に短命なんて落語があつたら、それはそれで驚愕である。

「トレーナー適性がないっていうのは、どうして？」

「あんまり言いたくはないんだけど：一つ目は至って単純、怖い」

「あつ、あははははは：ま、まあそれは仕方がない」

「んで、もう一つは：そうだな。こここと、ここ：あとのこのページを見ればわかるかも」

そういつて各種それぞれのノートを広げる。アイネス、マツクイ

ン、フオロアのこの先のデータだ。これはあまり見せたくない：何せ何も知らない癖に知った気で書いた黒歴史そのもの。

トレーナーは諦めないで献身的に尽くす存在であるべきだと、個人的に考えている。無論選手1人1人に真剣に向き合い、そうして成果を上げて金を稼ぐのが仕事だからだ。GIに勝つ、記録を更新する、本人が納得出来る勝利などなど：各々が思う最終的な目標であったり、願望であったり、夢といった曖昧なものまでも実現させる試みが当たるだろう。

そうした事を叶えさせる事も踏まえた上で、怪我をさせないことであつたり、本人の力量の差をじっくりと時間をかけて信頼性を高めて初めて、当人と調整をしつつ測っていくものだ。勿論、そうした事を事前に言つて回避させる手段はあるけれど、あくまで最終手段であり大半は段階を踏むか許容値を超えない限りは声をかけない。ナリタタイシンやミホノブルボンのストーリーがこれに該当すると思えている。

何が言いたいかと言えば、トレーナーは決して最後までその子のファンでなければならぬ：それこそが彼らの真骨頂であり、役割だ。

それに対して俺は諦めが早い：いや、見切りが早い。外野に居ることが多いからこそ、いつからかそんな風に判断を下すようになった。

今季1年のGI勝率予測。

アイネスフウジン 芝1600m以上から

朝日FS 89.3% 阪神JF 61.6% ホープ 83.4%

皐月 80.8% 桜花 35.5% Nマ 38.4% 女王 49.2%

% 東優 89.7% 安田 0.16% 宝塚 1.47% 秋華 67.

7% 菊花 62.8% 天秋 2.41% エ女 41.4% JC 2.

27% 京マ 1.08% 有馬 70.9%

メジロマツクイーン 芝2000m以上から(マイル省略)

ホープ 48.5% 皐月 43.1% 東優 47.4% 女王 38.

3% 宝塚 0.97% 秋華 61.1% 菊花 71.3% 天秋 2.

59% 工女56.6% JC3.13% 有馬59.6%
フオロロア 芝2000m以上から(マイル省略)
ホープ34.1% 皐月14.2% 東優9.74% 女王19.2%
宝塚20.3% 秋華41.9% 菊花0.71% 天秋2.5%
工女15.9% JC6.44% 有馬7.36%

「何にも知らない状態でこんな事を、平然と平気で書く人間がトレーナーになったとして、選手が納得出来るような形で終われると思う？ 献身的に接するような人に見える？ あくまでもこれは主観で決めかかった推測で、特別な力で未来を見れるなんて…そんな漫画みたいな展開とか無い。けど、もし俺がトレーナーになったら平気でこう促してしまうかもしれないよね。『このレースでは間違いなくこの子が勝つだろうから、こつちのレースに行つたほうが良いんじゃないかな？』って…それもかなり早い時期に」

「でもそれって大事なことじゃない？ 勝負の世界なんだし確実に呼べるものは無いけど、勝てる勝負には勝ちに行くって姿勢も時には必要だと思うの。それを見極めるのもトレーナーの仕事だし、全員が全員そうまでして勝ちたいって思う子がどれだけ居るのか、なんてわからないじゃん？ 逆に勝ちたくない…ってのは変だろうけど、丁度いい戦績でそのまま卒業したいですって人も居るだろうし」

「それはそうなんだけど… 君は強いね、じゃあ大丈夫だね。あー君は…うん、こうすれば勝てるかもしれないけどその先は厳しいな…なんて思った時点で俺が負けてるも同然じゃない？ やつてみないとわからない勝負の世界で、殴り合いをしているのは紛れもない、目の前で走っている子達なんだ。なのに…どうしてだか、走りたくない子や言っちゃ悪いけど弱い子でも磨き上げればこの子はちゃんと強いんだ、つて証明したくなるのよねこれが…それこそ喉から手が出るほどに勝利を求めてしまうんだと。」

「ってこれ…今までの殆どの内容自体は、あくまで聞いた話で構成されているんだけど…俺も同じようになると思う。あんまし天才っていう言葉は好きじゃないけど…天才トレーナーでも通る道なん

じゃないかな？」

「そういえば今のG Iの盛り上がり様は7冠達成以来の凄まじい豊作って聞くけど、同時にトレーナー暗黒時代でもあるって聞いた覚えが：なんでもベテランか有力な人以外は成績を残せないから、とかどうとかで去っていく人達が居るってさ。どうしても満足出来なくて自分が見ているものと他者が見ている自分とのギャップの違いが、より大きく感じてしまうっていう人達、中には学園から抜け出してしまおう生徒も時折居るって言うけど：」

「そうなのよね。で、トレーナーもトレーナーで中央に所属したからには、勝たせてあげたいって欲が勝ってしまうのよ。しかも一回きりしかないノーコンティニューな世界だから余計にね：怪我したら終わりなんて事もあるからさらに視野が狭くなる。けれどもそこに強気で挑んで支えなければいけない。それを全く経験していない俺が：トレーナーですら無い俺が弱気になるイメージを持つようじゃあ：長くは続かないでしょ。って何素人がこんなこと言っているんだか：恥ずいわ」

退職したトレーナーの本音とやらを聞いた時を思い出してしまう。逸材は取られる：例え才能があった子を担当してもレースで勝てなければ実力がないと見られ悪評は溜まる一方。その循環から抜け出そうと躍起になればそれだけ沼にハマっていく終わらないジレンマ。

「なんかトレーナーやそれを目指す人が挫折する魂胆というか：闇を見たような気がする。本当にトレセン学園から辞めようとする寸前の人が醸し出す雰囲気ってこうなんだろうなっていうのがひしひしと伝わって来るんだけど：ってちよつと？ダメージ受けすぎだよ！その死んだ目で遠くを見るのだけは辞めてほしいのー！」

何が競バじゃ、アホくさ：やっぱあいつらイカれとるわ。本当に：ウチは無力量や、なんて展開を毎年味わうかもしれないなんて苦行そのものだ。それでも興奮出来るのなら苦痛でも喜んでしまうのが辞められない人達であり、強者へと成り上がるのかもしれない。

あるジョッキーはこう言った。

『レースに行く時に恐怖心が勝つようなら、それはもう辞め時だ。』

リスクが多い仕事だからこそその対価がある。その段階かも知しくは手前で、気持ちで負けてしまったら…もう終わりだと決めかかった方が身の為だ。』

また別のジョッキーはこう述べた。

『強い馬を乗れる環境を作っているからこそ、乗れる機会は自然と増えていくものだ。どんな小さなレースでも結果を残せば自ずと見えてくれている人が何処かには居る…だからこそ、どんな騎手でもこの馬だから駄目なんだ、この馬に乗っていれば俺でも勝てるなんて言葉は口に出してはいけないし、僕はそれを言った時点でその人に騎手愛は無い。』

そして個人的に評価し、着目をしていたジョッキー曰く、

『距離適性から癖まで色々知った中で、騎手が携わっている時間はたった僅かな時間でしか無い。だから僕たちはより一層勝つように仕掛けだったり、誘いだったり、道具への拘りであったりと、考えること全てを『競馬』という競技に繋がるように意識しているし、現にそれを発揮出来るよう目を養っている。』…その緊張感は恐らく途轍もないだろう。あの優駿を制したジョッキーですらそうなのだから。

その勝利の為に日々、厩務員は一生懸命手入れをし調教師によって磨き上げられる。トレーナーという職業はそれらを全て鍋にぶち込んだような存在だ。舐めてかかれば最も容易く魔物に飲み込まれる。

かといって強い馬が強いという根本は抗えようも無い事実であり、ウマ娘でもそれは同じだ。はてさて…トレセン学園の未来は果たしてどうなるのだろうか。

「うーん…でも勿体ないなあ。これを一人で全部記録して、先を見てやってるんでしょ？これを活かせれば相当…もしかしたら未来とか変わるかも、なんて」

「そんな大袈裟な…こんなもので変わるんだったらトレーナーはそれこそ苦労しないし、そもそもそんな半端な気持ちで志したらターフの上で戦う彼女らに失礼すぎて申し訳ない気持ちで一杯になっちゃうよ。ってかその気持ち自体が既に傲慢の域に達しているし、こんな

事を語っている時点でなれるはずもない」

もしも未来を変える事が出来たなら、なんてたられれば：存在しようものなら是が非でも教えて欲しい。あべこべだろうと身を呈して行動を起こす自信がある。：自信だけだが。それでも彼女らは彼らと同じように勝手に夢を抱かせ、勝手に期待させ、勝手に突き進んで、その子にとって幸せだったのかは知らないが死んでいくのだろう。俺1人が関わったところで、データを集めたところで：置いてけぼりを喰らうのはどの道外野の俺だ。

「こういうのは自己満足で満たすぐらいが丁度良い」

彼女達の舞台は俺とは別にある。ならば：せめてその舞台から、なるべく早いうちには降りないでほしい。そうした思いはやはり傲慢だが、その考えに対して同時に酔いしれている自分がいる事に、より心を締め付けられる。これではどちらが病んでいるのだろうか：笑えない。そんな俺に命を、勝利を背負える資格もそれを支えようとする気質も無い。

だがしかし：もしもが禁句とされている世界で、世の中を変えるような化け物を生み出せるきっかけさえ作れば：夢は必然と増えていくだろう、と考えている。あくまで俺が出来るのは対症療法であって原因療法ではない：それでも俺は、彼女達が活躍する姿を見たいだけだ。その一心でやってきた：良きサマリア人の法というやつだ。

「色々と難しく考えすぎなだけじゃないかなあ：けど最近トレーナーも減ってきているって聞くし、ありえなくもないかも。でも男性トレーナーだと別の意味で危なくなりそうだね」

「ウチは今から種ウマになりゆ：うまぴよいされるなんてのは、もっばらごめんだしなあ：」

嘘ですそれに関しては何本当は即座にコンセンション先駆けうまだつちすると思います。お一人様なんて生優しいと感じるほどに恐怖に駆られた時獲物が、必死に逃げようとする興奮作用から生命力も高まると言うので、余計にすぎゆんどぎゆんするしされると思います。

勘違いしないでほしいが、どちらにも嘘はついていない。

「ちよつ本当にそれは笑えないから。それこそ上に報告してもおかしく無い発言だから、男の子がそういうこと言ったら駄目だからね」

「どうもすみませんでしたそれは本当に勘弁してください」

些細な認識の違いの亀裂は、時として刃物となつて襲いかかる。言葉は刃物であるという表現の仕方は、そうであるに違いないのだから……悪ノリで下ネタを言おうものなら即お陀仏だ。

「……話は変わるけどさ、この割合の基準って因みに何？」

うぐつと喉を詰まらせてしまうほどに、俺とつて触れてほしくない核心部分……その予測を可能とするこの世界に来て初めて得た唯一のアドバンテージであり鍛え上げてきた能力。それこそ、

「勘」

「……は？」

その言葉を放った瞬間、瞬時に部屋の空気が一度くらい下がった。

遊びはおしまいっ！

「えっと…勘です」

「カン？」

「…勘です。ひゅーってやってひょいって感じで」

賭け事において、最大限活用する為の要素である運…これを確実に発動させ支えるための知識と経験数、それら全てを賄い支配する絶対的君主である己自身が生み出せる経験値を存分に発揮するため、ウマ娘の育成モードで培って来た武器。あの失敗率の%を超えるか超えないかの瀬戸際であつたり、マエストロが来るか来ないかであつたり、良個体を作れるかであつたり…全て、データでは計る事ができないゲームマー特有の絶対領域。

「いや、真面目に」

「至って大真面目です」

「…」

「その…それぞれの映像を参考に大まかだけどひゅーつと繰り広げられたレース展開を頭で何度も想像して、それを元に検証をしたものをひょいって感じで纏め上げて…：…大体勘で補っています、はい」
今までの話はなんだったのか、と思うほどの寒暖差。今は氷河期だろうか…真面目にやれって冷たくゴミを見る目つきで見ると彼女…流石お姉ちゃん、ちよつと癖になりそうなのは黙っておこう。死んでもこんな下品な考えを読まれてもすれば、それこそ俺は死地へと向かってしまうに違いない…一回死んでるけどな、うん。

「ごめん…それは引く」

「わかっているとは思うけど、正当性とか無いからね☒」

デビュー戦までならあくまでいけるって甘く考えているだけのただの人間が、トレーナーになろうなどと驕れるわけがなからう。それは百も承知…それでも、俺だって瞬時に諦め理不尽な事に『はいそうです』か、なんて素直に納得できるわけじゃ無い。だったらあとは選

択肢として残るのは、自分なりにやれるだけの事をやる…どんなに難しいことだとしても、それ以外に浮かぶ答えが無かった。

「でもなんだかんだ言って好きでやった結果、なんでしょ？」

「…まあ、ね」

僅か1年とはいえそれなりに彼女の事は信用してる。何様だと思うかもしれないけど、互いが嫌だったらもうとっくの昔に、どちらか一方がチェンジしている関係性だ。個人的には趣味の範囲で色々取り掛かっていることについて、カミングアウトしても問題はないかもしれないが、種ウマなんて発言をした今は…止(や)めておいた方が良さだろう。

「もう一度問うけど…本当にファンの人たちでもしないの？こういうさ、レース展開の流れとか」

「どの子が勝つか、までは大抵するだろうけど…オベイユアマスタートとかアグネスデジタル、エアシャカール並に度を越してるとは思う。なんというか、うん。オタクちゃんさあ…ってネタを使える範疇だよ。もしこの場に白い稲妻が居たらなんやねんってツツコミして来るよ？いや、間違いなくする絶対に」

その時、体内に電流が走る。

「おっなんやあ？喧嘩売つとんのかあ？ウチを何やと思うてるんや！偏見もええ加減にせいっちゅーねん。うん、タマはどんな時でもツツコミを忘れないな。私もタマのように頭の回転が速くなれば、テストの点数も上がるのだろうか。…なんでやねん」

「ちよちよちよーい！どういうこつちや！なんでウチとオグリの真似そんな上手いねんっ！」

「インタビュー記事とか見てますから。試合の雰囲気と全く違うけど、現にこういう事言いそうだし…そっちこそタマモクロスの真似上手すぎでしょ」

「そりやあまあ…レースとかよく見に行くし、何より今はウマ娘界の神世七代時代だからね」

「オグリキャップ、タマモクロス、メジロアルダンにイナリワン、サクラチヨノオー、ヤエノムテキ…そしてスーパークリーク。一応ディ

クタストライカとアキツテイオーを入れて9柱っていう人も居るし。ルドルフみたいに快拳を成し遂げたっていうラスボス感が一点集中されてないだけで、ターフの上は今や荒れ放題の重バ場でございますから」

「ここはエジプトでも無ければ戦国時代でも無いのにね」

「そろそろ12神に肖ろうとする動きもあるよ」

「とうとうそこまで…あつ、もしかしてこの前の安田記念と宝塚記念の影響なのかな？」

「そうだね、そのレースでバンブーメモリーが目をつけられてる。安田記念でオグリキャップにハナ差で差し切り勝ちし、続いての宝塚記念でイナリワン、ヤエノムテキ、ゴールドシチー、サクラチヨノオーに這いつくばって掲示板入りの5着。脅威の末脚とそれがむしやらによってスプリンターの先へと昇華させたって持ちきりだとさ。ゴールドシチーも大概化け物って評価されているわけでさらに持ち上げ三昧。ここには出てなかったけど惜しくも優勝2着で三冠を逃したスターローゼ然り影響がエグいのよね…この世代は一体何なんだろうなあ。本格化が重なったにしてもここまで長引くとは思えないし、仮にありえないだろうけど覚醒したとして、そのきっかけであるトリガーそのものが不明なのよね。個人競技とはいえ、そうホイホイと本格化した子達が軒並みを揃えて良いものじゃない」

史実よりも暴れておられる名バの皆様が降臨なされておいでだ、面構えが違う。お蔭で予想がこれまた難しい…どいつもこいつも有り余る力を思う存分使いこなして、必殺技を会得した強キャラの如く化け物揃いへと進化するものだから正直困る。三冠や大差勝ちといった快拳は生まれないものの、何年かかけて徐々に力が増すだろうという動きが、突如として全体的に急激かつ急速に均衡のバランスが崩れ更新された。それがよりにもよってこの世代からという…ほんま頭おかしくなるで。

ただ、まだ完全なる覚醒状態に開花して至った子を俺は見ただ事がない…というよりあくまでも『そう』らしい。あのシンボリルドルフやオグリキャップでさえ、その限界最大値の領域までは未だ到達してい

ない、と感じているようで恐らくは領域には至らずウマ娘としての力の核心を、一時的にゾーンによって入り口へと入ったことで擬似的に力を発揮する事が可能となっただけ、と述べていたことから…当人達はその先があると見ているようだ。

しかしながら能力は飛び抜けて一級品である事に違いない。力の根源である『味』を理解し、数多のウマ娘が立っている場所とは別次元の世界にいるような、人知を超えているという点は捨てられないだろう。

「用語とか名称に関しては厨二病が居たのかな？まあ…それは兎も角、恵まれた時代になってるけどね。そんなことより、あの…さ。もしかしなくてもだけど競バのレース動画を入手した段階で何度も見返してるって前提でもう話すけど、レースを見る頻度ってどれくらいなの？」

「…気にしたことないからわかんねえや」

「じゃあさ、今日あたしがここに来なかったら何してた？」

「来なかったら？ああ…えっと、軽く筋トレをして汗を流す。んで過去の競バ映像を見ながらテキストに飯を食って…そのあとは寝るまで観察と試合の展開予測とか勉強かな？まだ高度な駆け引きとか読めないし、試合展開も難しくてさ」

実際騎手も上に行けば行くほどタイミングとか見極めながら展開するらしい事から見ても、あれに関しては格好つけて言っていないけれども、まず間違いなく嘘では無い筈だ。

「うん、なんというか気持ちが悪い。色々と考え過ぎすぎているところとかも含めて…寧ろこれを聞いている側の気持ちを考えてほしいくらい」

だからって頭を抱えるような仕草を取るだろうか。

「そこまで言うか！自覚はあるけどそれだけは言うな…結果響くんだから」

「ごめん。でもちよつと…ううん。やっぱりごめんね、かなり引いてる」

「2度も言わないで…本当。一年前のスーパークリークみたいにな

るって」

「それって菊花賞の時のやつかな？でもあの時既に神戸新聞杯を大差で勝ってたし、特定のマスコミ陣営がフロックかもって言ってただけで：実際はそんな事もなく嘗めてましたってオチだったけどね。インタビュウの時、それなりにダメージを受けて顔が引き攣っていく様子は見るに耐えなかったけど」

「それでもヤエノムテキに対してクビ差勝利。4着までとの差が4バ身以上も離れての3着のサクラチヨノオーも奮闘したけど、2着との差が半バ身差だったからね。

：メジロアルダンは菊花賞には出場していなかった、もとい出ていたとしても長距離は苦手そうだし英断だと思っただけだし。まさかねえ：天皇賞秋で2着とはいえ、あのオグリキャップを差すとは思わなかったわ」

「天皇賞にかける想いは人一倍ありますってニュースでも取り上げられて、それに応えたってのが熱くてさ」

「わかりみが深いわ：でも皐月賞はヤエノムテキ、NHKマイルカップをメジロアルダン、安田記念がオグリキャップ：そして東京優駿はサクラチヨノオーがそれぞれを独占していたとはいえ、メジロアルダンがまさかマイル路線ではなく中距離路線に向けて対策を練っていたっていうのが意外や意外だったわ：息の使い方一つでも狂えば忽ち飲まれそうなのに、結果として期待を裏切らないところに関しては、流石はメジロ家の令嬢といったところだったが：いかんせん相手が悪かった」

「もうそのレベルの高さが：考えただけでも鳥肌が立っちゃうよ。何であんなにも強いのかすらわからずじまいだし。秘訣とか教えてほしいくらい」

「それ聞いてどうするのよ…」

「いや、ほら：トークショーとかあるじゃん？あのノリあのノリ」

「まあ俺も実際に聞いてみたいけど。で、話を戻すけどデイクタストライカは大体どの試合にも出て3位か2位という好成绩を収めた上で、マイルチャンピオンシップの1着をもぎ取って堂々と有馬記念

に挑んだけど、評価は当初、2人に比べると高くは無かったね。前まではエースとか呼ばれていたのに…」

「あの時ね…実は皆、誰を応援すれば良いんだろうって困惑していたんだよ。その様子を始まる前まではさ？遠くから見ているから、ちよつと面白く感じていたんだけどね…いざ始まるってなった時は『成程、これは選べないなあ…。』ってなって…結果的に芦毛の2人が抜きに出たって感じ」

「それでも負けじと踏ん張りを見せたストライカが有馬でタマモクロスにあと少し、というところまで追ってクビ差の3着。2番人気だったオグリキャップはその2人を背に1位を半バ身差で勝利…天皇賞秋、有馬記念とお互いにレコードを叩き出し、ライバルには絶対には負けないと豪語する芦毛コンビには痺れること間違い無しかと思えば、天皇賞春ではそこにイナリワンが参戦してタマモクロスと接戦を繰り広げ、掻つ攫つていくその姿に圧感。圧倒的強さを再確認する羽目になった後、ストライカはストライカでオグリにヴィクトリアマイルでリベンジして見事勝利を飾る…と。言っているだけで肌がヒリヒリしてしゃーない。少し休ませて欲しい」

出場しなかった休養組を除き、彼女らと対戦した事がなかった新参は忽ちフルボッコにされ、格の違いを見せつけられると同時に頭角を更に露わにした彼女らに観客も大盛り上がりだ。

「あたしは今言われた試合の全部を、殆ど生で見えて来たから尚更な事だけれど…今でも脳裏に焼き付いてるくらい鮮明に覚えているよ。白熱も白熱…まさに強者だけが味わえる最高の試合だったってね」

「羨ましい…。クソツ！こういう時ほど男という性別を呪ったことは無い！」

「うわあ…。ま、まあそんなオタクである君がアイネスフウジンを推しているってのがあたしは意外だったなあ。これを言ったら悪いかもしれないけど、今の世代や同年代の他の子と比べたら…決して華やかとは呼べないし…」

随分と酷評だ。俺自身、前世同様に…ただ強いだけのウマ娘だと思っていたのは事実。それを覆した彼女ははつきり言っただけの怪物共の

部類だろう：何より最近になってその質が深くなったようにも感じられるほどに、一番濃度が濃い。

「あくまで俺が見た限りでは：ね。多分薄々気付いている人は居るんじゃないかな？」

些細ではあるものの、潜んでいた潜在能力が丁度一年前を過ぎたあたりから解放され始めてきて：予想よりも成長曲線が右肩上がりのまま下がる未来が、何故か彼女達と同じように見える気配が：俺の考えから浮かばない。瞑想に耽ろうと、頭を捻らせようと：そんな予感がしてならない。メジロマックイーンの本格化は既に為されているとはいえ、圧倒的に強いウマ娘って感じで潜在能力こそ高いものの、アイネスフウジンより開いてはいなかった。その2人以外は残念だけど、強者と同じかそれ以下な予感がしてならない。

「：：何に」

「私達と同じ土俵に立てるかもしれないっていう、退屈を紛らわしてくれそうな期待感から生み出された：悪魔みたいな強さを誇る怪物共の嗅覚にだよ」

強者の上に行くものはそうした鼻を利かせて登って来させる。そして完膚なきまでに捕らえて絶望の淵へと追い込んでいく：戦いに容赦は無し。勝利への渴望を思う存分吐き出せる唯一の場であるレースにて、勝利の切符を手にする新たなウマ娘が果たしてこの先、彼女達の前に現れるのだろうか？

シンパシー

「そんな切符を彼女が持っている、と?」

「まあ…俺は持つていて欲しいと思っっているよ。特にこのレースで見せたような粘り強さから出たであろう最後の力を振り絞って勝ちに行く姿は…見ていて気持ちが良いからね」

そう言うと、彼女はどこか引つかかったように引き攣りながら口を開いた。

「それ…ただ彼女の走る姿が好きだけじゃない?」

凶星である。これが競馬だったら容赦なく切り捨てる部分であっても仕方がないのだが、ウマ娘だと人型な分共感力が意外と…クるものなのである。

「ごもつとも。でもやっぱ見ていて心を熱くさせるのはそこよ。俺は専門家でもないしターフで走るウマ娘でもないから、外から見ても勝手に言っているだけの凡人…時には心にもない言葉とか言うかもしれない。それに根性とか嫌いだしね。あとは自分を大切にしないやつも好きだけど嫌い。何を言っているんだって言われそうだけど…」

楽にのし上がれるなら俺もそれがいいんだけどさ…一回きりの真剣勝負、レースなんてそもそもそう簡単に勝てるものじゃないじゃん?

そんな難しいものに対して、それも中央で最後の最後に行く姿勢を見たら、そりゃ伸びるって思うでしょ。幸い力はあるからデビュー戦2位なわけで…それに」

「それいっ?」

「いや、これはあくまでただの願望なんだけどね?」

原作でもあの走りはフロックではない。そして前世にて、生で見る事ができなかつたあの伝説の東京優駿…遙か生まれるよりも前に、元ネタであるあの馬が、最後に見せたあの輝きを…競馬ファンならば動

画なりで一度は目にするはずだ。これが…ウマ娘の世界だからこそ余計に声を大にして言いたい、見てみたいという想いは決して偽りなどでは無い。

「俺はただ純粹に、今季だったらアイネスフウジンが三冠を取る姿を見たいただけだよ。…まあメジロマツクイーンでも見てみたいけど、彼女の方はメジロ家だから多分天皇賞メインになるとは思うし」

「…そっか。んー？でも次の秋天と有馬…あと出れたら春天に別のお嬢様が『身体の調子が良いので出場するかもしれないね。』って言うって聞いた気がするんだけど」

「あー…メジロアルダンか」

「何か毒を含んだように名前を言ったけど…どつたの？さつきまでの勢いがないというか…らしくないね」

「いや、別に何かがあるってわけではないんだ。ただね、彼女の強さの秘訣？根幹？が正直他の人と違って見えすぎというか…。ほら、病気だか体質持ちで、人より走る機会がそもそも少ない事で度々言われているじゃん？それであるの強さとメンタルだから…ちよつち予想が難しく、今のメンツの中でも一際不気味なのよ。身体が調子いい発言した時に毎回出てきては上位に入るから尚更ね…それを言うならオグリも走れるから走るってだけの理由で、あそこまで強くなるのは異常だと思うけど」

これが、あの想いの力？ってばりに一瞬の栄光を求める修羅の道を行くものだから、ガタイの良さと相まって最早恐怖すら感じてしまう。脚がガラスだとしても心はダイヤモンドばりに硬いお嬢様とか、はつきり言ってグラスワンダーより物騒なのかもしれないと思ってしまいうくらいには、流石重戦車と言えるだろう。オグリもオグリで右膝を、タマモはガリガリだったんだっけか…彼女らの場合はだからこそか。

「ああ…公言していた事も覚えているのね。オタクくんさあ…」

「おっと、その先は言うなよ？おかげさまで今日は耳が痛くなりそうだ」

そうした会話をしてふと時計に目をやると、業務規定を少しばかり超えている。お互いにこれは不味い、と慌てふためいてしまった。少々話しすぎてしまったようだ。

「なら、あたしはそろそろ帰るよ。報告もいつもと同じようにしておくし…色々と五月蠅くはしたくないからね」

「助かる…何事も穏便に、つてのが一番だし」

「ただ、見逃せない点を一つだけ…夜更かししないこと。実際もう限界で眠いでしょ」

「ありや、バレてた？」

「あれだけ普段と違って熱がこもったように喋っていればね。深夜テンションにも程があるって。次、今日みたいにもいつも以上に夜更かしてもしていたら…報告しますので」

「う、ういっす！」

「じゃあ、またね」

手早く身支度をし、すぐさま出ようとする彼女を慌てて引き止めるために声を上げる。匂い消しをしないまま街中へと行けば、特定材料の一つとしては途轍も無いほどの武器となりかねない。

「ごめん、忘れてた！」

「つぶねえ！こっちの方が心臓に悪いって。んじゃ、またよろしくね。いつもありがとう愛さん」

「任せなさいっ！いえ、こちらこそ今日もありがとうございました！」

プシュツと鳴り響いたスプレー特有の音と薬品の香りが、部屋に広がっていた事が今では…少しばかり寂しさを感じてしまう。人肌が恋しくなってしまう時でお馴染みな、あの独特とも呼べるようなキュツとした心の締め付けはどうにも慣れない。一人暮らしをしているときに友達を帰らせた後のあの後始末の面倒さと共に味わう虚しき、とある種近いのかもしれない。

気を紛らわそう…こういう時は身体を動かして、美味しい飯を食って、好きな事をして、思う存分に寝る。これが一番ストレスもかかる事が無く、適度に運動する事で身体も健康に保てるという一石二鳥な行い

だろうことは、よく理解している。

そういえば、史実に基づいてのレースならば：次は毎日王冠になるのだろうか？高松宮杯が既に撤廃されGⅠ扱いされているともなれば、もう色々と史実通りと呼べない内容になってはいるが、恐らくその分：原作以上に荒れることとなるだろう。天皇賞秋に向けて視界を良くする場にて、相手の手の内を探るにはもってこいなはずだ。或いは天皇賞秋である程度疲労させてから、ジャパンカップに余力を回せるか：これはちと汚いやり方か。

それでも彼女らには通用はしないだろう。特にあの怪物共が黙って高松宮記念を始め、大阪杯やフェブラリーステークス：帝王賞、ヴィクトリアマイル、そしてダートダービー他GⅡを含め、重賞で勝利を挙げてから疲労なんでもので引導を許して明け渡すなど、到底考えられない。そも、今の彼女達に引退の2文字がまず浮かび上がらないだろうし、もし引退しようものなら早すぎる始末。GⅠをゲームみたいに取りすぎている時点で、既に我々観る側の感覚も狂い始めていることに慣れてきたってこともあるのかもしれないが：普通ならシニア級の方々にボコボコにさせるのが常な筈だ。

だというのに怪我すらないって前代未聞すぎる。これがプリティーダービーの力なのか？

まあそれでも：せめて一度でいいから、彼女のように新たに進化した彼女達を生で見たいものだ。小さな雷神、狂乱の王女、偉大なるマ王、射程圏内、不撓不屈の帝王、白色彗星、武神に桜姫、そして最強の怪物：戦慄しない者などいない。特にあの芦毛共は抜きに出ている：どいつもこいつも実力で覆す馬鹿に変わりはない。故に彼女らは自らの手と足で、勝利の女神を引き寄せ選ばせてくる。

天上天下唯我独尊：彼女達にしか成せる事ができない崇高な生き方、目的を指す言葉…：そして度々圧倒的な強者に対してのみ使われるこの言葉が、どちらの意味で取ってもウマ娘にはよく似合っている。今後出てくるであろう子達でもそれは同じだ。

そんな事を考えていた同じ府中の空の下で、彼女達が精一杯駆け抜けたであろうトレセン学園。そんな憧れや夢が集まる場所は、一体ど

んな場なのだろうか： 地面の蹴る音とか違うんだろなあ、などと
思い耽っている同時刻：彼女の匂いは、俺の汗臭い匂いに負けるよう
にして完全に消えた。

「あ、アイネスさんだ。アイネスさーん、こんばんは！ってなんか物
凄いい汗だくなんだけど、どうしたの？」

「こんばんはアイネスさん。夜遅くまでバイト、お疲れ様です。検
知、恐らくデビュー戦の疲れによるものかと。それにしても：身体的
な負荷に比べて精神的に疲労していると推測出来ます。」

「あ、ファルコちゃんにブルボンちゃん！おつおつ〜！いやあ：
やっぱ練習時間が足りないし、少し走り込みしたい気分になっちゃっ
てさ。：そっちは自主練帰り？」

「いえ、今日は逃げ切りシスターズの打ち合わせだったので：」
「あつそかそか、ごめん：ふう。そうだったね。えっと？確か次の
公演をどうするかとか、あとは：グッズ販売に関してだけ」

「アイネスさんのバイトや今後のレース日程に合わせて、スケ
ジュールもばっちりです！」

「本当？：ありがとうなの！：ってレース日程って待って。誰にも教
えてないんだけど」

砂の師匠、スマートファルコンを筆頭とし逃げ切りシスターズとい
うアイドルグループ兼、中央の広報担当でもある彼女達は今や有名で
ある。

「レース日程等の事については、担当トレーナーの方に直接お伺い
しました。問題無いように後日改めて決定する予定だと伝えたとこ
ろ：全て上手くいきました」

「意外とそういうところ抜け目がないというか狡賢いよね。それで
いて手段が脳筋だからなあ：スズカちゃんの気持ちがあわかった気が
するの。ま、まあトレーナーが決めたなら大丈夫なの：かな。ってあ
れ：その肝心のスズカちゃんは？どうしたの？2人で居るってなんだ
か珍しいね。いつもは3人で居るのに」

「そのスズカさんについて少し気になることが数点：存在します。

一度アイネスさんにご相談をした方が良いのでは、とファルコさんと話していた最中で…」

「あたしに？何々？スズカちゃんに何かあったの？」

少し息を含み、声を出そうとする2人…まるで、この世が終わってしまうような…兎に角顔が暗い。

「最近、スズカちゃんの様子が少し変わったんだよね」

「スズカちゃんが…ど、どんな風に？まさか怪我とか☒」

「いえ、その可能性はありません。ですが…以前に比べて走行練習時間が大幅に減少、並びにスマホやインターネットに依存している傾向にあります。逃げ戦法のデータ収集、自分自身の体調管理などを今まで以上に徹底的に行うようになりました」

一瞬、いや大袈裟に刹那と読んでも良い。聞き間違いであつて欲しいと願うほどにインパクトのある内容が、アイネスフウジンの頭を思いつきり殴ったかのように突き抜けた。

「え、何それ天変地異とか…まさか、せ…世界が終わるんじゃないん？前半部分は兎も角、後半部分はそれほど問題でもないような気がするんだけど？」

「ええ、流石に大丈夫だとは思いますが…本日行われたウマドルミーティングから見ても、特に問題となる様子は見られませんでした。ただ…」

「スズカちゃんが、走ることにしかに興味ないってあのスズカちゃんが！教室や自室でパソコンに映っているデータやスマホを見て、ニヤけ面することがあると思う？担当トレーナーさんとの連絡なら…寂しがり屋だからあり得そうだけど、なんか違うっぽいんだよ！これはもうウマドル…いや、女の勘だよ！」

「女の勘なんて言葉、久々に聞いたの」

「私はそこまで疑問には思っていないのですが、以前にも増して筋肉の成長率や、付き方により磨きがかかったように見えたので。逃げ走法に関しても1ヶ月前と違ってより安定しているので…どのよくな心変わりがあったのか、という点については疑問視しています」

「ちよつと待って、言い方とかこの際目を瞑るとしても、それでも

色々突っ込みたいの。まずスズカちゃんが如何に走りオタクだとしても、スマホを見て笑顔を浮かべることくらいあるんじゃないかな？ほら、デジタルちゃんとかネイチャちゃんとかそんな感じだし…。それと筋肉や走り方とかは、ただ単にトレーナーさんが凄いつてだけだと思っただけだ」

「アイネスさん、甘く見たらダメです…。フクキタルちゃんが言うには『シラオキ様のお告げによると…。ある人の導きによってウマ娘の運命そのものが変革されて、しまいにはその人の周囲にまで影響が及んでしまうかもしれないのです！実のところ既に起きているのかもしれない！』…だつて！」

「物凄く大雑把なの」

「こういうのはインスピレーションが大事なの！アイネスさんの時だつてそうだったし！」

「確かにあたしもウマドルに導かれたとはいえ…フクキタルちゃんの占いは当たることもあるけど…信憑性の有無とか諸々スズカちゃんに關しての事は一度置いておいて…。ウマドルライブとかの予定についてはマルゼン先輩にまだ言つてない感じで良いのかな？」

「二先ずチャットの方に内容の方は送信済みです。マルゼンさんは今、中央のレース環境について議論が立ち尽くしているみたいで、生徒会に緊急と称して招集されています。何しろ人手が足りないとかで…」

「それにマルゼン先輩は一人暮らしだからあんまり学校に長く居座つてさらにウマドルの方もつてなると、逆に氣遣われるのもあれだからつて…あ、後で連絡はして欲しいつて言つてたから私たちは問題ないし、マルゼン先輩は凄くから今のところ大丈夫な筈だよ！」

「そっか…マルゼン先輩だし大丈夫か。…あたしも安心しちゃうけど、氣は抜かないようにしないとね！」

「うん！ま、まあ私たちより当分の間…数日間に亘つてたづなさんの胃が精神的にもたないかも…だけど。この前もなんか様子が変わった時があつたけど、ドライブとか色々付き合わされたのかな、なんて…と、兎に角！マルゼン先輩が氣付き次第、日程を決めて軽く

打ち合わせしてって感じになるかな?」

「ああ…うん。まあたづなさんだしそこも大丈夫だと思いたいけどね。で、スズカちゃんか…。うくん…因みにそれっていつからなの? その…ネット依存になった具体的な日時とかかってわかっていたりするのかな?」

「わかる範囲のみですが…調子を崩していた、と傍目で判明したのが32日前の午前6時42分12秒です。エアグルーヴさんも心配だったようで声をかけていました。そこから約6日間で調子が戻って普段通りになったと思つたら…どことなく様子が変わった印象を受けた感じです。付け加えるとするなら担当トレーナーさんとの関係性が緩和されたようにも見えました」

「んー…成る程。あたしだったらなるべく刺激をしたくはないから、一度近くで様子を伺つた方が無難に思えるの。本当にスズカちゃんがネット依存になっているのか、とか実際に確かめないことには…」

「そうですね。ではプランを考え密着観察といった形で実行に移すのはいかがでしょうか、ファルコンさん」

「いいねブルボンちゃん、それでいこう! よおし、頑張るぞっ! ありがとう、アイネスさん!」

「ありがとうございます、アイネスさん」

「いや大丈夫だよ、うん…ただ、こんな時くらい脳筋から離れてほしいの。スズカちゃん…お願いだからツツコミしに来てくれないかな。つと、あたしはこつちだから2人とはここでお別れだね」

「そうだね。うう…アイネスさんも同じ寮だったら良かったのにい」

「あはは、マルゼン先輩を除いたらみんな栗東寮だもんね。あたしはこつちの方が過ごしやすいけど、こういう時はちよびつとだけ寂しく感じちゃうね」

「生徒会に殴り込みしますか? 命令さえ与えてくれるのであれば、私は動きますが」

「いや…大丈夫なの。そしてちよつと想像したら笑えるのが悔しい

の

「メカジョークですので。あ、それと唐突ですが…すみませんアイネスさん。個人的に相談したい事がありますので、後日また時間がある時にお時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

「え？ああ、うん。大丈夫大丈夫、お姉ちゃんに任せなさい！」

「ごめんねブルボンちゃん。私じゃあ力不足で…」

「聞いていただけただけでも嬉しく思います。おかげで気が楽になりましたから…」

「あー…結構深刻なのかな。今からでも相談に乗ろつか？」

「いえ、夜も遅くなるので今日はこの辺で」

「そっか」

「じゃあまた連絡するねっ！おやすみ〜！」

「うん、おやすみ！」

「はい、おやすみなさい」

2人の背中を見守ってから、彼女は帰路へと向かう。サワサワと夏にしては涼しい風が過ぎ去って、身体を心地よく冷やしてくれる。

「…ふう」

ツツコミ要員がもう少し欲しいの…その願いは奇しくも叶わずにいた。マツクイーン伝説の野球観戦や、ライアンの少女漫画が意外と過激だった時並に叫びたい気分であった。

少し歩いた後、漸く着いた自室に胸を撫でるようにして、ホツと息を入れる。その瞬間、気が抜けたように肩に入っていた力が解放されて、倒れ込む勢いで扉を開けた。

「あくバイトぢがれだあああああ」

「おかえり〜、アイネス」

「アイネスさんおかえりなさい」

「ただいまあああ、ライアンちゃんにアルダンさ…アルダン先輩!!
？」

「こんばんは。少しお邪魔をしています」

「い、いえ。お、お恥ずかしいところをお見せしてこちらこそ申し訳

ないと言いますか、何と言いますか……。そ、そうそう！アルダンさん、今日はどうされたんですか？今は夏合宿に行っているんじゃない？」

「ここ数日帰省する予定がありまして、ここ1週間はこちらでトレーニングを…それと実は今日、ライアンに併せ練習も付き合っていたので、そのお礼としてこうしてお夕食を作ったのです」

「でもこれ、2人分にしては量が多いような…」

「その…アイネスさんとも一度お話してみたかったです、中々機会も無かったので…余計なお世話でなければご一緒にいかがですか？」

「良いんですか？ぜ、是非！実はお腹がペコペコで…助かります」

「んー…だからといってこの夏に鍋はどうかと思うんだけど。アルダンさんといえど…流石に部屋が熱いよ」

「その…オグリキャップさん達とよくお鍋をする機会が多かったのでつい…栄養素もバランス良く取れますし、水入らずで話ができますので。何より楽ですよ、楽！まさに料理の革命です！」

「ああ…食事療法の悪い癖が出たよ。なんだろう…この実家の姉感。先輩方もそうだけど時々抜けているんだよなあ」

「オグリさん達もそうだけど…アルダンさんも意外とマイペースなの？…にしても凄いやというか少し羨ましいなあ…アルダンさんと併走トレーニングが出来るなんて」

「偶々だよ、偶々。一応聞いたからね？あたしが併せして良いんですかって」

「勿論です。それで…もしよろしければアイネスさんとも併せをお願いしたい、と思っけています…勿論、これもご迷惑でなければよろしいのですが」

「へ？い、良いんですか？」

「はい…ですが、併せの日程は数日…大体2〜3日経った後で宜しいですか？」

「何か都合が悪い日があったり、とかですか？あたしは大丈夫ですけど…」

「いえ…もしかしなくてもですけど、アイネスさん…あなた、腰を少

し痛めておいでで?」

「うえっ☒」

「そうなの? アイネス、そんな状態でバイト行ったの?」

「あっははは…まあ、この前のレースでちよつと…ちよつとね、ドジしちゃって…。」

「…体調管理や調整に関して五月蠅い人でしたら、その場で喝が入っていましたよ?」

「いや、ホント…何も言い返せません。はい。…それよりも食べません?」

「…誤魔化した? まあ、遅くなると益々栄養効率がくって話になりそうだし、食べよ食べよ!」

「そうですね。その身体に対する意識の低さは食べながら注意をするとして…まずはお鍋を楽しみましょうか」

「あ、アルダンさん? そ、それは流石にそれはキツいと言いますか…」

「いただきます!」

「あたし、多分学園内で一番メジロ家に振り回されっぱなしなの…
こうなりやヤケ! もうヤケ! いただきますっ!!?」

「…ふふっ」

『逃げを展開している時、どのタイミングで後ろとの駆け引きを成立させたり、調整を測ったほうが良いのでしょうか。』

『こればかりは自信は無いです。それでもよろしいでしょうか?』

『大丈夫ですよ。』

『では、お言葉に甘えて…とあるカンフー映画で気配を読み取る訓練をしている描写シーンがありました、それを上手く活用出来たら楽しくなりそうだな、と。』

後ろの気配を振り返りながら確認するとその分だけ、集中力が途切れたりしてロスに繋がりがかねないので…。と、ドヤ顔で言いたいとこ

ろなのですが。』

『あれ、まさか私のトレーナーさんの真似事…?』

『はい。これに関していえば仰る通り、完全にあなたのトレーナーさんの真似事です。ちよびつとその才能が悔しかったので…。』

それと、実際やろうとすると時速60kmを超えていたりするのが中央クオリティですのでこれに色々な意味で耐え切れるか…例えば、メンコを被らないと集中出来ない人や飛び散る砂が嫌いな人、耳が敏感な人だとほぼ確実に逆効果なので個人的に調整していくしかないですね。

手っ取り早いのはある決められた地点で視野を広く保ち、上手く確認するように癖を付ける事などが挙げられるでしょうが…すみません。レース場の違いなどもありますし私自身、あなたの視野範囲を知らないのに加えて、敢えて視野を広く取らない方が走りやすいという人も居るので…こればかりは正直お力になれないかも。』

『でも、なんかそれっぽいですね… 道具とか工夫したりしてみると面白そうかも。参考がてら相談しつつやってみます。』

『え…いや、本当にこればかりは確証が無いので無理はしないように。』

『ありがとうございます!では、おやすみなさい。』

『おやすみなさい。暑さが続きますからくれぐれも体調には気を付けて。』

『はいー』

今日も無事、1日が終わろうとしていた頃…パソコンを閉じ、スマホに映っていた記事を閉じて、夢の中へと向かう途中のことである。眠気を遮ってきた一通の通知音に意識を奪われ、その音に驚きながらも画面を覗く。

『6. 23. 2 (8. 3 (1. 35. 22. 28. 3 (1. 37.
26. 3 (21. 21540. 27. 54. 3 (4. 53. 29. 2
41. 25. 54. 4 (47. 43. 25. 25. 26. 50. 3
3. 2 (0. 35. 2103. 4410. 32. 5 (1. 30. 24.
324. 3 (4. 46. 31 (0. 43. 34. 52. 50. 342.
324. 3 (4. 46. 31 (0. 43. 34. 52. 50. 342.

3 4. 5 0. 2 1. 5 2. 5 5 0 3. 4 4. 4 1. 2 4 4 (2. 2 7
 3. 2 4
 6. 5 0. 3 1 2 4. 4 (1. 5 2. 3 4. 3 (4. 4 3. 2 7 1.
 3 4. 5 6. 2 (4. 3 (2. 3 9. 2 3. 2 4. 4 3. 2 7 1. 3
 2 7. 5 3. 2 9. 4 5 1. 2 5. 5 4. 4 (2. 5 5. 5 1 4. 5
 2. 5 9. 4 4. 5 6 6. 4 (4. 3 5. 2 7. 5 1. 3 6. 2 4.
 5 4. 3 5. 5 1 2 1. 3 0. 3 4. 5 4. 4 (6. 3 1. 5 (9.
 5 0. 4 3. 2 7 3. 3
 7. 5 3. 2 1 0. 3 2. 5 (1. 3 2 (4. 5 2. 4 4 9 0 4 3.
 2 3. 2 (3. 2 0. 3 4. 5 4. 4 7. 5 1. 3 9. 4 3. 2 1.
 2 4. 4 (3. 3
 4. 5 (9. 2 7 3. 2 8. 3 (1. 3 — 3 —
 6 8 2. 3 6 8 2. 3 1. 2 4. 3 (3. 2 8. 3 (5. 2 1. 5

「長つ…なんだこれ。まあいいや…寝るか」
 眠気には勝てなかった。

迫る影

「はあ…やっぱりレースを見るのは楽しいんだが、画面越しに見るのも飽きるというか、流石につまらなく感じてしまう。…否、これは我儘な殺意にも似た生殺しされているみたいな感覚だ。明らかにどうしようもないというこのやばさ…圧倒的にこれはやばい、と身構えてしまう恐怖！今回の危険信号はデカすぎる…今回はかりは現地で見たい、ガン見したいツツ!!？んがああああ!!？ロジカルに考えてもあべこべ世界まじでクソすぎるだるうおおお!!？マジクソクソクソオブクソリバティイイイ!!？」

持っていたスマホを投げ捨てたくなるほどに震えた手をなんとか堪え、スマホを机の上に置いてから今の率直な気持ちを、語彙力を失ったまま頭を抱えた状態で勢いのままに表へと出した。

「またもや隣の部屋から物音が聞こえたが…すまん。正直悪かったと思っているが、反省はしていない。いつもならば俺にとっては嬉しい事ではあるが、今はそれどころでは無いのだ。息切れが…切ないと感じる程に、呼吸を整えなければならぬほど興奮と挫折を味わってしまった。」

ソワソワと足を急かし、鳴り止まない興奮に吞まれてもすれば、異様なほどに面倒事へと発展してしまうという予感がして止まない。しかしとて、今すぐにでも動き出したくなるような、尋常じゃないほどに焦らしプレイをされているような、手が届きそうな快樂がすぐ近くにあるのだ。

部屋でポツンと一人軽い頭を下げた体勢になりながらも、今にも涙が出そうなかめつ面を直し、直様落ち着きようを取り戻す。その理由を聞けば無理もない…と誰もが思うだろうが、やっていて恥ずかしくなったのも同時であった。

「せめて何処かの誰かさんが口を利かせ、キリツした表情を俺に向けて『トレーナーやってみないか?』って言ってくれねえかなあ…流

石に来ねえよなあ…来たとして男だしなあ…ハハツウケる。なんだよこれ。こんな夢にまで見た天国は無いのによお…んなもん、泣けてくるじゃねえかよお。ああああ…見に行きたい。見に行きたくてしようがない…これだけは譲れないものがあるって言いたいけどなあ…はああ…」

そんな独り言をついつい呟いてしまった8月に入りかかったある日、世間でも一足先にだが毎日王冠で話題が持ちきりとなっておりトレンド入りを果たしていた。敬意と拍手を今すぐにも送りたくなるようなあの伝説が、幕を開けようとしている…といってもあくまでも出走予定が決まったとかそういうわけではなく、情報が予めある種のネタバレとしてリークされた…と表した方が正確な表現かもしれない。

情報を探る為に使っているスマホに映るは、特に何かを投稿するわけでもなく多少のリツイートやいいね…そして時偶に、リプに応援メッセージを送る程度の…そんな極々普通の平凡なウマスタとウマッターのアカウント。そこには今日並べられたトピックがあった。『白色彗星、重戦車の名称で知られるメジロアルダンが昨夜…ウマッター、ウマスタグラムにてこのまま体調と調整が順調であれば毎日王冠と天皇賞秋に出走予定をすると表明。波乱の幕開けとなるか？』

『JCI着オベイユアマスター、再び来日か？はたまた宣戦布告なのか☒この真意は一体…？【ジャパンの芝が香ばしかったのを今でも時折思い出しちゃうよ！次も勝つからよろしくね!!？】（翻訳済み）』
『危険と呼ぶか、冒険と呼ぶか…デイクタストライカ。メジロアルダンに続いて毎日王冠についてのコメントを上げる。彼女の発言傾向からして、出走登録予定濃厚説浮上？マイル頂点戦がまたもや勃発するのか、注目が集まる。』

『オグリキャップ、合宿場にある食料庫の中身を一掃。料理長は「2週間保ったのが奇跡と言っても良い…久々に武者震いが止まらない」と発言。互いに火花が飛び散ったここでも、中央の威厳を見せつける結果に。』

『またもや赤ちゃんにされてしまったのか!? 夏合宿中、最強バとして名高いタマモクロスとイナリワンの両者が【ママ】の犠牲者となった模様：無惨な姿がヤエノムテキ、サクラチヨノオー両者の微笑ましい写真の隅に映っていると特定され話題に。コメント欄は阿鼻叫喚か騒然したかのどちらかだった様子。尚、アキツテイオーやブラッキーエールを含め、関係者は口を閉ざしている模様。』

『スーパークリークの調子は好調を維持。本番の天皇賞秋に向けて視界良し。』

『大人気逃げ切りシスターズ、小倉競馬場にてウマドルライブを開催!!?』

「あかん…これ、普通に燃え上がるような熱い展開とは別に、よくよく見たらトレンドの半分がカオスすぎないか? やっぱロクでもないな。夏合宿含め、レース場にはいない方が良かったかもしれない…うん。冷静に考えてみてもやっぱ無いわ」

どうしてくれようか、あの化け物ども。会ったことないけどよお!! ?色々とその…イメージその他諸々、威厳もクソも無さすぎる。鳴り止まない興奮が一気に冷め賢者モードへと変わっていったのを、少し悔やみながらも画面へと目を向け、切り替える。

血湧き肉躍るような熱い展開が一気に冷め、余計に温度が下がった分…より冷静になったことで彼女達を分かる範囲で観察するが…ふむ、わからん。体が出来すぎていてよくわからん…誰が勝ってもおかしくない、まさしくそれが第一に受けた印象であった。

そして今日は生憎の日曜日…例のウマ娘ちゃんもこの日は、大体潜ったままだ。レースに関しての一切忘れる日を上手く作れたのか、週末のこの日に限っては連絡することもされることもない。テキトーにぼちぼちとスマホを弄りながら各バをチェックしていく。

つまりは…どれだけ時間を費やして粘りながら予想を立てても問題は無い日である、ということ。まさに至福の時である。

さて、どの子から予想していこうか…楽しくなってきた。

そんな気持ちで嘲笑うかのようには、ピコンつとウマッターからの通知音が俺の耳に伝わった。先程の憤怒と怠惰から生まれた蟠りを解

放させてくれた音でもあり、いざ始めよう…といったタイミングで集中を掻き消した音でもあるそれに、若干イラつきながらも、やや少し乱暴気味に開く。

『682. 3682. 31. 24. 3(3). 28. 3(5). 21. 5
4. 5(9). 273. 28. 3(1). 3—60. 35. 51. 32(1
4. 3(4). 47. 552. 34. 47. 52. 28. 3(1). 32.
51. 33. 39. 35. 4』

「またか…んだよ、イタズラか？しかもこれ、見るからに捨て垢…だな。ブロック安定お茶の子さいさい…はい、サラバダーっと」

下らない興醒めだ…というかなんだよ、この数字は…もしや暗号の真似事か？悪いが本当に暗号ならば、何処の誰ともわからぬ輩の者に、ましてや本当に暗号ならば解読に費やす時間が非常に勿体ない。端からそんなものに付き合い切れないわ…気が向いたら解読してやるからよ、と若干投げやりに放置してパソコンに目を向ける。そもそも俺に解読出来る知能があるのかどうか怪しいところではあるが…まあいい。

鬱憤を晴らしたい気持ちが収まることを知らずに、フツフツと沸き立って仕方がない。

そんな時、何気なく付けていたパソコンから特有の通知音が届いた。1人目の時と同じ… 新客のお出ました。覗いてみると掲示板に新たな部屋が作られていたので、早速作業に取り掛かる。

『とある人伝いを元にここを紹介されました。もしお時間がありましたら、相談に乗っていただきたいです。』

『はい、大丈夫ですよ。どうぞされましたか？』

即返信はお手の物。慣れた手つきで…といってもこれで2人目なわけだが、はてさてこの子はどんな子羊だろうか…腕が鳴る。

『実はこのサイトよりも前に、私の担当…はまだ付いていないのですが、あるトレーナーさんから直接アドバイスを貰いました。その時に、「君の走りはありきたりな枠から抜けて、様々な応用も利くのに何故オーソドックスな戦法に固執しているのか…その脚を大事に使わ

ないだなんて宝の持ち腐れだね。」と言われたのですが、いまいちピンと来ません。さらにこのところ負け続きで、冷静に見ようとしても焦りが出てしまい客観視出来ません。どの部分を見直す事が出来るようになれば、自分にとっての視野が広がるのでしょうか?』

『現状を振り返る上で最も大切なのは過去の記録:ですかね。いつのものでも構いませんので過去のどんな試合で、あなた自身がどのようにして勝利をしてきたのかを、観察してみると何か発見があるかと思えます。過去の試合記録又は映像があれば、一度映像越しに見る事を私はお勧めしたいのですが:そういった記録映像はお持ちでしょうか?』

『私の手元には今ありません。借りる事は出来ると思いますが:。』
『:ということは、そのトレーナーさんが過去の記録映像等を見た上で、先の発言をしたのかもしれないね。でしたら話は早くなりそうです。しかし:これはあくまで提案にはなるのですが、当分の間はリフレッシュに費やしてください。まずは落ち着きを取り戻す事が重要なので、趣味があるのでしたらそれに没頭するなどして、一旦受け入れる体勢を整えてあげましょう。』

『正直そうした事をするのは不安にもなるのですが:私の性格上、ある種の逃げとも受け取れてしまうので余計にストレスがかかりそうなのですが:解消させる上手い方法はありますか?』

『確かに仰る通り、そうかもしれませんが:短期間であれば効果は絶大に発揮されると思います。もし焦って変に怪我でもしたり、過度なトレーニングを行うようであれば、それこそ選手生命が途絶えてしまう事だつてあるのです。何事も自分に合ったベストな状態があるので、それを探ることも強くなることの秘訣ですから。』

焦りは禁物だと脳が分かっているにしても、どうしてもそうした時は視野が狭まってしまう事が多々あります。そうした状況下で1人で振り返る作業をしてしまうのは、何かと恣意的になりやすかったりする事もありますので:そうですね、なるべくライバルではない立場にいて、それでいて先輩や頼りになる人があなたの周りに居るのであれば、その人と一緒に見るのが一番効率的ですし、それが自分にとって

も安心し満足のいく回答が得られやすいのではないかな、と思いません。』

『成程…ありがとうございます。またこちらに伺うことがあれば、その時はよろしくお願いします。』

『はい。こちらこそよろしくお願いします。』

対応としては素っ気ないように見えるが…本当ならば最初はこのくらいの距離感が望ましいのだろうか？やはり初めての客に張り切りすぎてしまったのか？これからはどの人に対しても淡泊に行った方が良いのだろうか？いや、そもそも話として相性も含め、相談者にどのように接した方がより相手が力を発揮できるかどうかを重点的に探っていた方が良いだろう。それよりも、予想以上に早く終わってしまった…反応としてはこちらが普通なのだろうか？まだサンプル数が少ない…これから慎重に検討しながら行っていくべきだな。

そんな事を思いつつテキストにスマホに目を向ければ、またウマツターから通知が飛んできていたようだ。どうやら先程の怪しい数字をブロックした後には、知らないアカウントからフォローを頂いていたので、これまた雑にはあるが最新のツイートから順番に覗いていったのだが…どうやら自身と同じように情報収集垢として活用しているようだ。そして俺よりも数段遥か上に存在するようなクオリティの高さで運営をしており、フォロワー数もウマ娘情報垢の中ではそれなりに高い位置に示している事が伺えた。何よりも無駄がない洗練された内容を前に、ただただ感服する他なく、国内問わず海外にも目を通してその徹底ぶりは、まるで諜報員のように隙がない…俺の心が僅かに、そして確実に何処かが欠けてしまったような…そんな圧と悔しさを感じる。上には上が居るといふ事を思い知らされて、何故こんな最低限しか出来ていない俺をフォローしたのかが理解出来ないでいた…何より直感でわかる。

情報通としての格が違うほどの知識力の多さと、圧倒的なまでストイック気質。この異質感は、生物としての次元が違うことを現してい

る証拠そのものだった。

彼か彼女か：まあ99・99%の確率で女性だろうが、その方からありがたいことにチャットに招待された為、何の躊躇も無しに俺は入った：否、入りたかったのだ。まさかこんな人を見落としていたとは：まさに自身の甘さによって生じた不覚であり、俺が未だに未熟者であると痛感してしまう。気を落とさないようにして一呼吸し、心の中では身構えながらもなるべく平常心で踏み入れなければ、俺そのものが喰われられない程の強者だ。

と、早速お返事が来た：早いな。と思いつつ目を向ける。

『先程の暗号は解けたかな？』

背筋が一瞬にして凍った。そして終わった。まさか、この人からだったとは：というか違う、そうじゃない。もしガチガチに作られた暗号だとしたら、普通解けねえよ：という言い訳を考えるほどに混乱してしまう。慌てながらも、まずは謝罪から入らなければ：と、なんとか足りない知恵を振り絞って指を動かした。

『いえ、即ブロックしました。大変申し訳ございません。』

『そこまで大事な事を書いていたわけでもないから大丈夫だよ。こちらとしても特に問題は無いし、こうした方が反応してくれるかなっていうある種のサプライズのつもりだったから気にしないで。』

『正直スパムかな、と思いましたが。いきなり何も無しに送られてきたものですから：まあ、多少は楽しめました。』

『ブロックしたくせに、嘘はよくないなあ：けど、こちらから見れば速すぎて笑ったけどね。同時に私は少しだけ悲しかったよ。』

『いやはや申し訳ありません。それでその、御用があるとか：それとも何か私、やっちゃいました？』

『警戒心高すぎてびっくりだよ。そんな取って食べるってわけでも無いし、私は寧ろあなたと色々お話してみたい、仲良くしたいって思っている立場なんだけどな…？』

『仰られている意味が、今ひとつわからないといえますか…。』

『では、単刀直入にいこつか。次の毎日王冠で誰が1着になるか、私とゲームしない？もし勝てば君にはビッグイベントが待ってるって

『う素敵なプレゼントが付いて来る!!?』

『却下。お互いにメリットがありません。第一私はあなたを疑っていますし、その保証も確証も無いのに…:というかこれ、出走登録もまだまだ先ですし仮にやるとしても、圧倒的に私が不利なだけでは?』

初対面…:だよな?まあ前提としてそもそもネットでは誰にもバレていないが、歴(れつき)とした男なのだ。だからこそ、こんなやり取りをしても無意味な事は俺視点から見れば明らかだ。それ以前に俺の性別が女だったとしても勝てる相手では無い…:そんなことくらいは嫌でもわかる。見るからに厄介な相手に、それこそ男だとバレれば…:どんな結末が待っているのか、なんて事くらい想像できるレベルでの時間の問題でもあるわけで…:何が目的なのかは知らないが、とつとと穏便に済ませるべく素っ気なく対応し、こちらがボロを出す前に退出した方が身のためだろう。こんなところで、変に時間と根気が必要になる戦いを俺は望んでいない。ましてやネットの場では尚のことである。

『ほら、それはそれ、これはこれ。そういう予想って当たると楽しいし、当たらなかつたら悲しい。単純だけど…:そういう楽しみもあるでしょ?それに出走登録が終わってからで構わないし、何なら今から誰が出走するか予想し合わない?きつとお互いに楽しめるんじゃないかなって思うんだけどな?』

『いや、別に…:』

魅力的な提案でやってみたい、とは思いますが…:こども調子が崩れるというか、敢えて崩しているというのも正確な表し方ではない。何となくだが誘い方と崩し方が不気味…:絵に描いたような異質さが滲み出ている。

『ダメですか…:そうですか、じゃあこれ、君にはビッグイベントの身を特別に教えてあげよう!なんと、なんとなんと!見事私に勝てば、トレセン学園の見学にご招待!!?これならどう?』

『いくらなんでも怪しき満点すぎるわっ!!?』

前言撤回。ただのオホ疑惑も付加されているとは、属性がありすぎて予測が難しい。くそっ…:ネットにこういう厄介な輩がいるなんて

よくある事…で、済ませたくはないのだが、この際仕方がない…諦めるのも肝心だ。

『Oh…ウマ娘もびっくりするほどの鋭い斬れ味を持った、まるで残り200mからラストスパートを掛けた、ウマ娘の末脚のようなツツコミですね…私ビツクリ!!?』

そしてここで素を出してくれて嬉しい反面、この際言うけど敬語とかこのテンションとか、慣れない事をするもんじゃないね…正直肩の荷が重くて仕方が無かったから、漸く下ろせたよ。』

『…私の気持ちを返してくれない?あと、そのわざとらしいリアクションで互いに疲れたらそれこそ意味ないじゃん。』

『受けると思ったからやったのさ。お蔭でヘトヘトだけど。』

やはり反応を見ていたのだろうか…?いまいち掴みどころに欠ける性格なのだろうか、どう切り返して反応していけば良いのかわからないでいる。

『なんとなくだけど…ペースを掴むのが上手いというか、慣れてる?』

『そうかな?普通逆を言いそうなんだけど、そう言ってくれる人って周りに居ないから新鮮だよ。ちよっぴり嬉しいかも…で、どっちなの?』

『何を。』

『勝負を受けるのか受けないのか、だよ。』

『丁重にお断りさせていただきます。言い忘れていましたが、晒すのも無しで。』

『そこまでネットマナーを悪くするつもりは無いんだけど…そっか、残念だなあ。』

それはそれとして本題に移ろうか。実はとっくの昔にウマスタのアカウントも特定済みだったんだけど、変わっていないようにホツとしたよ。良かった良かった!今回の出会いをきっかけにガンガン絡みに行くから、早速だけどフォローしとくね!これからよろしくつ

☆

『やあ?』

伏兵の筋肉さんにフォローされました。

@Myo | ambushさんがあなたをフォローしました。

迅速果斷

あの伏兵様にフォローされてからというものの、良くも悪くも振り回されっぱなしである。特に今の日本の競バ界に進出してくるだろう子達のありとあらゆる情報に関するデータの共有化、及び今を駆け抜ける世代達の動向のチェックを俺を通して色々聞いてくれることが多い。といつても、流石はプロ顔負けの彼女だ：俺が気付きもしないような些細な変化ですら見逃すことなく、チェックをしているその姿はまさに指揮官のようで、その腕には惚れ惚れしてしまう。

たったの数日でここまで慣れよつて来る人もそういないにしても、それだけの熱意と能力があるのであれば、俺とコンタクトを通して行う事に何の意味があるのか…、と疑問に感じてしまうのだ。

何故：俺の視点を交えるのか、聞いた時がある。

ネットでの会話故：彼女の顔を見たわけではないが、恐らく不気味に歯を見せるようにニヤケながらも答えていたことを思い出していた。あくまでも想像上ではあるし、顔も知らないが：想像出来てしまうことに少し腹が立って来るのは、現実でもそういう人なのだろう：と勝手に予測した。

『日本の競バに対する盛り上がりは各国と比べて、異様なまでの熱狂ぶり、活気に満ち満ちているって個人的には感じているんだ。それに：レースで走っている子達の安全性も考慮されていたり、設備や金銭面においては他国より群を抜いて待遇が素晴らしいんだけど：ただその分だけ環境面が整いすぎてて：ね？情報通の子達もある種、熱狂的だからまともな子が少ないというか、ちよつと特殊じゃない？』

ああ：としか反応することが出来ない。特に上位勢やトレセン学園に所属している彼女達は、どちらも異様で否定することは困難だ。アグネスデジタルやエアシャカールを筆頭として、サポーターの人達

も狂った存在であることは明白で、それについては間違いはない……。だが、これだけの理由で俺にマーク戦法するか如く、しつこくチェックをしているという根拠が…はつきりいって存在していないのだ。

『あの…それだとその人たちと比べれば、私は平均かそれ以下の存在になると思うのですが…。あなたのようなハイスペックには到底敵いませんし。』

『んー謙遜は美德ってやつ？』

『いえ、事実です。それに私でなくとも私より優れ、私と違い私感で見ることもなく、よりの確に見抜ける人は大勢居ると思いますが？それこそ中央には山ほどいるでしょう。』

そう書いた時の沈黙は、彼女にしては長かったような気がする。いつもの軽薄さから一転、一種のサイコキラーが現れた時のような冷徹感。加えて表すならばその時間だけ、まるで犯人に対して証拠を突きつけられているかのような錯覚を覚えるほどに、今までの言動を振り返ってまるで観察対象か何かの経過を見られているようなそんな感覚を味わったのは何故なのだろうか。

『君と私の根幹は似ていないけど、多少はシンパシーを勝手に感じているんだよ？色々似たもの同士なのかもしれないね。確かに中央にもそうした人達は居る。彼女達は君に比べれば遥かに凄い存在だし、これは変えられようもない事実だ。しかし君はそれを補うつもりなのか、データを集めた上で勝負師のように勘という武器を身につけ、それに頼っている。これが悪癖から生まれたのかどうかは私にはわからない。けどね、そうそう簡単にスタイルを変えていく人なんてそうはいないんだよ。何たって今まで武器として使っていたものを捨てて、常に新しく生成した武器で戦うんだから。』

意外にも返ってきた返答の長さに咄嗟に身構えていた心の緊張をすつとほぐしていく。時々こうして、自分の立ち位置と相手の立ち位置を測ってくるような相手には慣れるはずもない。

『あなたは相当な玄人のはず…それまでに至るまでの間、色々と試行錯誤を繰り返したのではないですか？それと同じで私も、まだその

域に達していないだけってこともあり得ませんか?』

『それはそうだね。ただ全部が全部を捨てるわけじゃない:必要なものは残して、それを尖らせたなり変形させて変化を付ける等々:ある程度工程は残したりするものだ。でも、君はそうじゃない:。憶測として考えられるのは君を悩ませているであろう、外に出られない病気のせいなのか:もしくは何らかのエピソードがあったのか。それが主な原因になっているのか、といったことは私は知らないし触れないけど:その分だけ現地に行けない事が引つかかって、自分から見た情報を正しく信じきれないんだ。その正しいと思える直感を上回るような観察眼を補う術と、予測性を身につける必要がある:そうだね?我が弟子よ。』

『その弟子っていうの、やめてもらえませんか?』

『じゃあワトスン君!』

『引っ叩きますよ。』

こんな感じで軽薄に推し進めてくる裏のある顔とは別に、相手側の能力に屈してしまえばそれこそお終いだ:時折、俺の全てを見抜かれていそうで身震いしてしまいそうになる事がある。

『まっ、私も色々あって長期休暇中ではあるから、こうやって君との会話をのんびり楽しめるんだけどね。』

『暇:な時間を作れるんですか?今こうして話している間にも収集をしているとか、あなたならあり得そうなんですけど:相当情報に対して割いてますよね。その情報量の多さはどこからどう見ても異常だとは思いますが:休息くらいはしてくださいよ。』

『んー:まあ9月に入る前あたりくらいからは、さらに時間が減るだろうから難しくなるだろうけどね。ちゃんと休む時は休むさ。それに:私はここから先、身を引いていく立場でもあるし、何より多忙になる前にやっておくべきことはやっておきたいタチだね。今後の為にもやっておきたいこともあるし、勿論君に目を付けていたのもその一環さ。』

『あなたのやりたい事に私とどのような関係があるのか:聞いたとしてもろくでもなさそうなので聞かなかったことにします。それに

忙しくなるからといって止(や)めるって…あなたほどの人が信じられない。というよりそれこそ勿体ないのでは？って多分対面だと言ってますね。』

『それを言われると何も言い返せないんだらうけど、君ちよつとズルくない？』

『あなたに言われたくはありませんよ。』

そうして様々な話をしていく中で、次第に話はより濃密になっていく。お互いのデータに対する長所、短所を細かく議論していく中で、話のみるみる毎日王冠、天皇賞を通り越してジャパンカップへと進んでいた。まさに月曜から夜更かしである…ああ、今度こそお姉ちゃんを怒らせそうだ。

『情報通でも世界は広い。それでも今のタイミングでジャパンカップに向けて調整している子達に目を向けている人はどれだけいるだろうか、絞ってみると良い。それこそ君は、チェックを最低限で済ます事なく、今まで以上に怠っていないみたいだけど…壊し屋エラズリープライドとグラクソスウィートのレース対戦のデータも入手していたし、次のジャパンカップの時に来るであろう事も予想していた。部屋から出られない身とはいえ、私と同じかそれより少し遅いタイミングではあったけど許容範囲内…鍛えていたとしても十分素質は持っているよ。』

『私が外に出られないのはこの際、変えようも出来ない事なので…それを補う何かが必要って感じですね。ただでさえパドックやらその後のゲートに入るまでが大事でもあるわけで…そこを封じてやっているのどうにも実感が湧きにくいんです。どれだけ収集すれば気が済むのか一切不明なままでしたが、鍛えておいて良かったと心底思っています。こうして話を膨らませる事が出来て、恐悦至極です。』

エラズリープライドに関しては、目を付けなければいけない陣営の一つだと私は考えていますが、恐らく彼女は昨年を境にここには来ないと思いますね。ジャパンカップでは惜しい結果でしたけど…流石は南半球最強を謳うだけあって素晴らしい結果を残してくれました。しかし体制状況や力を無闇に捨てられる程甘くはないでしょう…こ

のまま大人しく引き下がる彼女達なわけありません。何より日本との時差が殆ど差がないと言われている国で、彼女が行っていた対策はこれから先：厄介になっていくものだと思います。これからの一つです。加えて：グラクソスウィートがミンスターシステムやソーシャルシティに対してレコードで勝利してしまいましたし、多分彼女が次の刺客になります。何より気になるのは、3月の時点で少しずつ手を打っているように見えた時点で動きが怪しいところですね。』

『やはり君もそう思う？あそここの陣営の徹底ぶりの異常さを：ロードストロベリーを始めとしてイマイチ結果を残していない彼女らがこれで手を引く：なんて真似はしない筈。時差という狂いよりも、季節が逆転している事が大きいだろうから到着はより早めにして、色々芝の状況や体調管理をしつつ身体の調整を行なっていくって予想はしているんだけど：今の段階では色々と閉鎖的に情報をシャットアウトしているからね。恐らく今月からレースにも出さないと厳しくなるだろうから、そろそろ顔を出してくる頃合いなんじゃないかなって思っているんだけどさ。本当にギリギリの極限状態まで、贅沢に攻めているんだろう：何よりも彼女の素質を測る上で欠かせないのが、グラクソスウィートが過去にエラズリープライドに勝っているって点なんだよ。』

『そうなんですよね。多分、他国の子達の評価が高くなればなるほど埋もれてしまったら：危険すぎる伏兵になりかねないですね。オベイユアマスターの二の舞になってしまうくらいにはやってくれそうな：いや、それ以上の事が起こるかも。』

史実ではワールドレコード：伝説として語り継がれているであろう彼女が、恐らくこの世界での彼女なのだろうか？次のエラズリー競バ場での結果がこちらでも分かれば：判断の仕様が可能ではあるが、果たしてどう来るのだろうか、目を離せないでいる。実に待ち遠しい限りで心が張り裂けてしまいそうだ。

『そう言っている君は1年前：オベイユアマスターのチェックを怠っていなかったじゃない？彼女の成績：はつきりいつて良くなかったし、よく熱心に集めたものだよ。』

『マンノウオーステークスでの相手との差が僅差2着：チエツクしない方がおかしいです。まあ、気が付いたのは入国した知らせが来てからでしたけどね。表にも顔を出さないのはいやはや：骨が折れましました。』

実際この世界線でも勝てるとは思っていなかったのは秘密である。

なんとか病気って事で収めてはいるが：彼女の前で油断する事なかれ、の精神でコメントを返していたあの時、俺はまさしく無敵だった。さぞや俺が男だったら驚くであろう：俺のネカマっぷりは到底崩せるものではない。そんなものは前世という大きな財産が非常に役に立っていた。もし男だとバレたらそれは自己責任でしかない。虎穴に入らずんば：とはよく言ったものである。こうして濃密な会話をしたのは初めてで、ついつい語り合うこの時間が楽しくて仕方がないのも事実だ。

『そこに目をつけるとは、やはりお目が高い。勿体ないなあ：その先入観は鍛える価値があるものだよ。そうだ、手始めにブログに手を伸ばしてみるとかっつてのはどう？』

『ブログですか？それはまた：今時珍しいものですね。』

『意外と安直ってわけでもなくて、色々と利点もあってね？』

『例えばどんな？』

『1つ目、私を含め国内外問わず、世界中のマニアの人達との情報交換が出来る手段の多さ：これは君にとって、とても実りになるものだと思う：仮令（たとえ）失敗してでもね。盛大に砕けてしまっても所詮はネットだ。どうとでもなるし：それに、君も知っているだろうけど、日本にも君より数段上のマニアは居る。：上位勢の中にはちよつと特殊な人達もいるけどね。もし絡むとしたら覚悟はしておくように。まあ恐らく絡む事なんてないだろうから大丈夫だろうけど：ただこれだけは言える。決して君の無駄にはならないことは私が保証するし、始めたばかりの時なんて気楽に書けるよ？ほぼほぼ有名でない限り、見られないってのも良い理由だね。』

2つ目、自分の考え、感覚、集めた情報のどこから何を判断をして

いるのか、そこに至るまでの根拠、相手のコンディションから見えてくるであろうありとあらゆる予測、性格、相手の考え方までを全部限なく記載するんだ。今まで貯めていたその有り余る全てを解放して、余すことなく見せつけた時の相乗効果は計り知れない。

そしてデジタル上の記録つてのは、何らかの事故…例えば地震や火事、水害といった災害が起きてもデータさえ残っていれば安易に復活は出来る。何なら私が後ろ盾になるっていう手段もあるから、有効な手札としてもこれはオススメだぞっ！』

『最後のそれがなければデータを今すぐにも共有していたんですけどね。』

『ま、それは君が私を完全に信頼してからでも遅くはないから、気が向いたらいつでも送ってよ。後で私のデータを送るけど、これは前払いつて事でいいから有効的に使ってね。アプリの成功を祈ってるよ。』

そして3つ目。そのアプリの基準とやらも、やはりネットクになってくるのは君の経験と客観視の問題だ。正直言えば私を含めた選りすぐりの情報勢で、データを補完化してパターンとして組み込み数字を当て嵌めれば…出来なくは無いだろうけど、君の姿勢は私も買いたい。それだと…あくまでも少しの手助けと助言くらいしか、与えることは出来ないけどね。

私が一番感心をして君とコンタクトを取った理由はそこにある。君のウマ娘に対する想いと、その成果に見あうように努めた結果生まれた成長率の高さだよ。『ウマ娘が活躍する場を少しでも伸ばす為に、レースにて活躍出来るかどうかを判断するデビュー戦。そこにきっかけを齎したい。』それを聞いた時、そして実現させる為の代案は実に素晴らしいと感じたよ。後は本当に一歩踏み出すだけ…君に足りていないのは確かな土壌と圧倒的経験の少なさだけだからね。』

さりげなく逃げ道を封じ、得意分野を封じ、自分の得意分野へと持っていくこの強引きは嫌いじゃないが…やられる方は堪(たま)ったものではない。とはいえこれは正しく、柵からぼた餅。力のある同士とも呼ぶべき彼女ではあるがマイナー故に貴重…とはいえ情報通としての仲間を得られ、さらには掲示板にも活かせるだろう目論見も

増えた。互いに利益が大きいのであれば、それを利用する価値は大いにある。

『それとそうだね…1つだけ情報をあげる。情報通の人達と共有化してなかっただろうから言っておくけど、彼女達の中には彼女達なりに研究をしたりする人達は一定数居るものだよ？それはこうしたネット環境においてもね。深淵を覗く時は向こうも覗いてるってよくある言い回しだけど…必要な人材を欲しているのは何も私だけではないのさ。』

あと彼女達はアスリートで繊細だ。誰よりも、そして人一倍、彼女達のファンにも運営側にも選手側にも気を遣わなければならぬ。それだけ情報を発信するという重みがあるんだよ。情報を発信していく上での基本は常に怠らない事…わかった？』

『わかりました、情報2つありがとうございます。いっちょやってみます。』

『目標は私を越えられるくらいってのを目安に、後はひたすら駆け上がっていくだけ…思ったままの事を書いてくれると、私も師匠として嬉しいかな。』

『そこまで言われたら弟子として頑張るしかない…いや、認めませんからね。あと…目標を高く設定したからといってアンタみたいになれるか!!?』

『いつかは師匠って言ってほしいな。最後は一緒に手を繋いでいたもの。』

『善処します。』

『それドラマとかでよくある表現だけど、典型的にやらない人の決まり文句だよな?』

そんなやり取りを数日前まで真剣にしていたのだが…いぎ、ブログを書くようにも出だしからして難しいものだ。有名ではないって点で書きやすい事なのは確かではあるのだが…いかんせん、手が止まってしまう。隙を見せた写真をあげてしまえば、いつ特定されてもおかしくはない…企業側が揉み消すにしても時間の問題になる事は間違

いないだろう。これでもあまり迷惑をかけたくない、とは思ってはいる。しかし：話題もレース一辺倒というのも、これまたどうなのだろうか。この世界に生まれて十数年余り：今の俺に競バ以外で、尚且つそれ以上熱くなっている何かを語れることが、はつきりいって無い。何よりレース関連だとしても、それについて好きに書いてみて：と言われるとこれが中々に難しいものである。

パツと頭に浮かんだのはひとつの代案として、手始めに始めたばかりの頃の資料画像やデータばかりで埋め尽くし、特定出来ないような写真をあげてみるのも手なのだろうか：。意外と単純かつ、それでいて効果的な一面もあるだろうが：物は試しという言葉があるように試行錯誤していくしかないだろう。そうと決まれば、何度も写真を撮っては確認するだけだ。男だとバレないように、全力を注ぐんだ。頑張れ俺：頑張るぞお、おー!!？

つとその前に、そのやる気を引き出して頂いたお方に感謝のメッセージを送らねば：こちらも無作法というものだ。

『伏兵さん朝早くから失礼します。入念に準備をし、ブロガーとして始動したいと思います。』

恐ろしく速い既読：俺でなきや見逃しちゃうね、と表現したくなるくらいに彼女は速かった。あまりにも速かったのだ。唯ぼんやりと打っていたのが馬鹿らしくなる程に、俺の動いた指先に沿って放たれたそれは、何もなかったと呼べないものへと変わっていた。まさしく彼女は、太陽よりも速く駆け抜けたメロスのようだった。

『なんだって!?!?ビツクニュースじゃないか!!?!?これはフルーツ食ってる場合じゃないっ!!?!?』

『ええ… コメントすら五月蠅いって何なんこの人。朝からこのノリか。』

『H A H H A H A! いやあ、てつきりやらないだろうと考えていたものだったから、つい嬉しくなっちゃった。呼び込み君よろしく、大特価セールが行われている八百屋や魚屋のおばさんみたいに声を上げちゃったよ：そっかそっか！私もやる気が出てきた!!?!?んで、いつから始めるの?!?』

『約1週間後の土曜日、8月12日には投稿する予定です。その日に丁度ジェフリーフリアステークスがあるんでその勢いに乗れれば上々：そのレースについての予想だとかを書いたりするわけではありませんが、折角なのであやかろうかなど。新たに作ったウマスタとウマツターのアカウントのリンクも貼って、準備も済ませた状態で望む予定で考えています。』

報告した後、再び一通の通知が走った時…

デイクタストライカさんの新しいツイート通知

『正直柄じゃねえ…まさか俺にこんな日が来るなんてな。』

何かが変わった音を、3人の女神が音色を奏でていた。

詰め寄り

掲示板の手直しとブログの内容との往復作業を、繰り返し画面と睨めっこしながら見直す日々には終わりは無い。

あの後：一旦はお開きとなったあの会話を境に、また1人でいる時間が増えてしまったお蔭か、考えを深める方向へとシフトするとは出来ていた。だが、いくら自分の学んできた事一本で納得の出来るものが出来上がるか：と問われればそんなことはない。勿論：自分のしてきたことに結果が伴えばそれこそ素晴らしいものだと言えるだろう：何より初手は大事だ。下地をするかしないか、その先に至るまでありとあらゆる予測をしてこそ：その精神が、世に出すもの総じての共通点とも言える。

実を言うとあれからも考えに考え抜き、どんなブログで攻めていこうか悩んでいた。例えば『ドキッ!!?あのウマ娘の秘密は：じゅるりら!!?』といったデジタル系オタク路線や、もしくは真面目な路線で『このレース場の攻略法はこれで決まり!!?』なんて胡散臭いタイトルも手札として加えるほどに：意外にも切羽詰まるように苦戦を強いられている。こうなっては元も子も無い：それにブログともなればガチガチにやるよりも、親近感を持たせることを重点的に考えた方が良いのだろうか、なんて足りない頭を捻っては物思いにふけるなんてある種贅沢な悩みなのかもしれない。

ここは単純に一直線駆け抜けるように止まらず好きに、ウマ娘の愛でも語ってみるか?宝箱に大好きを埋め尽くすように、その先にある夢を世界に解き放って伝説をいっぱい作ってやろうか?個人的には常に全力で胸が高鳴る点、モチベーションとしてはベストにはなるだろうが：ここは思考を迷わせない方が無難にはなるだろう。いや、この先にある明日へと繋げるには直向きに書いた方が：まてまて、何もつっぺんを指摘しているわけではない。しかしここで挑戦なくして夢は無し：迷うな、恐れずに後悔を考えるよりも先に勇気を出せ。書

け、御託はいいから書くんだ、まずは書こう…不可能なんて言葉は辞書には無いんだ。冷静になれ…運命を変える約束なんて、輝ける未来を見ようだなんて出来るとは思っていないのは昔も今も変わらないだろうに…アプリのようによく上手くいくとは限らないんだ。アニメでは偶々救いがあっただけだ。

そんな意味の無い自問自答を繰り返して、気が付けば一粒の涙が頬を伝っていた。

ハツと顔を上げれば、暗くなったパソコンの画面に映る絵面が悪い泣き顔がそこにある…なんともいえない間抜け面を目にして、さらに涙が流れてしまいそうで、少しばかり胸を締め付ける。

静寂が満ちた部屋に、心の種から生えた悲しみや挫折が俺の身体を侵食していくように蝕んでいく。圧倒的な孤独を前にささやかな祈りを吐き出せる事もなく、暗くなったのは画面だけではなく部屋全体も暗闇に包まれていた。心の心象風景が溢れたのかと錯覚しそうになるほどに、考えすぎたようである。いつの間にかやら太陽が沈んでいたらしく、窓の方を覗けば三日月が雲から顔を覗かせて、この世界を美しく形取っている。どうやら明日の東京は雨らしいが…風情がある、と言えば良いのだろうか。星の海は生憎見えないので残念ではあったが、優しい月光が等しく静かな世界に降り注いでいる景色に、何処か心が洗われてサッパリした俺はチョロいと実感した瞬間である。

窓を開けて久しぶりに外の空気を味わう…通り抜けた風が肌を刺激し、縛りから解放された様な、そんな感覚だ。心の重みを大空へと放り投げるように、身体を目一杯伸ばす。

この今を新しい今で塗り替えて、宿命の旋律を奏でようではないか。昨日を守って…過去を守って何になるというのだ。

つと、まあ…こうして葛藤していた過去とはおさらばし、奮起出来れば良かったものの、なんとも情けない話…思考が止まる。

なんだろう…月面に降りさせてもらえずに、月の周りをぐるぐると回っていただけで帰還したと例えていた人がいたけれど…笑止。部屋から出れず、外にも行けず…強制的にニートをされていけば誰だつてそうなる。大切に育てる馬でも、ここまで酷い扱いはされないとい

うのに：まあ、馬は走らせないと血の関係上、問題が起きやすくなるとか色々あるが：男にだって心はある、ということ世の中の女性は知ってくれと願うばかりである。望んだのが仮令（たとえ）男であろうと、知ったことではないのだ。

未来は一言で言えば退屈だと言っていた人がいるが、これもそうなのだろうか？それとも俺がただの卑しい人間だけなのだろうか？

さて、笑えない冗談は隅に置いておくとして、精神的に非常に不味い展開に目を瞑ってもいられなくなっている。この一步を踏み出せば：俺にとっては大きな躍進となるだろう。それをわかっているがこの一步が：壁に囲まれて抜け出せないくらいに分厚く、そして重く閉ざされているのだ。

これ以上は無駄だろう：今日はもうやめだ。

こういう時は潔く諦めた方がいいと、そう思った時程腹が減るものだ。時間帯にしている時間なこともあってか、リビングへと戻り調理器具一式を見て俺は悟った：やはり、洗い物は少なくしたいと。

そうと決まれば、と冷蔵庫にある食材を見て思わずニヤケてしまうではないか。ふっふっふっ：一人暮らしといえば、手間がかかるものは避けたい思考を誰もが持つであろうという自論は健在のようだ。それはこの世界に来てからでも変わりはない：ならば、今夜は贅沢に一人鍋といこうではないか。

カタツとガスコンロに水を入れた鍋を置き、そこに昆布を入れてからの30分：まずは火を入れずに放置プレイをするのが安定だ。良バ場になるまでの時間を如何に活用出来るかが、勝負の分け目である。さあ、パドックはどうだろうか。

ご飯をぎっくり洗って炊飯器に勢いよく入れるついでに、サラツと横目で見ていく。賞味期限の近い鶏肉と豆腐、見た目が良すぎる白菜、おひたし用のただの茹でただけのなんの変哲もない余物のほうれん草、お姉ちゃん特製下処理済みの椎茸、予めカットしたツパーに保存していた大根他、買ってもらったネギやにんじんなどを、ある程度鍋に入れやすいように加工している内に大体30分くらい経つわけだ。その間スマホから流れる過去の競バ映像は、見逃してはならない

：手元が狂わない程度に聞く意識は欠かせない。

煮立てた鍋から昆布を取り出し、1人分の具材を慣れた手つきで入れていく。もう慣れてしまったからこそ出来る芸当…：余りすら出さないこの手際っぷりは、まさに神威を見よ状態。そこにどうせ1人、という雑な意識を掻き消してくる魅惑のささやきは、まさに通い妻と言わんばかりだ。心の意識外から何かがあつ込んできた…：これは、ご飯が炊けた音。ゴハンガタケタオトであります。親の声より聞いた電子音が、雑念を掻き消してくれるこの瞬間、ホカホカの煙がパカつという音にドキドキが止まらない。俺の心がずぎゅんどぎゅん、君から醸し出されるアミラーゼから加水分解したグルコースとの結合を求めるとゴングの鐘が鳴り響いた即ち、腹が減ったと理解する。生まれこの方10数年経つが…：気軽に会える人が居ない中、お前だけが友達だと言わんばかりに絡みついてくるソノリテイは、まさに格別極まらない。そして私もいるよ、と主張してくるプリンセスである鍋君…いや姫君。君はいつもそうだ、そうやって俺の身体を内側から熱くさせてくれる。今日は君たちと共に祝福をあげよう。今俺は、開戦の火蓋を上げるのだ。ファンファーレの余韻はもう消えて、各食材が一切にスタート…：好調なスタートダッシュを決めている。流石選ばれた食材達、優秀であること間違い無し。

こんな暑い時だからこそ、熱いものがないんですよ…と記憶が蘇ってくる。この世界だご主人ではなく、御令室になるのだろうか。それともお嬢様か…：なんてことはさておき、食材は食われるというのに実に協力的だ。出身も中身も違うというのに、何故君たちはオーケストラのように綺麗な味を奏でてくれるのだろうか。さつき知り合ったばかりだというのに、直様即興してくれるとはなんたるサービス精神…：ブラック企業も真つ青な脳内汁プシャーっと溢れる快樂に、冗談では済まされなくらいに汗が噴き出し、店主も堪らず苦笑い。

ぷりっぷりに火が中まで通った鶏肉が先頭を飾るか、2番手には良い出汁を作った椎茸が折り合いを付けている。3番手今日は厳しそうだ、豆腐はこの位置。やはり賞味期限がやはり大きいか、その隙を突くようにネギが4番手から前を狙っている！さあさあご注目の5

番手の人参、ちよつと硬めか少し煮込んだほうが良さそうな様子。6番手、6番手にご注目ください、定番の白菜が夏場にも関わらず前をジリジリと狙っているぞ、しめしめと言わんばかりであります。他の野菜を後続へと引き離していく…つとここで胃を引き締めた。鍋が再度グツグツと煮込まれている…なんと、ここで卵だ。まさかの卵が出遅れたにも関わらず驚異的な末脚だ。ご飯と共にジリジリと前の塊3番手、2番手、先頭へと抜けていく。第4コーナーを過ぎたが、これはとんでもない波乱の展開へと変わっていった、世界のご家庭よ…これが近代日本料理界の結晶だ！まさに革命、今日は雑炊記念日にも如何だろうか。

ブログの悩み？そんなものはもうどうでも良い。最早、彼に言葉はいらなかった…全ての不安を忘れて俺を突き動かしたのは只々食べたい、というだけの欲だけだった。

その時、ふと閃いた！このアイディアは、ブログで使え…使え…使えるのだろうか。急に落ち着くな…というコラが貼られそうなくらい、一気に気持ち冷めてくる。何をやっているんだろうか俺は…この世界に来て、ただ食って寝て自己満足に夢を見るただの痛い人間が、よりにもよって夢を叶える手助けをするなどと…よくもまあこんな愚行に酔いしれるのだろう。いつか取り返しのつかないことが起きても不思議では無いが、起こさない自信だけが取り柄でここまでやってきた俺の理性には惚れ惚れする。

静かに競バ関連の動画だけが流れるリビングと、隣接するキッチンから聞こえる食器のカチャカチャとなる音だけが、この部屋全体を支配している。これが終わった時、またあの悩める子羊状態になるのかと思うと嫌気がして、面倒な事になりかねないのは何としても阻止したいところだ。

そんな切羽詰まった状況下で、資料部屋のパソコンから通知音が聞こえたのは気のせいでも何でもなく、唐突に訪れたこの幸運は見逃すわけにはいかない。ありがとう、三女神様よ…神はどうやらこの哀れなる子羊こと俺を、完全には見捨ててはいなかったようだ。

この世界でもどうやら余裕は与えてくれないが、今だからこそ賢者

モードへと成り果てた身体に再度鞭を打ち、食器を洗って片した後、部屋へと戻り内容を確認する。掲示板のルームを見ると、今回はどうやら2人目のようだ。

『あなたのアドバイスを参考に、先輩に掛け合ってみたら時間を作ってくれるそうです。機会を作っていたいただきありがとうございます。』

前々から薄々感じていたこのやるせなさ：やはり断片的な言動から全てを読み取ろうなんて、俺には愚行だったのだと思いきらされる。不測の事態を考慮した上で、彼女から与えられた手札を整理してみれば一目瞭然か：仕方ない。展開の組み立ては事前に決めていた方が良いのか？

ならば、イメージを特定しろ：絞り出せ。その先の展開を予測しろ。限られた情報の中から、人物像を察知して手掛かりを探すしかない。

ありきたりな戦法は向いていない。そしてその脚を大事にしないことや勿体ない発言、という点から見れば恐らく本来の武器が未脚だと絞れる。担当ではないトレーナーが観察した上で発言していることから、それなりに重賞を取れる位置にいると見ていいかもしれない。中央に入学をしている時点でそもそも論ではあるが：この子はどの程度なんだ？

負け続いても強靱な精神力：諦めの悪さ、何より失敗はしたが自らの手で脱却しようとした頭の回転力を考慮した上で、突発的な無謀とも取れる行動をしてしまう気性の悪さは捨てられない。薄々思うところはあるんだろうが、本人が納得しなければ意味が無いことはトレーナーも強者も周知の沙汰だ：周りがどれだけ協力してくれるのかで、将来性が高くも低くもなる予感がする：ここは丁寧に掘り下げて知っていく必要がある。例の先輩がどの程度の力を持っているのか、踏み込んでいかなければならないということか：面倒だがここを重点的に攻めてみる価値はありそうだ。

多少の無茶をしても未だ身体を壊していないと予測して、耐久面もそれなりにあるからこそ行えたのが不明だ。1人目の子に比べれ

ば丈夫なのか？それとも我慢強いだけか？より洗練されれば相当大物になるのかも…これは研ぎ澄まして見たいほど純粹な刃物のようなキレは一体どの程度なのだろうか？こちらは見えてこないか…残念。

しかしながら、自分自身でも無茶な事をやっていたという自覚はあつて尚、再びここに来たという事は…それなりにストレスを発散したと見て考えて良いだろう。それなりに置かれている状況を判断する能力も、ある事が伺える。あくまでもないとは思いたい、ここで嘘やハツタリを書いても意味が無いことは知っていると信じたい…いや、そもそもそんな子は居ないから可能性はほぼゼロに近いな…この部分を警戒する必要はない。

これだけの手札で戦え、と。然うは問屋が卸さないつてか…心が躍るな。こちらも羽化を始めた者を目の前にして、置いてけぼりをここでも食らうわけにはいかない…彼女達に負けてたまるか。

単純故に厄介な獲物となると…やはり速やかに調理をしなければ、俺が喰われかねないだろう。とくれば…また多少の乱暴はやむを得ないか。ここに来る連中らは、もう少し手心というものを覚えてもらいたい。俺の相手ってこんなんばかりかよ…だが、理不尽にはこの世界に来た瞬間から、もう慣れつこだ。

挑む相手としては十分…さあ、心してかかろうか。

ギアシフト

短文かつわかりやすい子でなんとも刺々しい印象を受ける…だが、冷静に1人目の子との違いを見るに、最初が特殊なだけで普通に考えてこちらが当たり前の反応なのだろう…しかし、2度も同じような主張の薄い反応を持つてこられると、いささか不便なものである。やはり、こうしたやり取りでは我儘になって貰いたい…でないとな俺が苦勞してしまう。得意では無いが…こちらから攻めてみるしかない。

『それは良かった…つかぬことをお聞きしますが、その先輩があなたにとって頼もしい存在である保証はありますか?』

『何故そんなことを聞いて来るんです?』

『此方としても気になるので…それに実績があるならあるで、私としても気が楽になります。他にも走法や性格、あとは体格などが似ているのであれば、悩みを私以外でもぶち撒ける手段の多さや密度といった広さは多く深くなりますし。』

『遠回しに厄介払いをしているようにしか聞こえません。それを聞いてあなたに対して、何かメリツトがあるとも思えません。』

『誤解を生み出して申し訳ない…ただ、私は用心深い性格といいですか、心配性なだけです。実際、あなたに対してあなたから発せられた限られた情報のみで判断しなければならぬので。非力ではあつても、私はこの管理人です。あなたのお役に立ちたい、という想いは嘘ではありません…何より、このルームでは私とあなたの2人つきりですし、ここでいくらぶち撒けようと何もありません。』

その言葉を書いた時から、予感がした。これは…難儀な相手だ。素の性格でこれならば、過去に拗らせる原因があつたのか…?

『いや、流石にネットマナーを悪くするまで溜め込んでいるとか、そこまで病んでいませんから。今のは私が狡い言い方を書いてしまったので申し訳ございませんでした。ここ数日は走ることにについて考えない時間を作った事で、緊張が解けたのは本当です。』

寧ろ考えすぎが良くないのだろう。これはブログも同様なのだろうか？ シンプルに写真とブログを始めました、とだけ書いてそこから始めていけば良いだけだ。それくらいで最初は良いんだ。変に頭でっかちだった考えから解放させてくれたこの子には感謝しきれない：つてなると、それ相応の借りは返さなきゃいけないのが、これまた難儀な性格と自負する俺を恨みたくなる。せめて爪痕くらいは残したい。

他人同士のやり取りに割り込むような真似もどうかと思っているものの、このムズムズ感をぐつと堪え冷静に取り掛かる。まずは初期段階として、相手との距離感を掴みやすくしなければ始まらない。

『私にとつては吉報なので嬉しい限りです。あとそうですね…もし、無理をしてなければいいんですけど、すみませんが最近のレースでどのように走っていたか手短かに教えていただけることつて可能でしょうか？ 脚質だけでも構いません。』

『脚質は先行です。』

『その先輩はどういった走りを武器にしていますか？ あとあなたから見た印象でいいので、適正距離もお願いします。』

『確か差して短距離以外は何でもイケるって感じですよ。』

『それはレース場関係なく…でしょうか？』

『はい、芝だけです。』

『先輩はGⅢ以上の重賞を取っていますか？』

『はい。』

は？ 何だそりや化け物か？ 重賞取つてて、殆どの距離他含め適性ありな先輩とか…：…は？ まじで誰だよ。

状況として考えられるのは最悪だとキメラになるんだぞ？ わかっているのかこの少女は？？ これではこの世界が何でもありじゃ無いか…しかも、脚質から見てクラフトユニヴァみたいなキメラとか可能性として考えられることも踏まえたなら…ぎげんな、特定もクソもないじゃないか。まあいい…恐らく体格差か、それを補うほどのレースを走り切るまでのスタミナが無いか等のパターンと見てまず間違いは無いだろうが…そつちが気になって仕方がない。

『まあそれなら私も安心出来ますが…自分自身でも後方から攻め入った方が走りやすいとか、こういうったところで楽だな…と感ずるところはありますか？』

『トレセン学園に来るまでは、私自身後方からでも何とかなっていました…ただ、中央ともなるとレベルが違うというか、前に全然出られないまま試合が終わったりして…全員を抜いてゴールには辿り着けないことが多くなってきたので、それで先行にしました。』

『因みにああは言いましたが、あの後レースを見返したりしました？』

『やることもなかったので、一応…冷静になれた分、上がりハロン等の記録を見直したりする余裕も生まれました。色々と検証していった結果、確かに脚質適性は後方から攻め入った方が楽ではあるな…とは思えるようにはなりました。ただ、今の能力のままでもしかも中央で…となると、正直不安は拭えません。』

『それは無理もないです。なんたって中央ですからね。』
『そうですね。』

『でも、現役で活躍しているタマモクロスさんは、後方からでも…いえ、最後方からでも一着を狙える人です。まあ、あんな風に…というのは少しばかりキツめだとは思いますが、手本はいくらでもあります。体格差や性格に難があっても、脚に爆弾を抱えていようと…勝つ人は勝ちます。中央にいる時点でその力はあるはずです。何より、担当トレーナーでないにも拘（かかわ）らずあなたの長所を的確に見抜いたかもしれないその人も、ひよつとしたら期待しているのではないかな…と思いますよ。』

『そうだといいいのですが…私も担当が付くなら、ちゃんとあたしのことを見てくれる人が良いので。』

『私も担当する機会等はないと思いますが…応援しています。気持ち的に落ち着いていて、自分自身を見つめ直し無茶な練習をしないのであれば…トレーニングを再開しても大丈夫でしょう。もし何らかの部分で自身に欠点があるならば、それを補うように体調、理性、思考は乱してはいけません。あなたのその欠点は今すぐにどうにかな

るものでもないでしょうが…その分身体のメンテナンス然り、他の武器をより丁寧に研ぎ万全の状態でレースに挑んでください。そして、この大きなチャンスをものにしてください。』

『…ありがとうございました。』

『吉報…待っていますから。直接は見れませんが、ちゃんと私も見ているので。』

『はい。』

ルームメイトが数ヶ月いないというのは気楽で良い。特にあの人だと…どうしても強くあたってしまう。それでも無理にこちら側まで気を使うような人では無い。寧ろ鋼メンタルの持ち主だからこそ、ここ最近のあたり具合は冷静に見ても明らかに酷かった。それだけ彼女に甘えていたのだろう…振り返りたくは無いが、見るからに拗らせた頑固者だったと言える。意地を張る姿勢だけはきっかり一人前で、周りも自分も何一つ見えていなかった。

だから…出来るだけあの人の邪魔はしたくは無い。

『それでこの前、俺に電話をかけてきたってわけか。一応俺もレースがあるんだけどよ…トレーニング終わりとはいえ、いきなり「付き合ってくれない？」とか言うから一瞬ビビったけどな。』

そう言う割にどことなく口調が和やかだ。この人の場合、敬遠されるような人では無いもの…近寄り難い雰囲気は常にドバドバと溢れて出ているものだから、慣れていない人にとっては身震いが止まらないのかもしれない。インタビュアーとか実際にそうだったし…悪い人では無いし、寧ろ良い人なだけだ。

あたしも似たような部分があるが、彼女のように強くないし強くなれるとも思っていない。その貧弱で貧相な身体付き…細い手足で、他のでかい奴らに負ける度、勝てるわけないと散々言われて、それをねじ伏せたくてここまで来たのに…現実はどこまでいっても平等で不平等だ。

こここのところは何処か胸の蟠りが消えて、妙にスッキリはしているけど…多分また爆発する。それが嫌で仕方が無かった。そんな情け

ないあたしが嫌いになった。見下してきたのは他でもない：あたしがあたしを信じきれなかった罰なんだと、そう思つて：言いたいことを自分に言い聞かせて、喉の奥どころか腑に溜め込んだものは、いつからか悔しさから諦めと憎悪に変わっていった。

だから：もう遅いかもしれないけど、ちゃんとケジメを着けに行こう。あたしに出来ることをして、それでも無理なら清々しく碎け散ろう。

「本当に：すみません、デイクタさん。」

『いいっていいって。ぶつちやけお前なら、俺にとつても良い練習相手になるからな。』

あー：言いたくはねえけど、あんましこう：頼りになる先輩とかそういうった面じゃないだろ？特に俺のこの外見と気性の悪さだと、近寄つて来るような肝っ玉も居ねえしよ。そういうった意味では感謝しているんだぜ？ちゃんとした先輩面が出来るなんて貴重だからな。それに関して言えば、こつちとしても意外っちゃ意外だったけどよ。』
『意外って何が？』というか練習相手って：あたしに務まるとか思つてんの？』

『いつも通りに戻ったとはいえ、相変わらず視野が狭いのな。気付いてねえつてのがこれまた贅沢だわ：タチが悪いつたらありやしねえが、そこはいいや。そのトレーナーと掲示板やらのお蔭でこうしてきっかけが作れたんなら、あとはトントン拍子だろ。はつきりいってイージー案件だ、困りやしねえよ。』

んで：頼りにするんだつたらつて話に戻すが、まずは俺じゃなくて同室のクリークだろ。今はこつちに来ているとはいえ、あいつのことだ：喜びながらすぐ飛びつくと思うぜ？アルダンから内密には聞いていたが、そこまで悩んでいるんなら尚更だ。余計って言葉が付く程にな。適任としてはこれ以上無いって感じだろ普通に考えて。』

『それは：その、ええと。』

『まあ、あいつと違つて俺はドリームリーグに行ける権利を持っているし：そういうった意味では、あいつの邪魔をしたくは無いつて気持ちもわかるっちゃわかる。迷惑をかけた分：顔も上げられないとか

色々思うところがあっててんやわんやなままって感じだろ?』

『…うん。』

『アルダンとライアン…それとアイネス。加えてチケツトにハヤヒデ、スズカに…ブルボン、ファルコ…んで、クリークね。今すぐにとは言わないが、伝えたいことは伝えとけ。素直になれないってのはお前にとって致命的な欠点もとい苦手な部分なんだろうけど、ちつとは感謝くらいしとけよ?良好な関係を築けるなんて早々無いし、滅多に現れないってのも言うまでもなく…お前が一番よく身に染みて知っているだろ?』

『うん…わかってる。』

『ん…なら、俺もこっちで集中出来るわ。帰ったらちゃんと付き合うから、それまでに色々なことを済ませとけよ?後笑顔でな、笑顔。笑顔を忘れずにこうニコツと。試しに俺に向けてみるとかな!なんなら今すぐにでも良いんだぜ?この頼りになるデイクタさんに満面の笑みを浮かべてくれると、俺も絶対調間違い無しなんだがな!』

『…ッ!…っさい!バカ!ああもう!ホントバカ!帰ってきたら真っ先に蹴っ飛ばす!』

『おく怖っ。ボキヤブラリー少ないところとか相変わらずだけど…んで、どうする。俺的にいえばお前は差してより追込って感じがするから、他にも声かけて欲しいなら事前に言っておくが?』

『…悪いんだけどお願い出来る?』

『あれ、デイクタさん誰と電話しているんですかあ〜?』

『ほんまや、珍しいなあ。誰なん?』

『はあ…つたく、あいつらこういう時は空気読まないのかよ。これ以上グダるとさらにややこしくなりそうだけど、今変わるか?』

確かに今クリークさんに変われれば…今ならば言えるだろう。でも…今言ったところでこの夏を乗り越えられるかは、正直あたしにはわからない。この言葉は彼女が帰ってきてからでないという意味が無い。

「良い…直接伝えるから。」

『そっか、俺もそっちの方が良いと思うぜ?まあ念の為に軽めには伝えとくけど…そろそろ切るぞ。』

「うん。本当…夜遅くにごめん、ありがとう。あと、その…暑いから気を付けてよ。」

『気にすんなって。んじゃ…おやすみ、タイシン。』

『うん…おやすみ。』

スマホを持つていた手が軽くなる。誰かと気兼ねなく話せるというのは、存外良いのかもしれない。いつも孤独を貫いて拒絶して、最適解すら導けず何が走りで黙らすんだって意気込みは、雲一つ抜けたように肩の力が抜けている。変化に対応しなければ、進化していかなければ…ここから先は残れない。あとはあたし次第…しくじりは許されない。けど、心は晴れている。
手にするものは勝利以外何も無し。

以前よりは余裕がある…気持ちも呼吸も楽になった。それは俺も彼女達も同じだろう…そうであって欲しいと切に願うばかりである。それはたった数日後…彼女達の安寧と引き換えに、もの見事に粉碎されることをまだ誰も知らない。

弧線のプロフェツサー

待ちに待った俺の初デビュー戦とも言っているいい日、そして俺の人生においてターニングポイントとなったであろう8月12日。その日はやけに憎いほど、どこまでも澄み渡った青い空が続いていたのをよく覚えていいる。

忌々しき事態、という言葉が世の中にあるのをご存知だろうか？そのまま放置しておく、いつの間にか問題が起きていても見過ごすことができない程に膨れ上がっている…まあそんな感じの意味らしい。事の始まりはなんてことはなかった。

「はあ…はあ…とうとうこの日が来た。」

緊張によって手が震える。俺にとつて、今まで自分がやって来た行いに嘘を吐（つ）くなんて事は出来ない証が、目の前に広げられている。努力は人の目にはみえないが、紙一重の薄さも積み重なれば本になる…なんて言葉を残した人が居るけれど、ここまですぐとポートフォリオには困らなかつたものの、最早紙の無駄なのではないかと思う程だ。

壁に張り巡らされたウマ娘の情報、机に置かれた資料の山、びつしりと埋め尽くされたノートが、ある種要塞のように築き上げられている。紙に書かれた文字と文字が重なり合って結界のようにも見えて、少し悍ましいと感じてしまうかもしれない。どこか既視感のある光景に驚きを隠せない人も居そうだけど、わかる人は居るのだろうか。この世界でも彼女は踊っていたのだろうか…なんて思いながらumatoの画面に目を向ける。

見た人があつと仰天するような、驚愕するような狙いを敢えて出すようにして、写真を一枚、また一枚と撮ってその中から選び抜いた画像を添付しよう。加えてプライバシーがバレないように、特定材料となるものを極力減らしながら、装飾のバランスにも気を配る必要性があるな…と考えながらやるものだから、これがまた中々に難しい。収益

化等の申請などを求めている分、作業が短縮されると思っていたのだが、正直甘く見ていた部分でもあった。ともあれ、始められるのであれば何だって良い。

【障害等級2級持ち、引き籠もりニートでウマ娘オタクとかいう属性モリモリな私がただただ呟いていくだけのブログ】

タマモクロスやオグリキャップ含め、時代の立役者となるウマ娘が次々に登場して来た昨今。

競バファンを始め、多くの人が生で観戦し、その熱い想いを声に出して応援している：そんな機会が増えてきたかと思う。

私はこの事に関して大変に素晴らしいと感じているが、果たしてそれだけがレースとしての楽しみなのだろうか。

一競バファンとして追っかけの種類を変えてみるだけで、より違った楽しみ方が増えるかもしれない、と感じる私は何なのだろうか。

そんな変に収集癖が付いてしまった憐れな人が、蓄積したデータを元に分析し、勝手にレース展開を予想したり振り返りを行っていくだけの場所。

楽しみ方は人それぞれバリエーションがあって、その数が多ければ多いほど一筋縄ではないかもしれないけれど、私の楽しみ方はこんな感じ↓添付

こんな私でも夢中になれるものは存在したみたいだ。

うん：こんな感じでシンプルに始めるのが良いだろう。自己顕示欲と優越感たっぷりマシマシの怪物が、いよいよ世に解き放たれるというのだから恐ろしい。

さて：ウマッターとウマスタのリンクも付けて、準備万端といったところで師匠と勝手に名乗って来る人物に、再度やりとりを行う。

『一先ず完了しました。』

『いよいよこちら側の世界に本格的に参入だね：どう、ワクワクする？』

『そうですね、ちよつと楽しみです。』

鼓動がドクン…ドクン…と波打つように刻まれている。体温が1度くらい上がったんじゃないかと思えるほどに、興奮が鳴り止まない。

『にしても…タイトル大丈夫?』

『まあ…事実なので仕方がないです。』

前半部分の少しの嘘はさておき、時間となった…初めてのツイートだ。

『ま、そんな伸びるわけでもないってのがわかっているのであればですけど、投稿する時に訪れるこのハラハラ感…：どうにも慣れませぬね。』

『私とのやり取りの時には味わえなかったのにね。』

『あれはどっちかっていうと緊張より恐怖でしたから。』

それから暫くして、伏兵さんはいつも通りの日常へと戻っていったように、返答がパタリと途絶えたので俺も俺のやるべきことをしようと思う。

因みにその時はフォロワー数も10人を超えたあたり…序盤にしては好調、現実はそのようなものである。

朝っぱらからではあったが、アプリの見直しに力を注ぎ入れるために、通知ボタンを全てオフにしてパソコンの前へと向かった。その日の作業はそれなりに成果も得られそうな予感がしていたので、ちよつとだけやる気が出ていた。

それから大分時間が過ぎて大体20時を過ぎた頃、目も肩も色々と疲れてきたこともあってか作業を中断したあたりで、どうしても足りない要素が多いということが判明していた。様々なデータを1つに凝縮させ、集計させる他になるべく筋肉や骨の構造が近かったりするには…やはり俺や伏兵さんのデータを使っても足りない。いや、伏兵さんのデータの情報の密度と完成度の高さに、俺が足を引つ張る形だったのがなんとも情けないオチである。

凝り固まった身体を解き…再びスマホの電源を入れ、ウマッターを開く。

始めたばかりということもあって、フォロワーがあと10人くらい

増えていれば上々だと考えていた。その中から…もしくは伏兵さんに正直に足りないものが多かったと素直に認め、人数を補うかもしくは委託しようか頼もうとした時だ。

通知音がピロン、またピロンと止まらない事に疑問が浮かぶ。少しばかりその音を拒んだ心に不安がありつつも、自身のプロフィール欄を覗くとそこには目を疑う光景を映し出していた。やがて目は点になったようなアホ面へと変わっていく…そしてその不安の元凶を目に焼きつけた。

フォロー数1 フォロワー数59667

はて…桁が間違えているのだろうか？何かの故障かと思い、再度確認してみても数字に変わりはない。むしろ増え続けている一方だ。一体何が起きたというのか…何がどうなっている？

アプリを使い、フォロワーの一覧を序盤まで遡って見てみると、同じようなお仲間の人達で溢れている。…それに間違いはない。

そんな中でぎっくりながらもスライドをしていくと、目を疑うような人物からフォローを受けていた。

Obey your masterさんからフォローされています。

頬をつねってみても痛みがすることから、夢では無かった。偽物かと思っただが紛れもなく本人だった為、確かにこれには驚いた。非常に嬉しい気持ちで一杯ではあったのだが…だからといってここまで影響力を与えるかと言われれば、正直どうなのだろうか。確かに凄いウマ娘ではあるし、彼女の元ネタ含めリスペクトをしている身でもある。これだけでは判断が出来ないでいるので、フォローを返した後、一旦保留してスライドを行なっていく。

しかし1000人目までぎっくりと目を通して見たものの、はつきりいってそれらしいものが…ここまで伸びるような物的証拠が見つ

からない。

『で、何かやらかしたんですか?』

『酷いな君は…まあ疑うのは無理もないけど。そのフォローの内
2000人くらいは私の影響かもしれない。ただ、それ以外の事につ
いては私のせいでは無いと言えるけど。』

『…続けて?』

『いや実はさ、「珍しく親しみを込めて接しているようですが、最近
熱心にやり取りをしている人物って何者なのでしょう?アタタの
テンションについていけるってだけで只者ではなさそうなんですけ
ど。」って聞いてきた後輩が居てね?普通に「私の弟子だよ!」ってに
こやかに答えたら…情報通の中で広まっちゃった。理由は単純に私
のテンションやトークについて来れるのが貴重だから、是が非でも抑
止力になって欲しい…だって。ホント好き勝手言ってくれるよね!
ねっ弟子!』

『どうしよう、今すぐにもぶん殴りたい!』

道理で…まさか、探りを入れられていた?いや、よくよく整理して
みればこれだけの人だ…伏兵さんの周りには優秀な人達が多いと思
う。それよりも今は別の問題だ。

…残りの約58000人はどういう理屈でこの垢をフォローして
いるんだ?

『一応こつちでも話題になっていたから探してきた。原因は多分こ
れなんじゃ無いかと思うんだけど。』

流石伏兵さん、仕事が早い。早速リンクを押してどれどれ…?と確
認してみる。するとそこには…

『伏兵の筋肉の弟子、男説唱えます』

『例の弟子、特定しますた』

『突如現れたウマ娘オタクが男wwwwww』

『男を祀ったら目の前に現れないかな?』

『普通に考えてなんだけどき、男がウマ娘に熱狂的になるとかあり得るの?』

『滅亡していたUMAが復活とか倫理感壊れるんだが?』

『夢見すぎなおまいらことドクシンヒトカスを見ていくスレ』

『師匠×弟子の恋愛ものってあったっけ?』

『ウマ娘×男はぶつちやけありか、なしか』

『地方担当トレーナー、ライセンス取得を目論む者が続出。』

『人間の女性達終了のお知らせ、完全に地球はウマ娘の支配下へと変わった』

『普通の人間がウマ娘に勝てるわけなのに、男が愛を一方的にぶん投げるなんてあるわけないだろ…現実を見ようかスレ』

『今から日本に向けて移住を考えているんだけど良い案ある?』

『地方所属のウマ娘、ほぼ全員の目が明らかにキマツててヤバいんだけど』

『そもそも伏兵の筋肉って何者?』

『伏兵の弟子だけど質問ある?』

『男でトレセン学園に就職出来たとして、その結末は?』

『今から本気で中央目指すけど間に合う?』

『トレセン学園で働いているけど、男なんて1人もいないからな? 夢なんて無いからな?』

『ブログ記事をたった一つ書いただけで盛り上がる、例のあの弟子について』

『来年度、もし男が地方でも中央でもトレセン学園に入るものなら…府中ってどうなるん?府中事変勃発?』

『この画像に載っているデータ…普通に研修室とかに届けて欲しい』

『すみませんお弟子様…URAの者なんですけど、ブログを上げるよりも中央に就職しに来てくれませんか?と声をかけたんだけど、障害等級2級とかいう壁があまりにも大き過ぎて胃が痛い』

『ぶつちやけ今のトレセンってどう?トレーナーが少なくて地獄っ

てよく聞くけど』

『ワイ警備員会社勤務広報担当、休日なのに電話が鳴り止まずトラウマになった責任取れ』

『防衛省が注意喚起するとかよっぽどだぞ、おまいら早く布団に戻るんだ』

．．．．．

．．．．．

．．．．

．．

．

『何…これは。』

『人の噂も七十五日って言葉があるけど、これは収まりがつくのかな？』

『いや、どうしてこうなったし。トレンドも何が何だか…。』

まさか特定された？

いや待て…よく思い出すんだ。確かに俺は今日、手を抜く様な真似は一切していない。対策は万全の状態だった…落ちていた髪の毛は映らないよう全てテープまで使って掃除をし、電気や窓の位置含め間取りがバレないように配慮し、パソコンやカメラのレンズに顔が映らない様、隈なく確認もした…そうした情報は絶対に、徹底的に出さないようにしていた筈だ。どうなっているのか…何故そうなったのか…一切わからないまま、こいつも盛り上がっているその理由が聞きたい。

『なんでも障害等級2級持ちって部分と、何故か個人情報に気になっている様な写真ばかり載せていて、特定難易度が高すぎるからこれめちゃくちゃ怪しくね？ってネットの人たちが騒いだのを皮切りに始まったみたいだね。』

『ひよつとしてつまり。』

『期待半分面白半分つてところから止まらなくなつたつて感じだろ
うね。で、中央にも噂が入つて…今に至るのかな?』

弟子の件はまだ良い…はつきり言つて棚ぼただ。ただ予想の範疇
など何にもしていなかつた女性達に、ここまで追われる立場になると
は想定外だつた。しかも対策をし過ぎたせいで、特定厨が動く始末…
こればかりは勘弁してもらいたい。興味のない人達から迫られても
嬉しいわけでもなく、ただ周りを困らせているだけとは…聞いて呆れ
る。元凶の俺が言うなつて話なのだが。

『弟子の件は全く気にしてないので良いです。それよりも…こん
な始まりの日に謝罪文を書かないといけないのか。』

『こればかりは本当申し訳ない…。正直放つといても良いとは思
うけどね。ただ彼女らが勝手に盛り上がったただだから。私個人と
しても、大半の人も、君が男つて可能性は無いと見ているからかもだ
けど。』

『それは常識的に考えて…ですよね?』

『そうだね。比率的に見たらね?そりゃ男の子つて引き籠もり10
0%だから障害等級2級以上を持つていてるつてことを考えると、そう
した女性の人達とは明らかに数的には多いよ。』

でもさ…人間つてウマ娘には絶対に勝てないし、女の人より人権な
んで無いも同然な扱いを、私が生まれるよりも遙か昔から受けていた
から、ウマ娘なんて嫌悪の対象も同然だよ。いくら顔が良くてもダメ
だつて言う男性も居るし。

ウマ娘に熱心になれる男なんて、この世界にいるわけないでしょ。
居たとしたらDMを通り越してバカだよ。ましてや君みたいなの…
私と同じくらいウマ娘オタクが、男の子なわけナイナイ。大抵はそ
う言つた噂に踊らされて様子を見ようとしている人達、同じようにウ
マ娘が好きな人や情報通…あとはトレセン学園の関係者に勢力が分
けられていると思う。』

そのバカが1名ここに、府中にいます。すみません師匠…謝るのは
俺の方なんです。男つてというのは本当なんです。国のお偉いさん含

め、本当に申し訳なく思い、この軽い頭を地べたへと下げるのでどうか、どうか数日以内に収束していただけないでしょうか。

『まあ、そうですね。普通に考えたらほぼほぼあり得ませんけど：とりあえず初日なんで流石に書いてきます。休日だというのにこれ以上企業やトレセン学園に迷惑がかかると、大変なことになってしまうので。』

『お詫びと言ってはなんだけど、私のデータをまた載せておくよ。その：：ごめんなさい。』

『良いですって、お互い様ってことで：：それにこれを言ったらどうかとは思いますが、データを貰えるのめちやくちや有難いので寧ろ嬉しいです。』

日本の経済と引き換えに、こんな取引をしている時間など無いのだが：：早急に謝罪文を書き留めて今日は寝よう。

『あつ伝え忘れていた、弟子よ。一つだけ情報をあげる。』

『なんです？』

『君：ウマッターの方だが、あのシンボリドルフにフォローされているかもしれない。寝る前に確認に向いたまへ。少なくとも生徒会長様には、フォローを返しといた方がいいかもしれないから。』

『師匠：肝心な情報提供をありがとうございます。今すぐ確認に向かうべく、迅速な対応を心掛けます。』

うわあ、ウマスタの方にも女の子がいつぱいだあ：。

ウマッターにての謝罪文

『この度はブログにて、誤解を招くような表現をし、数多の人達にご迷惑をおかけした事を心よりお詫び申し上げます。』

不快に思わせてしまった方、大変申し訳ございませんでした。』
ウマスタにての謝罪文

『今日一日お騒がせしましたが、こちらの方でもお詫びを。落ち着きを取り戻すまでは顔を出さない様に致します。改めてよろしくお

願います。』

予想とは裏腹にこんな形でデビューするなんて、思いもしなかった。

しかし折角の機会だ…こうして世に出してしまったものが、もう消せないところまで来た。今日の出来事を教訓にするようスクショをして、通知を切ろう。

明日になればきつと落ち着くだろう…大半はこの出来事にどうでもいいと思っっているような、無関心な人達ばかりだろう…とそう思っていた。

『朝早くから個チャにて失礼…まずは突然の呼び出しに応じて頂き、誠に感謝します。』

『いえ、その…私にどの様なご用件でしょうか。シンボリルドルフさん。』

現実には甘くなかった。

努力家

目を覚まし、スマホを確認した時だ。ウマッターから一通の通知が届いている。恐る恐る中身を確認してみれば、かのシンボルドルフからだったようで…これには度肝を抜かされ、指先がプルプルと震えながら文字を打っていた。居合の達人同士がピリツとした殺気から身構え、その身を守るような緊迫感が襲ってきているようなものだ。

ああ、成程…フォローしたから向こうからコメント出来るようになったのか、と導き出すことにそこまでの時間は掛からなかったが、心臓が飛び出そうな勢いで、ドクンドクンと鼓動が激しく動くものだからか、時間が他の人の倍以上に経ったような錯覚を覚えていた。

『いえ、そう大したことではないのだが…。昨晚の一件のことでお話が。』

そしてその返事に、サーツと血の気が引いていく。画面越しからだというのになんたる威圧感なのだろうか…いや、単純に俺がビビっているだけだろうが、流石は皇帝様だ。コメントだけでここまでとは…実に驚きである。あのプリティナルナちゃんはどこへ飛んでいったのやら…あくまで創作上の話ではあるが、やはり普段はこのレベルの威厳か。格が違う。

『多大なる損害や誤解を与えたこと、誠に申し訳ありませんでした。』

『いえ、第三者が勝手に盛り上がり広めてしまった跳梁跋扈のようなもの…あなたに責任は無いでしょう。』

『えつと…それは何と言いますか、私の行いを許していただけののでしょうか。』

単純にラスボスと村人Aが釣り合うわけないだろうに、勘違いか…はたまた出会い方が違ったがために目をつけられてしまったような物語の中にあるような経験をしているのは、俺が男だからだろうか。

『許すも何も、その事について問いただしに来たわけでは無いのだ

が…。』

『そ、そうですか…。てつきり騒動の事で責任を取れとか言ってくるものだ。』

『そんな権限をただの生徒会長が持っていたのなら、それはもう本物の皇帝だよ。』

正直あなたなら本当に出来そうだな、なんて書いたものなら…俺は確実に八つ裂きの刑だろうな。

『さて、本題へと移りたいのだが…。』

『えっと…その、どのような御用件であらせられますでしょうか？』
こう連日も…しかも今日に限っては世間は皆休みで、かつ今は朝だというのに緊張が抜けきらない。皇帝様には申し訳ないが例えあなたであろうと、二度寝とかして逃げたい時くらいはあるんだ。

『まあそうだな…君も疲れている事だろうし、単刀直入にいこうか。あの騒動をきっかけに、学園側の生徒の殆どが熱心に取り組むようになったので、一言お礼を言いたくてね。』

その言葉に目を疑う。それこそ謝罪の一言でも述べろ、と言ってくれた方がまだ身が楽になるというのに。

『いや、その発言を生徒会長様がしているのか…そもそもあれからまだ24時間も経っていないのでは？』

『確かにその通りではあるがさつきも述べたように、君の行動に不当性はないだろうか？咎める必要もないものだ。それに…あれだけ世間を騒がせたことで、多くのウマ娘があなたのことを認知した影響からか、朝早くからトレーニングに励むもの、体調管理含め真剣に取り組むようになったものが大勢いる。それがどんな理由であろうと…たったの数時間でここまで影響を与え、導いた貴重な存在はそうはいないよ。』

過大評価というやつだろうか、それとも皮肉めいた言葉なのか。それはどうでもいい。ただし…男だからという理由だけで動く子達がいるとは、目先に囚われては一着は取れないようなものだ。特にレースにおいては、順位が他の競技に比べてより洗練されているというのに…大丈夫なのだろうか、この世界の女性達は。結果を残す前の過程

と動機は別に何だっただけのだけれど……たったの数時間で変わるわけがなからうに、生徒会長が言うほど必死な形相を浮かべながら練習に取り組んでいるのか？足を掬われないか……少しばかり心配だ。

『それこそ偶々ですよ。歪な認識が勘違いとなつて発生しただけで……あそこまで大きくなるなんて、恐怖の対象でしかありませんから。それに大抵不純な動機というものは、三日坊主で終わるのが常では？』

『我々が危惧しているのはそこだ。話が早くて助かるよ。唐突ですまないが、是非君の力を借りたいと思つてね。勿論無理にとは言わないが。』

利用されるんですね、わかります……なんて感じてないことは確かだろう。本音としては利用されても良いが、流石は現代の王様……そう思わないカリスマ性を間近で目にするとは思わなかった。見えていないなんて細かいことはさておき、こればかりは聞くしかないだろう。無理難題を押し付けてくるような人ではない……それは履修済みだ、恐れることはない。

『私に出来ることがあれば何なりとお申し付けください。』

『ふむ……モチベーションの低さ、と書けばわかるだろうか。』

単純に気持ちの問題で、解決できる問題であれば態々コンタクトを取ろうとするのか……いや、それは無い。となると、優先すべきものは現実的な目線。そこから見る必要がある。今のウマ娘の覇王争いは指5本以上……重賞は彼女達が取り放題。モチベーションと上げている事から推測してみた結果、答えはこれしか浮かばなかった。

『二極化でしょうか？勝とうとしても、勝つ気持ちが強くて……負け続けたことによる自信のなさや目的の欠如によって、戦う気力すら無くなってしまふところだった。そこに割り込んできた理由付けの一つが、昨夜の出来事……悪く言うところでああした刺激をきっかけとして、体力も気力も回復したと？』

はつきりいつてそれは悪手ではないか。もし仮にそうなら、それはもはや悍ましい執念だ。叶わない夢の成れの果てを、ただただ柵に必死に絡みついて死を待つだけになりかねない。

『短期的なのか長期的なものになるかはまだ不透明ではあるが、結果としては見ての通りだ。だが、それはあくまでウマ娘側の話でしかない。トレーナーが幾らやる気を出そうと…。』

『元々問題視されていたトレーナーの人数不足ですか。』

『その通りだ。かといって障害等級を持つものをトレーナーとして認定するかは上が決定権を持っており、ライセンスの取得をしているかどうかは公平に扱わなくてはいけない規則もある。それは彼女達が一番よくわかつていることだ。だからこそ、あの投稿で再び火を付けた人達もいる。彼女達は誰一人として、君が男だから…といった浅はかな考えで動いたわけではないと思うよ。』

君の投稿は何であれ、彼女達を刺激してくれた。その事に私は…君に感謝している。』

その発言に俺は少したじろぐ。皆の知っているルナちゃんではなく、歴とした皇帝…本物の王のような佇まいとでも表すに相応しいのではないか？恐ろしいほどの知見と観察眼の鋭さを、10代半ばで発揮するか？普通もう少しはそれなりに子供だろうに…一体どこで身につけたのだろう。確かに思考を幅広く豊かに取ろうとする姿勢やその活用方法などは、訓練をした結果既に癖のようなになったと本人が言っていた。だからといってこの理想の追求の仕方は…あまりにも王になりすぎている。怖さマシマシたっぷり濃厚だ。

そこを抜きにしても彼女達トレセン側の人間が、男だからという理由で張り切っていない根拠を示していない。いや…仮に男が理由でも何でもいい。大切なのはその後だ。彼女達を突き動かした心理の根幹は何だ？

『男かもしれないという理由以外で、彼女達が動いた理由はなんですか？』

そのコメントを送った時、暫くの沈黙と文字を打つマークが画面に現れる。彼女がどんな気持ちで、どんな表情で打っているのかはわからない。けれど…願わくば本物とこうして話がしたかった。何処か難しそうに顔を顰めているのか、それとも笑みを浮かべているのか、はたまた真顔か。どんなものでもいいから、俺の目で実際に見てみた

かった。

『単純に負けず嫌いが発動しただけだよ。より正確に言えば「男なんかには、障害等級に負けていられるか!」って気持ちから徐々に「よく考えてみたらトレセン学園に入るのは女性だけ：URAが緩和措置を許した場合、素人であそこまで熱中した人が知識も経験も会得すれば：私のトレーナー生活が奪われる!」という恐怖に変わった感情と、それに混ざって滲み出ている本物の勝負師としての：ある種トレーナー病だ。』

そして生徒達の意識も「この人がもし入ってきて、担当に付いたならば：私も活躍出来るのではないか。」「私も頑張れば、少しは前に進めるのかもしれない。」といった具合だろう：こちらは期待が大きいかな？今年はもしかしたら豊作なのではないか、という予想もあるからこそ：あのブログから影響を受けたまだ見ぬ卵が、将来トレセン学園に就いてくれるのではないかと持ちきりだね。』

『現実も見据えつつ、あわよくばの期待も忘れないと。』
『そんなところだ。まあ君が素人で、あそこまで集めるにしては度が過ぎているし、他にも：例えば写真に対するこだわりの強さやデータの保存方法、書き方の統一性から見て、極度の精神疾患なのではないかと予想も立てられていた程だ。そうなれば障害等級というのも領ける。』

あとはそうしたSNSの使い方から見て、年齢的にも比較的若いのでは？という推察に食いついた子達も多数居るが：。君に対してそこまで危惧するものではない、とURAは判断した。現状一晩で起きた事に対し、1人のために改善を行うなんて不可能だからね。

とは言いつつ、彼女らも少しは食いついただろうが：私の場合も恥ずかしながらトレンドに載った際、もしかしたら地方に居るかもしれない：とトレセン学園に所属しているトレーナー全員、全てのデータを照合して確認するくらいには取り乱したよ。あなたのような人もなると数が少なかったので簡単ではあったが、その中には当然：障害特級を持つものは居なかった。正に軽挙妄動、私もまだまだだと実感したからね。』

触れたく無い内容はさておき：正確ではないデータでそこまでやる気が上がるのもどうかと思うが、それで奮起してくれるのであれば喜んで力になれるだろう。

しかしだ：やけに障害特級の見方にやたらと詳しいと疑問に感じる事もある。これではこちらがボロを出せば、均等なやり取りを持ちかけることすら出来ない。ブラフが正しく作動したのかは定かではないが、何はともあれ：この程度で収まったのはある意味奇跡と言っても良いと判断して良いだろう。

やはり人間が一番怖いという一面は知れて良かった。彼女との会話も然り、世間の反応も同じように：ただの男という可能性があるだけでこの有様だ。

男でない証拠を出そうにもプライバシーの都合上、こうしたアスリートの公式垢からでは聞き出そうにも聞き出せない筈：だというのに隙がない。そしてもし仮にこのタイミングで男だとバレれば、世間は悪い意味で食いついてくる姿が予想される。

仮にレース場に一度でも男が立ち寄ったとしよう：まあ、そんな未来は無いだろうがやはり見るならば一番前か、現実的に見て指定席：そのどちらでも構わない。

そうなった時、場にいる者が9割以上の確率で主役である彼女達を差し置いて目を付けられ、挙げ句の果てに中身まですら見られず、やれ映えだのなんだのと理由を付け、個人情報すらぞんざいに扱われる未来しか浮かび上がらない。

俺も彼女達もこれでは認められる訳がない。それだけは避けなければ：だが、流石はURA上層部。線引きもしつかりしているからこそその判断に、感服する他あるまい。

『いえ、妥当な判断だなと思いますし、仕方がないでしょう。何より公平性に欠けるので、URAが決めた基準は守らねばなりません。そしてビビりましたよ：概ね合っています。私自身素人である事もそうです、まさかそこまで当ててくるとは思いませんでした。』

簡潔に言うのと重度の自閉症を発症しております：それも複数合併しているのか複雑なようです。詳しいことは専門的な知識等もな

いのでわかりませんが：私も上手く伝えられることが出来ないのが残念です。

とはいえ治療に専念し、なんとかネット上にて1対1で会話をするくらいの行動は出来るよう訓練を受け、ようやくといった時に偶然とはいえこうしてシンボルドルフさんと画面越しではあるものの、会話をする事が出来てもう：身に余る光栄、恐悦至極の思いです。』

こう言っておけばいいだろう感満載の、過去の経験から学んだ理由作り：本音の部分はどうであれ重要なのは反応だ。さて、どう来る？

『私は君が男でも構わないけどね。能力があるなら尚更無駄にはしたく無いが：そうなると学園全体が資格を持つていないと入学できない事になる。理想を叶えるというのも一筋縄ではいかないな。』

『さうつとさういうこと書きますかね：それに私はペーペーですから。私も同じような気持ちですよ。』

『性別に関して否定はしないんだね。』

『男の子はミステリアスな方がいいって決まり文句ですよ。まあ：本音を言うと否定する方が面倒なので疲れちゃいました。もう懲り懲りです。』

やっぱカイチョー怖い。

『さて：笑えない冗談はさておき、君の誠意や真剣さは伝わってきた。その能力にまだ納得がいかないなら、是が非でも納得がいくまで探求し続けるといい。そしてこれからも、熱意を込めて活動に励んで欲しい：私のお願いはこれだけだよ。何か手伝えることがあれば遠慮なく言ってくれて構わない。』

皇帝から我儘をお願いしていい権利を貰うとは、相当切羽詰まっているのか？確かに史実も今もオグリ世代は強者の祭りだ。だからといってトレーナーが悔やむことは無いだろう：こればかりは選手にとつて、時代が悪いとも言えてしまうのが常だ。

だからこそ：この我儘が偽善であろうと、聞き入れてもらわなければならぬ。プレゼンなんて前世ぶりだが：やるしかない。

『ありがとうございます。全てのウマ娘には可能な限り幸せになつてもらいたいですから。因みにどんな事でも書いて大丈夫でしょう

か?』

『内容によるが…基本的に問題が無いようであれば、好きなように書いてくれて構わないよ。私としても気になるのでね。』

言質は取った。あとは俺がどれだけやれるかだ。

『では、これは内密にお願いしたいのですが…実は今こういうアプリを作っています…。』

そこからは根気と体力の勝負であった。どちらかといえばアプリをするというより、どれだけの精密さが求められるかといった話に変わっていったが…このアプリの狙いから、学生が置かれている立場を少しでも軽減させたい想いは語れたと思う。呆気なく結論だけ述べられたが、自分にとって良い体験ができた。

『要するにデータが少ないから、事前に呼びかけをし、生徒に協力して貰いたい…という事か。』

『はい。映像越しで構わないのでより多く…そして細かいデータがあれば、アプリも無理なく提供がしやすくなります。』

『生徒のデータを他者に提供するためには上層部に提言してからでなければ難しいが、やってみる価値はありそうだ。結末がどう迎えるのか見通しが不明だが、後日必ず知らせよう。』

『検討していただきありがとうございます。では、失礼します。』

『貴重な体験をさせてもらった、ほんの小さなお礼だよ。こちらこそ今日はありがとう。』

緊張が解け机に前屈みに倒れたまま、汗が止まらず呼吸が苦しい状態が続いていた。

…これがデバフスキル特化の力なのか?

マエストロが欲しい…そんな心境を壊すように、時計の針はまだ10時になったばかりで示している。今日一日何も出来なさそうなくらいに体力を使い果たした。

そしてそれに畳み掛けるようにスマホが揺れ、俺は苛つくように声を上げたい気持ちを堪えて電話へと出る。その際にふと視界に映った見覚えのある番号なんて知らないし、何も見ていない。

「もっもっ…」

「東京都立府中総合医療センターです。定期検診の更新が為されていなかったのをご連絡させていただきました。」

「あ…すみません、忘れてました。」

「いつも通りですね…はい。では明日の朝10時に、担当の者が向かいます。検査はそちらのマンションで行います。それと検査前日の21時以降に固形物による食物を摂ることは出来ない規則です。で…厳守の程お願いします。」

「本当に申し訳ございません。よろしくお願いします。」

勘弁してくれ、俺を殺す気か…と言わんばかりのタイミングで頭の中からすっぽり抜けていた定期検診という言葉が、俺を現実へと戻す。

転生後であっても、お注射はやはり慣れないものなのである。

スプリントターボ

主治医に注射を打たれたあの日は、前日にあつた会長以外にも色々なことを知ることが出来た。

自称【主治医】をネタで名乗る矢野医師と軽く世間話をした時に、娘さんの話で盛り上がったのだが：そこでとある写真を見せてもらった。きっかけはなんてことはない：ウマ娘好きならこれはびっくりするだろう、というだけの理由で見せられた代物だ。ただそれだけしか聞かされていなかったが為に、驚愕の発覚をすることになる。

なんと：ウイニングチケットとトニビアンカが映っている写真だったのだ。これを見せられた時は、尊さのあまり気絶しそうになったのは記憶に新しい。

かつての凱旋門賞バ：そしてオグリキャップらと激闘を繰り広げ、時代を作り上げた名バの一人が府中に居るなんて興奮しない奴はない。こちらとしてはそつちで来たか、と意表を突かれたわけだが、これはこれで最高だった。

もしこれがウイニングチケットでなくエアグルーヴであれば、とも思ってしまう俺の心は実に汚れているだろう。ダイナカールが一体どんな名前が変わっているのかは知らないが：我儘を言えば、その場において欲しかったと思ってしまう。こればかりは転生者でしか知り得ない事柄だが：エモすぎる事間違い無しな筈だ。しかしチケットともなると：マルゼンスキーの方があの学園では会いやすいのだろうか、なんて想像に耽ってしまう為に、どちらに転んでも美味しい一枚であることに変わりはない。

なんでも彼女が言うには、学園にてウイニングチケットが偶々部活の助っ人としてサッカーをしていたところ、その場で意気投合したそう。一方的に知っているとはいえ、ある種納得がいくところがまた

チケットらしいというか：馬主エピソードだろうか？この世の法則性は実に奇妙に絡み合う。

当然無関係な関係ではないが故に、個人的に興味がそそられる話であった為：是非本人と話がしたい、と迫ったもののそれとなく断られてしまったことが実に悔しい限りだ。時として常識やルールというのは実に残酷である。

それにしても娘が将来ダービーを取るかもしれない存在だなんて知ったら、親はどう思うのだろうか。こちらとしてもビックリな出来事に、心が保てなかったのは未熟者としての証拠であろう。：娘がウマ娘だとは聞かされてはいたが、どうしてもこればかりは心の準備が足りなかったようだ。

医者ということもあり、限られた会話でしか盛り上がることは出来なかったが、他にも話を聞く機会があった。その日は仕事終わりに食事会があるとのこと：なんでも娘同士の繋がりでの交流なんだそう。間違いなく将来暴れまくるであろうBNWの御三方だろう：俺も混ざりたい、なんて言えば矢野医師の心臓に余計なダメージを与えそうで、口が裂けても言えなかった。

「君の主治医としてここまでやってきたけど、バカ娘よろしく二度とごめんだわ。やれウマ娘に会いたいあの言うから、私が配属されたんだけど。」

なんて笑いながら語る姿は、親バカそのもので微笑ましくはなるが：ちよつとだけ心外である。俺はあそこまで感情移入するタイプではない：と反論したところ、心底呆れたような表情を向けられた。そんな叫んだり、涙を流したり、暑苦しいようなタイプでは断じてない：俺は至つてニュートラルな存在なんだと言いついて聞かせていた。

一度だけ：本当に人生で一回限りではあるが、

病院とはいえ何も言われずに会ったウマ娘が、メテオノーブルだとは思えない：そりゃあ仕方がないだろう？写真集と瓜二つな姿で、時

代を作った張本人が間近に居て発狂しないほうがどうかしている。
：という状況を作り出した本人が、それをケロツとした表情で述べても何の説得力も無い。ある意味で幸せだったが：ああいうのも本当に心臓に悪い。

：ああ、そういえばそうだった。それよりも前に会っていたウマ娘が居たことを思い出す。病院といえば彼女も居たな、と。

ウイニングチケットの黒鹿毛を見て思い出したが：生で見るのはこれで2度目だ。その時も同じように気絶しそうになりつつも、必死に堪えて同じ時を過ごした事があった。同じ黒鹿毛の子でもチケットとは真逆な、随分と身体の弱い子だった。あの子は今でも元気になっているんだらうか：恥ずかしい過去の話である。

そしてそんな懐かしい気持ちに浸っていた俺を裏切るように、注射を迷うことなく打つ行為だけはやめて欲しい限りである。この世界の医者は皆こうしないとイケない規則でもあるのだろうか？

こちらとしても思い出に浸かっている中、いきなりブスッと打ち血を抜くなんて医者がやっていい行動じゃない。トウカイテイオーの気持ちは今になってよくわかる：そんな1日を送った。

因みにあの騒ぎについては、彼女も忙しくあまり認知していなかったように特に何も聞かれずに終わった。少しばかりホツとしたのは内緒である。

そして、時は少しだけ過ぎた8月の下旬に差し掛かった時だ。

20th：万博バンザイ万博バンザイ、そして名馬とウマ娘。あのCMには震えたのが懐かしいと思いつつも、気分は高揚を維持してい

る俺に…ある知らせが入ってきた。

『伏兵のお弟子さん、物凄い勢いでしたね。』

『あれは凄かったですね。』

そうだよ…僕が、その弟子だよ。

なんて言ったところで何かあるわけでもないのに、他人事のように華麗に対応しながら1人目の子と何気ない会話を続けている。仮面も持っていないのにそんなセリフを言ってもいまいちインパクトがないからか、実に虚しいものだ。

その弟子として振る舞っているのは現時点でシンボリドルフただ1人のみ…といっても世間話くらいしかする事もないのだが、本人にしてみたらそちらの方がこちらも肩が抜けて良いとのことである。生徒会長といえど少しは休める場所が欲しいのかもしれない。

『次のサマードリーム、君は誰が勝つと予想しているのかな？』

『それ、私の口からシンボリドルフが勝ちます！って言わせようとしてませんか？こちらとしては冷静に見た上で判断したいんですけど。折角なのであなた以外の名前を挙げてもいいですか？』

『その発言、皇帝としての異名を持っているこの私が肯定しよう。』

『今の空気では是非とも日本勢、特にシービーに勝って欲しいと思っただ自分に驚いたんだよね。…真面目に行くと、グレートスピリットかマリートランか。URA優勝時に豪脚を見せたリトルココンを挙げます。』

『ほう…大体私と似たような思考か。ならば、本当に手は抜けないな。画面でしか見れないだろうが、見ていてくれ。全員纏めてねじ伏せて来る。』

『怖いつす。というか態々聞きに来る必要はないと思うんですけど。』

『皆を率いるに相応しい素質のある者には、お手本を見せるのが先

輩としての役目だからね。』

『やだ…かつこいい。そんな事言われたら皇帝陛下にキュンキュンしちゃいますって。好きだと申す気はございませんって言っちゃいますって。』

『初恋キャラットケーキか。君が見ているとは正直、驚いたな。』

『それは私も同じですよ。会長だとしてつきりウマ娘の夜明けかな、と思っていたのでその返しは少し…いや、かなり意外でした。』

『そうして素で返してくれると、こちらとしても有難いんだ。君との会話は普通で良い。虚心坦懐だな。』

『そりゃ庶民Aですから。しかし庶民が皇帝陛下に対してそのような発言はするべきではありませんね。…訂正します?』

『それは本当に辞めてくれ。私だって普通の10代だよ。』

『まあ私達が普段見ている姿というのは、敢為邁往に近いですから。そうですね…レース前なんで折角ですしそれっぽいことを発言してみてもいいですか?』

『珍しいね…君はレース前に何て言ってくれるのかな?』

『では…はつきり言って日本にあなたの敵はいません。海外勢含め強者共を丸ごと全員、ぼっこぼこのけちよんけちよんのフルボッコにしてサマードリームトロフィーの優勝をもぎ取ってきてください。但し、怪我はしないように。』

『彼女達にその発言を今すぐにでも見せてやりたいくらいだよ。まあ、お蔭でだいぶ肩の力は抜けた、ありがとう。また連絡する。』

と、まあ数時間前にやりとりをしていた。この世界でもゲーム同様のトレーナーに会えたのだろうか?

それはそれとして今回はなんと、彼女からまたもや吉報が届いたのである。相談が届くこと自体は良いのだが、本来ならば相談事が無ければ無いほど状況としては好ましいという微妙な気持ちである。学園側にとってはそれに尽きるだろう。非公認とはいえ、俺にも思うところがあるわけで…少しだけモヤモヤしてしまう。

とはいえ、だ。こうして相談者が来るということは、事実である。

つまりは対処しなければ、俺の存在価値は無と等しい。

なんでも彼女が変わった事で、彼女自身に相談をしに来た子が居るらしい。こんな事もあるものなのか、なんて思いながらも…実のところ3人目が来るかもしれないとなると…それはそれで嬉しいものだ。

ただ彼女なりに答えるのも問題は無かったのだが、折角だからあなたにも…とわざわざ時間を作ってくれる気遣いに感謝してここに居る。ただ、画面越しとはいえ、待ち合わせにはまだ時間があるのと…相談室ではあるものの、閑古鳥が鳴いているよりはマシンな為こうして会話を広げては居るのだが、初手からまさかのその話である。

だからこうして時間が許す限り、雑談を繰り広げているのだが…それらはいつの間にかさらに深掘りしていくこととなった。

『前にこの掲示板を紹介した子ですが、私のトレーナーさんが暫く面倒を見ることになったみたいです。まだ危なっかしいみたいなので落ち着くまでの間のようですが。』

『それは良かったです…って、それはそれでまた凄いですね。一年も経たないうちに担当を2人持つとは。』

知らない間に進んでいた展開に、少しばかり驚きを隠さないでいたり…。

『ついこの間シービー先輩から8月のドリームトロフィーが終わり次第、写真集も出すような事をボヤツと呟いていましたね。』

『ちよつと待って…それ、告知もされていない極秘事項じゃないですか！予約サイトの開設が待ち遠しいですねえ…ワクワクしてききました。』

ネットの民度など等に知れているが…それでも男性の間で時折語られる機会があるのではないか、と噂されている人気者ミスターシービーの話題の他にも…。

『そういえばドリームトロフィーが終わった後に交流会があるそうですね。』

『恒例行事ではありませんが：今年だと凱旋門賞からの出場者も多そうですね。今年の交流会はそれ以外にあつたりしますか？』

『ジャパンカップが終わってから、アメリカのトレセン学園の人達が数名ここに見学しに来る予定はあるみたいですね。』

『それはまた貴重な機会が得られそうですね。数も質もあちらが上ですし、何より戦い方や得意な走りも様々：日本で得られる事とはまた違うものが見られると思うので、こちらとしても楽しみが増えます。』

もしかしたら本当にあのジャパンカップが再来するのだろうか？あのクソローテとも呼べるバンブーメモリーやオグリキャップが走るの：前世の考えが根強い俺からしたら流石にやめてほしいとも思う。ゲームではなくリアルならば尚更だ。仮に再戦するのであればオベイユアマスターの来日があるのではないか、なんて思いつつも：それを伏せながら交流会が楽しみで仕方ない、という話を広げていたら：いつの間にか20分を過ぎていた。これには流石に違和感を覚え、慌てる気持ちを抑えようと冷静に判断して我へと帰る。

物凄い勢いでお互いに語っているが、いくら何でも喋りすぎではないかと。

こうして楽しそうに話す彼女は仮令ネットといえど微笑ましく思う。だがしかし：今日の主役はこの子では無い。俺としてもこの子との会話は充実していることもあつてか、悲しいのも事実。心を鬼に

して話を切り返す事にした。

『それでその依頼人は…今どちらに？』

固まるコメント欄、暫しの沈黙。

『すみません、すぐ呼んできます。』

一言、コメントが残される。どうやらお互いに夢中になりすぎて、忘れてしまうという失態を犯してしまった。こういう状況を作り出してしまった俺にも責任はある。どうか何も起きていませんように、と願うばかりだ。いざこざが生まれなければ越したことはないが…と心配をしてしまう。よく扱われる私と画面のどちらが大切なのよ！なんてベタな展開が繰り広げられれば、折角の俺の楽しみが無くなってしまうではないか…という気持ちは何処へぶつけたら良いのだろう。この葛藤は誰に言えばいいのだろう…といつになくソワソワと、小刻みにカタカタと軽く歯がぶつかる音を聞きながら待っていた。

一分にも満たない時間とはいえ、一番長いと感じてしまうこの待機時間…ゲート入りしたセイウンスカイの気分と、どちらが苦しいのか勝負したいところである。

そんな事を思いながら、ルームが開設され3に増えてコメントが打たれ始めた。あれから2ヶ月で3人目…素人にしては上手くいつている方だろう。所詮はこんなものだろうが…それでもこの時間はやはり楽しいものだ。

『初めまして。』

『初めまして。』

『今日はよろしくお願いします。』

『こちらこそよろしくお願いします。』

初手挨拶は基本中の基本…ここまで精神が病んでいない子達ばかりが来ている事から、こちらとしても気持ち楽である。

『では始めに、どのような事をお聞きになりたいのか等を焦らずでいいので書き込んでみてください。隣に彼女がいるなら相談しながらでも、意見を聞きながらでも、箇条書きで書かれても構いません。』
『わかりました。』

かれこれ時間にして10分、こちらは一口お茶を飲み、座りながらクルクルと身体を伸ばしつつ待つ。悩みが軽ければ越した事はないし、重ければそれはそれでやり甲斐があるというものだ。

まあ、精神汚染とかは勘弁してもらいたいけど：馬にも精神病があるかもしれない、と前世では語られていたこともあったが結局は不明。ウマ娘ではどうなのだろう：立ったまま寝るわけでも、睡眠時間が人間に比べて短いわけでもない。

実際のところよくわかっていないという設定として貫き通していたわけだから、ゲーム会社もそのところは考えていないのかもしれないが：そんな事をふと思いつながら、通知音につられて書き終わった内容を見る。

『私は現在、マイルと中距離戦をメインに調整を行なっているのですが、長距離にも手を出そうと考えています。しかし脚質が逃げに加えて、体力不足からか長距離の最後までベストタイムを出すことが難しいです。周りの先輩方に聞いても、長距離の逃げはそう簡単に出来るものではないとのこと、参考に出来るような資料も古いです。何か良い方法があれば、と思いついて。』

なるべく模擬戦まで出来る限り対策をしたいと考えているのですが、どうしたらいいでしょうか？』

いやあきついつつ。H A H A H A：苦笑するほどに、こればかりはきついつつ。至難の業という言葉を辞書で調べてきてもらいたい。

『長距離で逃げを制したついでと：例として菊花賞でいえばクラマハクがいましたが、もう現役を引退している身です。大方、有力な人たちも中距離が中心で早々にいない。確かにこればかりは苦し

いすね。』

三冠が確実とされていた名バが悉く散っていった菊花賞：ステイヤーとされていた子達でさえ長距離で逃げを打って出る子はいない。それほどまでに長距離で逃げというのは非常に難しいものだ。ゲームではゴリ押しによるゴリ押しによつて可能ではあったものの、適正距離以前に戦法がそもそも合っていない事の方が多い時だつてあるかもしれない。

もうこの時点で大体誰なのか絞れてはいるが：これは流石にお手上げだ。

そもそも俺自身、三冠に重きを置いたことは一度も無い。

ゲームみたいにならうと出来るものではないことは勿論の事、ゲームだったから、適正距離がそれぞれC・B・A・Bと表されていただけのヌルゲーそのものだからこそ出来る芸当だ。：育成ゲームが始まった時点で、彼女は既に完成されているのだ。対してこちらは未知数：あまりにも不安定すぎる。

『失礼を承知で書きますが、脚質を先行にして足を溜めて勝つというのは…。』

『自分の信条は曲げたくありませんし、結果的に先行ポジになってしまうとかかってしまう事があつたりするので逃げの方が安定します。』

この世界にもあの調教師のような人がウマ娘に居るのか。頑固者かそれとも執念か。：まさか、ね。

『因みに体力を保たせて自身が最大パフォーマンス出来る距離は最大でいくつですか？』

『2200が良いところですね。』

『oh：ん？あれ、でもマイルも走れるんですよね？どちらか、で言えばマイルの方が走りやすいですか？』

『いえ、差はないです。』

ブルボンとそっくりさんですか？と反応してしまいそうで、少しだけ背中がピリピリと電流が流れたような感覚に陥る。思わず手が止

まり、冷や汗が頬をスーツと流れる。他に逃げ馬で居ただろうか？ウマ娘でも居ただろうか？

第一に：マイルと中距離両方をこなしている中等部の時点で、この子はどこか頭がおかしいのでは無いかとさえ思ってしまう。流石中央：精鋭揃いである。

ブルボンと同じようなウマ娘が早々居たら溜まったものじゃないが：マイルを走れるということは、それだけスタミナがあるということではないだろうか？最高速を維持しながらタイムを競わなければいけないレースがマイルだ。個人的に1番キツイ競技であると思っている立場にいるわけで：ということはポテンシャルはそもそも満たしている可能性が高い。：益々ミホノブルボンの可能性が高まってきた事に動揺を隠せないでいる。とはいえ問題はそのかかり癖と、同期にどれだけステイヤーがいるか：その度合いを確かめなければならぬ。ブルボンなら間違いなくライスシャワーやメジロマツクイーン、マチカネタンホイザ等々が彼女とぶつかるだろう。

しかし、だ。ブルボンは元々強い上に、厳しい調教：トレーニングを重ねた上であれだけの強さを手に入れた、謂わば努力と才能とセンスが絶妙に配合された僕が考えた最強の牡馬みたいなものだ。チートではないが当時の環境下で、坂路で鍛えてあそこまで強くなるかと問えば疑問にさえ思う。筋肉を休めながらとはいえ、調整が全て上手くいくなんてそんなケースは殆どない。スプリンターの要素が強ければ強いほどそれは難しくなる。

その魂を引き継いだ彼女もまた天才：いや、天賦の才を持っていると言っても過言では無いことは確かだ。壊れない、筋肉の回復量も速度も桁違い。運も強い。それを人間の姿形に変えてもそのまま引き継がれていると推定した場合でも、果たしてこう言えるだろうか？

調教師と同じように「ハードトレーニングをしてください。」と俺が答えても良いのか？あなたは壊れにくいので大丈夫です。と言えるか？答えはNOだ。もしゲーム水準であるならば練習上手がついて

いない状態かもしれない。そんな時にトレーニングをして失敗でもすれば大事だ。

それにネットで精神論を語ったところで、その後どれだけ影響に響くかは未知数な上、身体も出来上がってない状態でやれ…というのも酷である。

コンティニューなんてものはこの世界に無い。ここで無理に発言するのはこちらが不利になるだろう…よって、俺が決めた答えはこれしかなかった。

『すみません、こればかりはご期待には添えないかもしれません。長距離かつ先行で走れる子を探して併走を行う、またはその子からコツを盗む。もしくは不良場で相手の体力を使わして、駆け引きをさせない作戦に賭けるとか…それぐらいしか思いつきませんね。』

『そうですか…。』

『ご期待に応えることが出来ず申し訳ございません。』

『いえ、大丈夫です。もう既に前任トレーナーからも言われていた事ですから。』

俺が取った選択肢は諦めるという最悪なものだった。

トレーナーがいたということ…それこそ素質は間違い無くあったという事が確定した時点で、ミホノブルボンという前提で取り掛かってみたいが、一度冷静になると頭が余計に混乱してしまう。

ミホノブルボンがそもそもこんなところに来るだろうか？こちらが想定しているのは未勝利戦を勝てない子なのだが…レベル1戦法を使ってどうにかクライアントの依頼を達成するのが当初の目的であり前提だ。それがどうだ…1人目といい、2人目といい、明らかに上位の位置に居そうな予感がしてならない。

とりあえず今は、クライアントの精神状態を緩和させる方向でいこう。

前世には無かったドリームトロフィー。あの後、お開きとなるかと思っただが、意外にもそうはならずにはならずチャット欄は何気無い会話で続いている。

『折角ドリームトロフィーがあるなら、それを見た感想などを互いに意見交換したいんですけど…勿論、お時間があればの話ですが。』

『では、是非。』

1人目ではなく3人目の人からそう言われた時、俺は試されているのでは無いか…と感じていた。時刻は15時30分を過ぎようとしている。意外と時間が経っているもので、世間知らずな俺でも話が合うものだと思っていた。

『いよいよですね。』

『学生も抽選でしか行けませんからね。外れたのが実に悔しいです。』

『私も生で見てみたいです。それにしてもメンツがこれまた…凄く濃いですね。』

『この放送はURA日本中央競バ界の主催でお送りします』

さあ、今年もこの時期がやってまいりました。8月26日、ここ府中に世界最大の恒例行事がやって来ました。誰もが夢を見るサマードリームトロフィーが、いよいよ始まるうとしています。数多のライバル達の上に立ったウマ娘達が、フルゲート18人…幸運にも何事もなく揃いました。午前中の雨も嘘のようです。レース前に上がって心底良かったと思います。

東京競バ場のパドックにウマ娘がそれぞれ日本、海外共に9名ずつ

です。それぞれご紹介していきましょう。

- 1 番ビターグラッセ、体重増減はプラス1kgです。
- 2 番アンカースリップ、マイナス500gです。
- 3 番マルゼンスキー、プラス300gです。
- 4 番グアテマナフェール、プラス460gです。
- 5 番メインリファレンス、マイナス100gです。
- 6 番シンボリルドルフ、増減はありません。
- 7 番リトルコロン、プラス200gです。
- 8 番オールドヴェルズ、プラス600gです。
- 9 番ホウジョウサクラ、プラス100gです。
- 10 番シリウスシンボリ、プラス100gです。
- 11 番マリートラン、プラス250gです。
- 12 番ミホギサルメ、プラス800gです。
- 13 番ミスターシービー、マイナス1kgです。
- 14 番グレイトスピリット、増減はありません。
- 15 番アレックベリー、プラス500gです。
- 16 番スターローゼ、マイナス200gです。
- 17 番トリプティコス、マイナス100gです。
- 18 番トニビアンカ、増減はありません。

以上の18名で出走致します。

東京競バ場、雨は上がりましたが曇り空が続いております。バ場状態は重となりました第18回サマードリームトロフィーの各ウマ娘、入場です。』

世界の理想が詰め込まれた、もしかしたらあったかもしれない夢のレースがいよいよ始まろうとしている。

映像越しから聞こえてくる女の人の声は、アナウンサーといえど夢のような高揚感を隠しきれないでいる。僅かたったの2分と少しの時間で終わりを告げる幻は、24時間という基準が曖昧にぼやけてしまうほどに深い衝撃で満たされる。その夢の舞台が今、幕を挙げた。

『さあ、東京競バ場ファンファアレーが鳴り響いて大歓声が湧き上がりました。日本が、そして世界が注目している今回のサマードリームトロフィーですが、やはり一同が目を惹くのは凱旋門賞で大外から全員をまとめて撫で切ったグレートスピリット、そのグレートスピリットの記録を塗り替えたマリートラン、それに挑む皇帝シンボリルドルフの直接対決を見に来た人が大半かと思われまます。

しかし、この2人に気を取られてはいけません。

英ダービーウマ娘、独ダービーウマ娘、仏ダービーウマ娘、スーパーカー、三冠バ、鉄の女、UR A優勝バなど：今回もまた実に豪華なメンバーです。会場に集まった人以上に、緊張に勝る集中力が問われまます。距離にして2400m、各バゲート入りは何事もなく順調に行われていきます。静かにマリートランがゲートに収まろうかというところ：流石はドリームトロフィーともなると、ゲート入りもスムーズです。スターローゼ、トリプティコス、そして大外トニビアンカがそれぞれゲート入りを行っています。ゲートに：今、収まりました。態勢完了：第18回、サマードリームトロフィー！』

ゲート特有の音と共に一斉にスタートした時に聞こえる地鳴りのような音。

『ゲートが開いてスタートしました。綺麗なスタート、流石勝ち残った歴戦のウマ娘、優駿です。夢の対決、サマードリームトロフィー：あなたの夢は何でしょうか。私の夢を叶え、新たな夢を作ってくれたメテオノーブルの走る姿を、この季節が訪れる度に今でも頭に過ぎります。今年もあなたの夢を描き叶え、胸を熱くさせるような：そんなウマ娘に出会えるのか。いやあ：今年もドキドキしますね、本当にドキドキしています。

あなたの夢を載せてターフを走るウマ娘に、今一度大きな歓声が浴びせられています。ここ府中競馬場ですが、ここから溢れ出る熱気を最後まで保たせるべく落ち着いた気持ちで見守らなければ、我々のスタミナが保ちません。そんな私達を構う暇もなく、各ウマ娘は向こう正

面へと向かっていきます。現在の並びを確認していきましょう。

先頭、先頭はメインリファレンス。ハナを主張していったメインリファレンスを追う2番手にアンカースリップ、3番手はオールドヴェルズ。今回はメインリファレンスに前を譲りました。メインリファレンスが引つ張っていくその後ろ、4番手にご注目ください。今日は思い切って先行策マルゼンスキー。その先頭を追っているホウジョウサクラとグアテマナフェールが、前をジリジリと狙える位置にいます。その後ろで良い位置にミホギサルメが目を光らせている様子です。流れが安定してまいりました。

先行勢が各バを突き放せるか気になるところですが、それを追いかけるは最強の一角を狙うトニビアンカ、トニビアンカ。内を突いてリトルココン、トリプティコスが続いて、その後ろであります。凱旋門賞のリベンジを狙うシリウスシンボリ、さらにアレックベリー、ビターグラッセらとそれを阻む勢いで外目を通って皇帝、シンボリドルフ。今日はいつもより後衛の位置です。

中団より後ろ、1バ身後ろにもう1人の三冠バミスターシービー、ミスターシービーです。少し空けた位置にスターローゼが続いています。この辺りからポジションを徐々に上げていこうというところか。そしてマリートランとグレートスピリットはその後ろに居るが。これはかつてないほどにファンサービスに溢れているぞ！踊り狂うのか、この夢の舞台で！まさか凱旋門賞で見たあの末脚を今一度繰り出そうという魂胆にも見える見える見えてしまうぞこの走り！大人しい性格とは裏腹に、これは強者の余裕かそれとも意図してなのか？正に大胆不敵！強さの質もレベルも自由度も桁違いだ！これには思わず会場からはどよめきが徐々に徐々に変わっていき、未だかつて無いほどの歓声で盛り上がっています！

先行勢がじわじわと下がってきてバ群が縮まってきました。それに合わせて横並びになってきているか。ややハイペースとなっているが、果たしてここから先マリートラン、グレートスピリットに勝るウマ娘は居るのか？ルドルフが前をジリジリと狙っている！

均衡が崩れるのはどのタイミングか、大櫓を超え各バ第4コーナー

へと駆けていきます！じわじわと…ねつとりとした不気味なプレッシャーが実況席にも伝わり、正に手に汗握る展開です！いくつもの夢が、伝説が、最後の直線へと駆けていきます！』

非常識な才能も絶対には勝てないのだと悟れる試合だが、やはり地の利もあるのだろうか。他の国ではまた違った結果になったのかもしれないが、たればなんてものは関係ない。

競バは勝ったものが強い、ということかを否が応でも知っている。

『さあ、ラストスパート！最後の意地です！先行勢はどうだ？メイソリフアレンス、マルゼンスキーはなんとか粘っているが厳しいか。ホウジョウサクラ、ミホギサルメは伸びが苦しい。アンカースリッパ、ラストスパート！ミスターシービー、三冠バの意地を見せるかミスターシービー！後続勢の末脚が炸裂する。ジワジワと差を縮めている！トニビアンカ、リトルココン、シンボリルドルフがバ群を割って突き抜けてきた。おおつと外から来た来た、大外から飛んできたグレートスピリット。グレートスピリットが踊り足りない！と迫る迫る、それに合わせてマリートランもピッタリと合わせて上がってきた！一同にとつて怖い2人が上がって来るぞ！先頭は皇帝へと変わっているが、果たして彼女達は追いつけるのか？凄い脚！やはり世界最強の座はそう簡単には渡せないか！しかし！ルドルフ先頭、ルドルフ先頭であります！グレートスピリット追い上げる！凄い脚で駆け上がる！やっぱり最後は王の競り合いか！2人のせめぎ合い、粘る皇帝を世界が差し切るか？ルドルフか、スピリットか！ルドルフ、ルドルフのままか！前とのリードは半バ身もない！僅かに内のまま変わらない！僅かに内！変わらない！変わらない！僅かに内だ！ルドルフだ！ルドルフだ！2番手にスピリットが拳がった！三着争いはマリートランが制しましたが、しかし！審議、これは審議です！僅かに内に見えますが、写真判定が入ります！』

あつという間に終わりを迎えた実質最強マッチレース…勝利を収

めたのは、やはり皇帝であった。

『判定出ました。掲示板に6番のシンボリルドルフが一着と出ました。二着に14番のグレートスピリット、三着に11番のマリートランです。四着、リトルコロン。五着は…えー、表示されていませんが同着でトニビアンカとミスターシービーです。更に詳しい結果はU R A ネットにて見られます。』

ウマッターでの反応もそれぞれ見ていくと、多種多様ではあるもののやはり皆が目を通していたようだ。トレンドは紛れもなく一位を示している。

『日本の芝に絞れば、やはり皇帝には誰一人として敵わないのか？それはそれとして、今日も推し活お疲れ様でした！』

『あーすごい…キラキラしてんねえ。流星はカイチヨーさんですなあ。』

『開催されるのが中距離だけというのが実に惜しいレースではあるが、最高のパフォーマンスであることに変わりはないだろうね。にしても…今日の彼女はいつにも増して集中していた様子にも見れたが、何かあったのだろうか。』

『シービーが怪物共を倒してくれる日がいつか来るだろうって信じているんだけど、流星に集中力が最後まで途切れなかった時点でルドルフには誰にも勝てんわ。』

『日本での適性もあるんだろうけど、やっぱり皇帝は強かった。おめでとう。』

『グレートスピリットの魅せる走りには感動したけど流星に拘りすぎたのかな、とか考えた私がバカだった。今日のルドルフには誰も勝てん、上手すぎる。もしかして全盛期よりラスボスしているんじゃない？今まで見せた事がなかった本気なのかも？』

『いや、あれはまだ上があるんじゃないかな？レース展開に合わせて走る事ができるルドルフだからこそ…あくまで全力だけど本気じゃないと思う。それでもギリギリだったけど。』

『皇帝強すぎるわ…いい加減、ダジャレ要素を越える隙くらい見せて欲しい。アイドルにハマってるとか、生徒会では我儘な子供になるとかそうした噂も一切無い。これじゃあ完璧超人じゃん。』

だが、俺は今それどころではなかった。数分前の出来事によって思い出した事があった為だ。

アンカースリップは三代ダービー繋がりのスリップアンカーだと、戦績から見て判断出来ている。…その大元であるのは確実にミルリーフだという事を、何故今の今まで思い出せなかったのか。

ミホノブルボンにも血が流れていた…そして交流会があるということ。

ダービーは最も運が必要なレースだと言う人もいる。トレーニングによつての損傷も無いほどに運が強い…この子がミホノブルボンでは無かったのだとしたら、出会う要素はほぼほぼない。しかし、ミホノブルボンであれば縁が無かろうと、その実力で引き寄せてくれるに違いない。

だが、明らかな気性難と酸素ポンベを使用していた馬の元ネタを引き継いでいるのか、普段からガスマスクをつけているような子だ。その子に対してさりげなく、自然な形で合わせるようにするには工夫がいる。サイボーグの異名が将来付くとはいえ、相性も未知数である。

いや、もはや血統だけの問題では無い。彼女が何故走れるようになったのか、その経験は彼女だけじゃない…他のウマ娘にとつても役に立てる可能性もある。

彼女らは先程の試合の興奮が収まらないのか、会話を続けているようでチャット欄は忙しなく動いている。だが、こちらはこちらでやる事が出来た。名残惜しいが仕方ない。

『すみません、2人とも。急用が入ったので応答が不可能になります。また何かあればこちらに書き込んでください。』

『了解です。』

『わ、わかりました。』

『諦めろ、とは言いません。トレーナーでもないですし、私が単に三冠を重視してないだけというのもあります。ですが…色々と対策はあるはずです。私も模索し続けますが、難しいという事だけ頭に入れておいてくれると助かります。』

『はい。色々ありがとうございます。』

雑にだが場を切り上げ、急いでブログを開き制作にかかる。存命人物の記述については、慎重かつより正確な情報の詳細が求められるので、より一層気を配る必要があった。

それに…これは唯の賭けで、我儘な押し付けである。

たかが3人を集めたサイトよりも、万をも超えたブログの発言の方が見る人が多くなるのは結果として見えている。付け加えるなら炎上したとしても、意識を埋め込むか埋め込まないかの違いだけで、目的意識と達成するためのプランを作るくらいは出来ると思いたい。

前世と同じ競馬をやっている感覚に近いかもしれない。ウマ娘の未来のために、彼らが受け継いできた血と魂を信じてみよう。そうとなれば、トップを動かさなければ話にならない。URAの腰は前世ほどでは無いにしても、重いものは重い。加えて前世と同じように法治国家だからこそその、ギリギリのラインを攻める以外に方法が無いのも事実である。

もう一つ気がかりなのは伏兵さんが多忙の身となっている影響で、力を借りられない事だが…そこはもう1人の化け物に当たってみるとしよう。そうと決まれば、あとはやるだけだ。

転生者としての特権を活かせるのかはわからない。だが、この回収率は是が非でも取りに行かせてもらう。

徹夜は無し。目覚めは良好：朝日は見えないが、休日。時間としては丁度いい頃合いだろう。

こうした一時のテンションに任せて、無我夢中に手を動かしたものは危険物となる時が多い。だからこそ：念には念を置いて会長に確認してもらおうべく、文字を打つ。試合が終わって休日だというのに、礼儀も無く行動に移す辺り感覚も認識も麻痺しているのだろうか、俺は今：無敵の人となっている。

そもそも無敵の人状態にならないければ、話せる精神状態では無いのも事実である。

『おはようございます、ルドルフ会長。まずはこの度の優勝：おめでとうございます。』

『どうした急に。』

『次のブログの内容なのですが、生憎と確認してもらえない人が今居ないので：お時間を頂きたく存じます。』

『成程：なら、等価交換という。』

『お手柔らかに頼みます。』

頼んでおいて言える立場では無いが、適任者を間違えたのかもしれない。

燃え上がるような熱気を静めるようにひんやりとした空気だ。8月27日：朝からどんよりとした雲に覆われて、1日中しとしと：夏にしては珍しく弱い雨が府中で降っている。

さらさらとした髪の毛の先に水滴がいくつも出来上がって、それらが重力に引っ張られる。足元に出来上がっていた水溜りにいくつも落ちて、その波紋に彼女の姿形は歪み、表情を正確に読み取ることが

出来ない。

「このまま引退は…嫌だなあ。」

ぽつぽつと降る雨の音を遮るようにボソツと呟かれたその言葉を発した彼女は、この日ばかりは雲が吹き飛んでいけば良いのに、この日ばかりは邪魔に感じていた。ドリームトロフィーに勝つていれば、アタシを育て上げ導いてくれたトレーナーと今の担当の子に対し、胸を張って去る事が出来たというのにそう簡単に物事は思い通りに進まない。

芦毛のウマ娘は走らない…そのジnkスをオグリキャップと共に常識を塗り替え、初めてダービー制覇を成し遂げたあの子に…地元愛が強かった可愛い後輩に夢を見せようとして挑み続けてこの有り様とは、先輩として情けない姿を見せ続けている。三冠バという偉業が霞んで見える程に、一度も彼女らに追いつけないまま、引退というも格好がつかない。

あたしはあたしであり続けなければならない。皆が常識を破ることを常識としてしまった中で、あたしだけが常識を破れないでいるなんて…タブーを犯した証に傷が付く。

「贅沢に勝ちまくった最後が呆気ないってのもなあ…。参ったなあ、あたしも案外普通だったか。」

タハハつと思わず声が出た。

乾いたような生氣のない笑い声に釣られて、雨に混じった涙が零れ落ちていた。

姉御肌

カンカンつと鳴り響く木槌、カタカタと奥歯を振るわせる男共、それに群がる高額納税者：ポタポタと落ちる汗が彼らの恐怖心を物語っている。俺は寧ろ濡れる理由が別にあるといつてもおかしくないだろう：ここに邪で歪な考えを持った者などいないのだから。

だが彼女達は真剣である。何せ、身体の相性などを確認することが出来ない規約がありながら、長年の経験と勘のみで将来を見通さなければいけない。どれだけ血が貴重でも、どれだけ能力があらうと、一定の恐怖感というものは生殖器官の動きを妨げてしまう。現に女性は子孫を残す期間が限られていることも大きい。よって、この会場は混沌である。

遺伝子操作の入った者の血や誰の血すらもわからない者など、本来は受け入れたくないのだ。

そしてその血は貴重であればあるほどに需要が増えていく。その血を持っているだけで、貴族にとっては一つの地位として獲得できるというものだ。

家族の為に、娘のために、より吟味しその先を予想して選択しなければならぬ。

そして男も男で取捨選択の猶予を少しでも見つけなければならぬのも事実であった。命の危機に瀕したわけではなく、長年行われてきた育みの中で芽生えた遺伝子に刻み込まれて、積み重なってきた経験則から働くものなのだろうが、こうした場で発狂してしまう人も中にはいる：どれだけ試験をクリアしようと、だ。そうしたイレギュラーやエラーは人でも、馬でも、必ず起きてしまう。

その分、発狂を少しでもしてしまおうと、そうした趣味嗜好を持つお嬢様の手へと渡ってしまい、さらに地獄へとつきすすんでしまおうものだ。

如何に拒否をしようとしてここへ選ばれたものは、ある種の楽園送りと

評される。これは毎年のように行われる行事であり、選ばれた者だけがここへ辿り着けるといふ事となる。

さて、長々と語ったが…では俺はどうなのかというと、意図してここへやってきたのは事実だ。

自らの運命が決まってしまうと同時に種として、ある種管理されてしまうこの世の中で…そこに、俺は立っている。文字通り勃っている。雑種の血がここにやってくる事はまずないのだが、どうやら評価されるに値したらしい。

服装で隠れていようと、目隠しをされていようと、濃密な女性の香りは濃厚で久方ぶりだ。何処となく雰囲気でわかる王族の高潔さも混じり、普段の生活からは味わえない程よい若い雌の香りが鼻に侵入して、俺の脳からドバドバと神経伝達物質を流していく。そもそも年齢上限が決められている上で、ここにはお姉さま方しかないというのも要因だろう。その中にはウマ娘の富豪の娘もいるだろうが、大半は男の潜在能力を見抜く上で、親或いは姉妹、使用人と相談しながら買うのだろう。…その光景を想像しただけで身を震わせるほどに、俺は間違いなく魂が輝いていたのかもしれない。普通は買手が付かないだろう俺に対して、セリ特有の大きな声が発せられた時は鳥肌が立ったものだ。

見よ、そして慄け。これが俺の全てだ。何かに背を押されて俺はここへ辿り着いた本物の馬鹿を見よ。

俺は自らを売りに出す。

その日が訪れるまで、そう遠くは無かった。あの出来事があったからこそ、俺はここへ辿り着いた。

『確かにアンカースリップのガスマスクは、そうした諸事情による

ものだが：他人がブログで書いて良い内容なのかが定かでは無いな。走ることにすら出来ず舞台上に立ち上がらないであろうウマ娘だった子が、努力をし続けて勝ち取った御伽話を引き出して、やる気を上げようという狙いだろう。ただそれならば：諦めなければいつか夢が叶う、という流れを組んで勢いが生まれるとすればブライターデイの方がネタとして濃いと思うが、そちらに路線変更をするという手は？』

『今年のアメリカーニ冠ウマ娘ですか。ただ彼女の場合は、あまりにもデリケートな話題が多いので：彼女自身の炎上ネタとかも多いですし。もし逆鱗にでも触れたら、最悪食われるかもしれません。』

サンデーサイレンス、イージーゴアの名勝負は名前は変われど、日本でも話題となった。特にサンデーサイレンス：ブライターデイの方はジャパンカップが開催する間近に来日する予定があるという情報もあるとかないとか：真意は定かではないが、日本に来て何をするのだろうか。金銭面含め、振り回される必要はこの世界では無い筈だが：一体何を企んでいるのだろうか。歌でも歌うんか？

とはいえ、今はそれよりもどうするか：だ。

『まあ、そうだな：流石に人は食べないだろうが、それを真に否定出来ない自分があるのが彼女らしいというか：しかしなんでまた急に、こんな思い立った行動を？』

『相談を受けました。長距離戦を逃げで勝ちたいと。』

『それは：君はなんて答えたんだい？』

『難しい、と言葉を濁さずに伝えてここに居ます。』

『0点の回答だな。まあ：難しいのは否定出来ないが。』

そう、単純に偉業なのだ。例えばダービーで勝つ：これは前世で言えば7000分の1という認識が強い。三冠馬が世に出てくる確率は、俺の寿命が幾らあっても足りない。その点長距離を逃げで制するというのは、それに比べれば簡単にはなるだろう。ほんの僅かな差でしか無いが：1勝出来るかがそもそもシビアな世界だ。

加えて長距離レースの少なさや価値の低下が露骨にあるとは言え、有マを長距離と捉えるかはこの際定義等全てを置いて、G1で狙うならば春の天皇賞ではなく、菊花賞が妥当だろう。取り分け最初に目

標を高く持つか低く持つかは、人によって程度の差はあれど…現実を知っている人ほど成果は上げやすい事はウマ娘にも当てはまるはずだ。さて、前世で長距離を制した馬は果たして何頭であろうか…。

サラブレッドは常に進化し続けた…その証としてルドルフの偉業もあつたといつても過言では無い。それに至るまでの道のりは、彼が生まれるより遙か前からあつたからこそ…だが、その進化の形が異なつたのがウマ娘と馬の違いだろう。その大きすぎる歪みと現実という高い壁が絡まってしまった時、俺にはどうすることもできないまま、これでどうしろというのだ。

この世界での馬を美少女化した、ある種のアスリートという点…ネット上では速く走るコツを載せた動画や講座というものは確かに存在する。

しかし、それだけでは足りない。どれだけディープリンパクトの走りを実似ようと、生まれ持った才に勝てる事は稀である。

上下運動が少ない、あの流れるような足を見る事はこの先そうないだろう。

だが、知識として知る上で参考になるものは全て知っていた方が、成長は速い。それはウマ娘の走り方に限った話ではないのもまた、事実である。

『だからこそその彼女か。』

『本人が語るのと、別人が語るのではまた違ってきます。ですが、コンセプトとしては今言った通りです。彼女はその体質を乗り越えたウマ娘ですから。』

だが、それら不安要素に打ち勝つウマ娘がいるのも事実であり、ミホノブルボンはそこに打ち勝ち成し遂げた馬だった。

とはいえ、この案が通るのはまず無いだろう。それは知っている。こんな事をブログで書けばそれこそ炎上では済まされない。

『拝見するまでも無く、私の答えは今のところ却下だね。まず相談

者本人に対して失礼極まりないものだ。断じてこれは君の物語では無いし、独りよがりなものでもない。集客率という点では悪くは無い手だが、今回は否定させてもらおう。』

『そうですか…。まあ、そう言っただけ有難いです。』

『君が作ったブログなのだろう？ならば君自身が：君の想いを書かなければ、その相談者には伝わらないと私は思う。前にも同じような出来事があったね：状況は違うが、個々に目を向けるのは得策では無い：と上の立場に立つと考えが固執してしまうのも悪い癖ではあるが：君の影響力は少なくとも個々人に向けて発するものとは訳が違う。勿論、これも綺麗事だが：少しばかり私は君に期待をしすぎてしまっていたようだ。今の君には何の価値も感じない。』

時間をかけてでもいい：君自身が本当に納得する産物を持つて欲しい。その時を楽しみにしているよ。』

その言葉を皮切りに、彼女からチャットの表示が来ることはなかった。

呆気なく散った産物を前に、俺はまた頭を捻らせる。予想はしていても、これ以上の策がないのも現実である。俺が持っているのは記憶の片隅にしか無いような前世の情報と、紙切れ同然のデータ…。

あとは性別が男というだけの、何も持ち合わせていないただの人間だ。

実際に、手としてはある。

男の俺が少しでも肌を露出し、バイクにでも乗って彼女達と同じように走ればいい。

だがこの禁じ手はそれこそ信頼性が高く、そのウマ娘の精神力が高くなければ成立しない。

そんな仲まで到達した時には、本格化を終えて既に何年も先の話だ。さらに言えば、そうした関係まで到達するかどうかも不透明である。第一、ウマ娘の身体も精神も保たないからこそ禁じられている手段なのだ。

俺は無意識に手を伸ばす。今まで書いてきた俺が生きた証であるノートを広げ、びっしりと書かれた殴り書きに目を移してもうこれしか無い、と奮起するしか無かった。

相談者の情報を整理すると：1人目の方に相談をしてきた事を踏まえると3人目と同期、または年下である可能性があるということ为前提とし：相談をしてくるということは、それなりに良好な関係を築いている事が絶対条件として組み込まなければ前提が崩れる。でなければ、俺たちの会話を時間を予定が過ぎても待つていた点における説明が付かない。共通点は逃げ戦法だということは確定済みであるが、1人目がここに出入りする時間が多い分交流関係そのものを把握することは不可能だ。

中等部に絞ると大体1000人：雑に振り分けて250人が逃げであるとして、そこから長距離も走れる可能性がある子を絞る。本格化の様子を確認出来るかはこちらから得られる情報は限られているから、トレーナーでインターネットに精通している人が載せた写真や、新聞記者等の情報を参照して予測するしかないだろうが…

どうしてもわからないところは、この際捨てるとしてあとはその子の運に賭け様子を伺うプランでいこう。

クライアントとの関係は良好を保つに越したことは無い、即ち迅速かつ丁寧な情報を選出しなければならぬ。早寝早起きを心掛けてなるべく精神状態をいつも以上に安定させよう。そうすれば妙に観察眼の高い愛さんの監視の目も、掻い潜れるはずだ。

そう…その計画は思いの外順調に進む筈だった。

「中野愛です、入室の許可をお願いします。」

その可愛らしい声からは考えられないほどに、彼女の目は笑っていない。笑顔にしてはどこか無理をしているような、そんな印象を受けた。

まさか、あの騒動のことについて問われるとはこの時、考えもしなかったのである。

いつも通りに荷物を運び、俺の資料室へと彼女が踏み込んだ時…彼女は振り返るや否や、眉に力を入れ拳をプルプルとさせわなわなと震えていた。

その時には既に、俺の身体は土下座をしていた。鬼の形相をした彼女に、軽い頭を下げている。彼女の顔を見ようとすることすら、今は許されないような気がしていた。

普段の声からは考えられないような、ドスの効いた声は床に汗がポタツと落ちる音が部屋に響くようだった。

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど…良いかなあ？」

この言葉で、俺は無力だと思いつた。身体に電気が走ったかのように言うことが聞かなかった。

「君は最年少でここににいるけど、商品であると言う自覚があるのかどうか…これだけ聞かせてくれない？お姉ちゃん…君の回答次第じゃ、本気で怒るの。」

恐らくこの監視員という職業で、よりにもよってセリに出す立場ともなれば彼女の発言はごもつともだ。なんたつて彼女の生計を建てる上で、俺の体格、血統、健康状態に加えて、より女の人に対して無害であるかどうか、が関わっているのだから。

俺の場合、血統に関してはどうにもならないが…だからこそ、このポテンシャル故の自信があるからこそその油断ではある。アスリート並ではないとはいえ、前世に比べればハードルは圧倒的に低い分、肉体改造のレベルは格段に落ちたせいか、つつい趣味へと走ってしまったのは罪深いのかも知れない。こんな世界だからこそ楽しみもそれだけ少ないのだ…なんていっても前世での普通を知らない人達にこの事を言えば、今度こそ俺は病院送り待った無しだろう考えを持っているためだ。

どの道、今この状況を打破する手札も手段も無い。

半分はヤケクソなのだろう…この監視のもとで、いつ日の目を浴びれるのかわからない日常を学園の近くで味わい続けるなど、拷問に近い業だ。そういう事に対して一定の癖がないであろう大半の男は、これから世に繰り出されることへの恐怖や女性に対しての耐性の無さによるものだろうが…取り分けウマ娘には慣れてもらわないと、ただでさえ地位も力も獲得しているのだ。

学園から近いというだけで発狂してしまう人も居るのだから仕方がない。ここはそうしたセールに出される前の、所謂前世という生産

場所である。取り分けここの配属先は中央に最も近い…当然、求められるレベルは必然的に高くなる。そのリスクとして精神が病んでしまう男が多発してしまう事もあるが…俺にとっては些細な事だった。

だが、そんな言い分は彼女には通用しない。それとこれとは関係なく、お姉ちゃんは怒っている。これが現在進行形で行われている惨状である。主に俺の情報価値の危険性についてのこと…だが、転生したという記憶がある以上、俺はこの世界に柔軟に対応出来るほど器用ではない。こんなむさ苦しい社会に身を全て任せていけば、それこそ神経が苛立って何をしでかすか、自分でもわからないのだ。

そして俺はその事に恐怖心を抱いている。だが、だからといって彼女に対し甘えていいという事でもない。それも理解していたつもりだった…まさか、バレているとは思ってもいなかった。

「あたし、前にも言ったよね？次不可解な行動をとったら、上に報告をするって…言ったよね？ね？」

「本当にすみませんでした。」

ごもつともである。よくもまあ一年も耐えたと思う。前の担当者とは他の男と比べて異質すぎて投げ出したから、本当に良くここまで付き合えたな、と上から目線で判断出来てしまう程に、彼女は実に勤勉というべきか…面倒見が良い。

「君ねえ…この際だから言うけど、この前のネットでの一件といい、あたしの胃を弄ぶゲームでもしているの？守秘義務を守る身にもなってくれない？いくら体調管理を戻したからと言って、あんな行動が許されるとでも思ったの？バレなかったから良かったけど…。」

「エツ…モシカシテデスクド、ゼンブバレテマシタア…？」

「当たり前だよ、一年も君を監視してきたんだから…監視員舐めんな。他の部署の人は気付かなくてもあたしが気付かないなんて事、あるわけないでしょ。トレンドに上がっていた写真の内容が、前に見させてもらったノートの内容と酷似していたから…まあ、あたししか知

らないだろうし大丈夫だろうけど。」

「oh……………」

流石お姉ちゃん…歴戦の覇者のような貫禄だ。

「こういう身近な人の秘密を知ってというのは慣れているからまだマシだと思ってたけど、君が男でしかもまだ未登録の商品つてなるとさ…ここ最近で一番、叫びたくなくなるくらいに我慢したんだから。前まで参加者が少なかったからまだ平気だったのに、君が現れてから9人目だよ！」

「そ、それはその…なんとというか…ご苦労様です。いや、ご愁傷様です。」

俺も入れて彼女の精神を蝕んでいる人が10人もいる事について、気になってしょうがないが…。相当胃が損傷していそうな予感がしてならない。流石に甘え過ぎたのだろう。これに関しては俺が悪い、社会も悪い。正直、世の女性は男性に優しくしてほしいと思う。そして時折鞭を入れてほしい。それで男たちは勢いよく声に出す勢いで、走るといふのに。少なくとも俺は走る。鞭を入れなくても走る。走って掛かって失速していくのだろう。

「一旦シメてあげようか…お姉ちゃんを無礼てるんだよね？無礼ているんだよねえ…？」

「いえ、滅相もございません。」

新手のそういうプレイと言えばそれで済ませられるのかもしれないが、少しばかりちびりそうだ。これは俺が始めてしまった事が故の、自業自得とも呼べるものだ。反省を促してカボチャ頭を被り、踊りを披露するくらいには…反省はしている。

そしてそう見えない事についても反省をしている。

「あ…頭が痛くなってきた。」

「いや、本当…ごめん。バズった理由が男疑惑だなんて思わなかったからさ。」

その言葉が彼女の耳に入った時、彼女の沸点が到達した事は誰が見ても当然であったのだろうが、生憎と俺は下を向いていた為、その様子の変化を感じ取れていなかった。

「言い訳無用…だよ。君は…君が、本当に男の子なのかわからなくなってきた。もうこのアルバイトを辞めても良いかな…なんて思わせた事が何度あったのかな。これ以上は私が私でいることに本気で耐えきれなくなっちゃう、なんて葛藤があった事なんて知らない癖に。これは君が悪いんだから。」

何かの冗談だと思っていた。珍しく弱々しい彼女の姿が、何か、彼女らしくない耳を疑うような発言と共に解き放たれた一言で、恐る恐る顔を見上げて初めて俺は状況を理解した。

「前任者の報告を見た時は驚いたけど、発狂している理由もウマ娘が怖いからじゃない…ウマ娘に対して何も出来ないことから来るもどかしさからでしょ？…なら聞くけど、君にとってあたしは何なの？」

彼女の影がこちらへと近づいてくる。はあはあと漏れる息が妙に色つぽく、その様子を伺うように覗けば、目が少し潤みながら頬を赤くしている。ゴグツと彼女の喉が鳴り、それを聞いて冷静になった時には、誰の目に映っても明らかであった。生唾を飲む、といった表現があるがまさにそれだ。

既に彼女は出来上がっていた事を知らせていたのだ。

「君が悪いんだよ…こんな男の子がいるなんて知っていたら、私は…こんな半端な、クソ女郎にならずに済んだのに…。もうわからないの…あたしは、あたしには…君が、もう。男としての自覚が無いと感じてしまう。こんな男性はこの先見る事も無いって思っているのに、姉弟のような仲になって…でも、君はウマ娘を犯したいし、犯してほしいんだよね？あたしに…あたしも実は犯されたいんでしょ？それとも…誰とも知らない女の人からの良かったの？あたしは君と…。」

ブツブツと呟くようにして露わになった彼女の豹変さは、俺をジリジリと後退させるほどに迫るものがあつた。まるでここに人生の全てを賭けても良いと思つていような、そんな氣迫を放つていた。確かに美人で可愛らしい子だ。少し力強いが彼女に犯されるなら本望と思える程に、俺は彼女に惹かれていたのかもしれない。それは否定しない。既に臨戦態勢へと入つても不思議では無い。

だが、現実とは違つた。

「そういうプレイ？そんな事も知つているんだ：怯えちゃつて可愛い：。それでも私達の仲じゃん。ねえ、したいんでしょ？あれだけ際どい格好までして、あれだけ匂いを放つて：あれだけ近寄つてくれたのに。あたしが誰だかわからないまま、名前を持つていない君があんな：熱心にさ。もうわからないの、あたしはどうしたらいいのかな？」

俺は後ずさる。彼女の色っぽい手の動き、仕草や目、震えた声に心を奪われながら、俺は卑しいまま犯されるといふ事を期待しているのに、そういう人間だと自覚しているのに、彼女から引くように逃げたくて仕方がなかつた。

覚悟はあつた、こうなつても良いようにしていた。だからこうして：その状況まで捉えた。誰でもいいというのは嘘では無いにしても、好意的に接している彼女がこうなつたのは嬉しいと思う。

だのに、身体は依然として否定し続ける。

「あたしを真つ向から否定しないんだ：こんなことをされても、否定しないんだ：それつてもう答えだよ。もう：限界なんだけど：良いの？この部屋の防音機能、：相当の高さなんだよ？早く緊急時用のボタンを押さないと、あたしを止められないよ？1人で生活出来るくらい、君は評価されているんだから。」

その氣持ちの整理がつかないまま、壁際へと追い込まれた時にはもう：彼女は目と鼻の先にいた。彼女もまた、心の整理がつかないままここまで来た。混乱している俺の氣持ちを察してか、ゆっくりと獲物を捕らえたかのように、じつくりと味わうかのようにふるつとしている唇を舐めとつていた彼女を表す言葉は妖艶、普段の彼女からは考え

られない色気と女の香りが俺の脳内物質を垂れ流し、血流が苛立つてドクンドクンと脈打つのだ。

それは彼女も同じだろう。

「早く否定してよ……戻れなくなるよ?」

その気持ちには応えられない。犯されるのだ。いよいよ……ここで、これがバレれば互いに終わってしまうかもしれないのに、俺は彼女を犯し、彼女は俺を犯すのだ。

互いに欲に塗れたまま、溺れるように吞まれて、俺たちはきつと最後の最後に至るまで、俺も彼女も止まることなく犯し尽くすのだろう。卑しいまま、互いに知らないふりをして生きていくのだろう。互いに墓まで持っていくのだろう。

互いが互いをこの空間ごと支配していた。

「もう一度言うけど、今なら引き返せるから……あたしもこんなことは望んでいない……けど、君は助けを呼ばない。呼ぼうとすらしない。だって君は嫌がっていないから……あたしを信頼してる。そういう目をしている。怯えていても最後はそういう目をする。そうなるかわかっているの。君の鼓動がそう言ってるから。」

彼女の目には俺が映っている。お互いに身体から出た膨らみには目も暮れず、互いが互いの瞳を見ている。お互いの鼻息が肌に伝わって撫でている。生温い熱と一定のリズムで、ラップタイムを計測しているかの如く……段々と、徐々に、じわじわと更新されていく。

「ねえ……そうだよな? 君だけはそうなんだよね?」

彼女の透き通った瞳に映った俺の表情は、獲物として食われてしまう恐怖に駆られた子ウサギそのものだった。彼女もまた潤んでいた。頬に流れた涙が落ちた時、

「ふふっ、 やつと……ここまで掴んだよ。あたしなの……あたしがあなた

の夢を叶えるの……。」

そうしてゆつくりと頬に触れたその手からは考えられないほどに、ペチツと音を優しく奏でたその指先の細さと、我が子を包みこむような暖かさを前に、目を閉じてその時を待った。

但し、その違和感は唐突に俺を現実へと戻す。

その違和感は一瞬にして、思考がリセットされ俺の頭を冷静にさせていた。彼女の手からは考えられない程に弱々しく、異様に熱かったからだ。お蔭でその異常さに対応出来たのかもしれない。

「はっ。」

「はあはあ……やっぱり……ダメみたい。ちよつとだけ……良いかな、本当……ごめんね。」

そうして彼女は俺の身体に全てを預けるようにして倒れ込む。大丈夫か？と声をかけながら、抱きしめるように彼女を支えなんとか体勢を整える。もたれかかる彼女の吐息がより一層、肌を刺激するのを我慢している途中、彼女の重みとは別の重さが俺自身の身体を伝ってから床へと落ちた。

ゴドンツと重量感のある帽子に、一瞬思考が停止する。音からして人間がつけて耐えられるようなものではないものであったからだ。そしてその視線の先を見ると彼女の頭を重視して見えなかったものが、ちよつとした空間の歪みとして表れている。こんな歪みを見るのは初めてであった。

振り返って帽子を確認すると、帽子とは思えないほどの重さとサトノ家の紋章が書かれた機械のようだ。どのような原理で動いているのかは不明ではあるが、今の衝撃で機器に何かトラブルが発生したらしい。

電源のスイッチらしきものを完全に切るとホログラムと似たような原理なのだろうか、彼女の虚な瞳の色や顔のちよつとした雰囲気が変わっていく。何より頭になかったものが現れ始めた時……既にホモ・サピエンス特有の耳は消えていた。新たに元々あった場所に、久しぶりに生で見たウマ娘特有の耳があった。そこで初めて彼女の本当の

姿を知って、俺はがっかりした。気絶癖すらも凌駕して、俺の心はズタボロのぐちゃぐちゃに壊されていた。

そこに居た彼女の名前を俺は知っている。

将来のダービーウマ娘：アイネスフウジンがそこに居た。

俺は一年もの間接してきた彼女の本当の姿を、こんな形で知った事で動揺を隠せないでいた。

彼女がウマ娘だと判明した事はまだ良い。だが、彼女はプリティダービーに登場するような、今まで出会っていた改名化された人達ではなく、前世の魂をそのまま受け継いだ謂わば名馬中の名馬であり、何よりもゲームで幾度となく育ててきた子の内の1人である。

その彼女を知らないまま、彼女も俺も互いを汚そうとした。その事実が頭の中を駆け巡り、嗚咽のような叫び声を上げたくなる程だ。

加えて、体調が悪化したのは誰のせいだ？

9月10日にレースがある彼女にここまで負荷をかけたのは誰だ？

その事実能耐えきれぬわけもなく、吐きそうになる身に鞭を打つ。こんな事がバレれば、彼女も俺もタダではすまないだろう。

だからこそ、せめてもの罪滅ぼしのために……と彼女を寝室へと運

ぶ。ウマ娘といえど、あべこべといえど、やはり女の子だ。思ったより身体が軽い：一体こんな身体のどこから、人外じみた力が発揮されるのだろう：なんて考えをしていないと、いつ気絶してしまうかわからない為、何としてでも彼女を運ぶという意味を持って挑んだ。

アイネスフウジンを運び終え、急いでスマホを手に取り担当医を呼ぶ事は：無い。

「待つて：：報告は私からするから。これは君のせいじゃ：：ない。」
その手は、彼女自身のか細い声と一緒になって塞がれた。